

福井県埋蔵文化財調査報告 第186集

# 南 稻 越 遺 跡

—北陸新幹線建設事業に伴う調査11—

2 0 2 4

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

## 序 文

このたび、北陸新幹線建設事業に伴って、あわら市伊井地係において平成27・28・30年度に発掘を実施しました南稲越遺跡の調査成果がまとまり、報告書を刊行することとなりました。

南稲越遺跡は、竹田川左岸の自然堤防上に立地する集落遺跡です。近接して、弥生時代後期から古墳時代前期の玉作り遺跡として知られた伊井遺跡が位置しています。また、これまでも田島川流域に位置する諸遺跡の本格調査や試掘調査が旧金津町およびあわら市によって行われており、あわら市域では調査例が多い範囲にあたります。

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる多くの掘立柱建物のほか、古代の土坑や中世の井戸などを検出しました。また、多くの土師器や須恵器などの遺物が出土しました。これまでの発掘調査の成果から、断続的に展開した集落であったと考えられます。

今後、この調査の成果が広く公開、活用され、埋蔵文化財に対する理解をより一層深めていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご配慮を頂きましたことを、深く感謝申し上げます。

令和6年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 中 川 佳 三

## 例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、北陸新幹線建設事業に伴い、平成27・28・30年度に実施した南福越遺跡(福井県あわら市伊井所在)の発掘調査報告書である。
- 2 南福越遺跡の調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査の支援業務は、株式会社イビソク(平成27年度)、株式会社ユニオン(平成28年度)、橋本技術株式会社(平成30年度)に委託した。
- 4 発掘調査は、平成27年(2015)11月1日から12月28日まで、平成28年(2016)7月1日から12月28日まで、平成30年(2018)4月1日から6月30日までの3か年にわたって実施した。担当者は以下のとおりである。  
平成27年度：鈴木篤英 鈴間智子 平成28年度：鈴木篤英 榑部正典 野路昌嗣 三原翔吾  
平成30年度：鈴木篤英  
出土遺物の整理作業は平成28年4月1日から令和6年(2024)3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 5 本書の編集は野路があたり、赤澤徳明が分担して執筆した。執筆の分担は以下の通りである。  
野路：第1章～第3章、第4章第5節、第5章第1節 赤澤：第4章第1節～第4節、第6節、第5章第2節
- 6 本書に掲載した遺構図ならびに空中写真は、前記の各年度に委託した各社が作成したものであり、一部改変して使用した。また、遺構図トレースはホクセイテック株式会社に委託した。
- 7 南福越遺跡に関するこれまでの成果発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものとする。
- 8 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は世界測地系第VI系に基づく。
- 9 本書で用いた遺構の略記号は、次のとおりである。  
堅穴建物：SI、掘立柱建物：SB、土坑：SK、溝：SD、流路：SR、柱穴・小穴：P、不明遺構：SX、包含層：X  
その他、土層断面地点にはSを、遺構や包含層から遺物が単体で出土した地点にはX00○の略記号を用いた。
- 10 本書における遺物観察表においては、土器の胎土を便宜上、以下の7つに分類している。  
① 微砂粒(直径1mm)以下を少量含む。 ② 微砂粒(直径1mm以下)を多量含む。  
③ 微砂粒(直径1mm以下)と砂粒(直径1～2mm)を少量含む。 ④ 砂粒(直径1～2mm)を少量含む。  
⑤ 砂粒(直径1～2mm)を多量含む。 ⑥ 小石(直径2mm以上)を含む。  
⑦ 砂粒(直径1～2mm)と小石(直径2mm以上)を多量含む。
- 11 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 本発掘調査ならびに遺物整理にあたり、次の方々および機関のご協力やご助言を頂いた(順不同、敬称略)。  
あわら市南福越地区 あわら市教育委員会 福井県未来創造部新幹線建設推進課
- 13 発掘調査には、地元の方々の参加、ご協力を得た。遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および会計年度任用職員があった。

## 目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 遺構	11
第1節 I区の概要	11
第2節 I区の遺構	13
第3節 II・III区の概要	17
第4節 II・III区の遺構	23
第4章 遺物	49
第1節 土器・土製品	49
1 弥生時代後半から古墳時代前期の土器	2 古代の土器
3 中世の土器	4 土製品
第2節 石器・石製品・その他の遺物	147
1 遺構出土の石器・石製品	2 包含層出土の石器・石製品
3 王作り関連遺物	4 その他の遺物
第5章 まとめ	153
第1節 遺跡について	153
第2節 いわゆる「タタキ甕」の出現について	153

## 写真図版目次

図版第1 遺跡	図版第11 Ⅱ区 遺構
(1) I区(平成27年度調査区)近景	(1) Ⅱ区SK16 (2) Ⅱ区SK17・SK20
(2) Ⅱ区(平成28年度調査区)近景	(3) Ⅱ区SK23 (4) Ⅱ区SK26検出面
図版第2 遺跡・遺構	(5) Ⅱ区SK26上位面 (6) Ⅱ区SK26中位面
(1) I区全景 (2) I区 SB2・SB3	(7) Ⅱ区SK26完掘状況
図版第3 I区 遺構	図版第12 Ⅱ区 遺構
(1) I区SB1 (2) I区SK1 (3) I区SK2	(1) Ⅱ区SK29 (2) Ⅱ区SK29土器出土状況
(4) I区SK3 (5) I区SK4	(3) Ⅱ区SK33 (4) Ⅱ区SK27 (5) Ⅱ区SK28
(6) I区SK4 遺物出土状況	(6) Ⅱ区SK31 (7) Ⅱ区SK32
(7) I区SK4完掘状況 (8) 23～26列掘削状況	図版第13 Ⅱ・Ⅲ区遺構
図版第4 遺跡	(1) Ⅲ区SK1 (2) Ⅲ区SK2 (3) Ⅱ区SK22
(1) 1～13列全景 (2) 15～19列全景	(4) Ⅱ区P43 (5) Ⅱ区P64 (6) Ⅱ区P92
図版第5 遺跡	(7) Ⅱ区SD2 (8) Ⅱ区SD2
(1) 17～20列全景	(9) Ⅱ区SD2・SD4
(2) Ⅲ区(平成30年度調査区)全景	図版第14 Ⅱ区 遺構
図版第6 Ⅱ区 遺構	(1) Ⅱ区SD5土器出土状況 (2) Ⅱ区SD8
(1) Ⅱ区SI1 (2) Ⅱ区SI2	(3) Ⅱ区SD23 (4) Ⅱ区SD26土器出土状況
(3) Ⅱ区SI2内SK2 (4) Ⅱ区SI2内P1	(5) Ⅱ区SD24 (6) X004出土状況
(5) Ⅱ区SB1～6 (6) Ⅱ区SB1	(7) X005出土状況 (8) X007出土状況
図版第7 Ⅱ・Ⅲ区 遺構	(9) X006(石杵)出土状況
(1) Ⅱ区SB7 (2) Ⅱ区SB8・SB9	図版第15 遺物 弥生土器・古式土師器
(3) Ⅱ区SB11 (4) Ⅱ区SB10	図版第16 遺物 弥生土器・古式土師器
(5) Ⅱ区SB13南辺 (6) SB16東辺	図版第17 遺物 弥生土器・古式土師器
図版第8 Ⅱ・Ⅲ区遺構	図版第18 遺物 弥生土器・古式土師器
(1) Ⅱ区SE1 (2) Ⅱ区SE2	図版第19 遺物 弥生土器・古式土師器
(3) Ⅱ区SE2完掘状況 (4) Ⅱ区SE3	図版第20 遺物 弥生土器・古式土師器
(5) Ⅱ区SE4 (6) Ⅱ区SE4出土土器	図版第21 遺物 弥生土器・古式土師器
(7) Ⅲ区SE1	図版第22 遺物 弥生土器・古式土師器
図版第9 Ⅱ区 遺構	図版第23 遺物 弥生土器・古式土師器
(1) Ⅱ区SK3 (2) Ⅱ区SK3土器出土状況	図版第24 遺物 弥生土器・古式土師器
(3) Ⅱ区SK6 (4) Ⅱ区SK6土器出土状況	図版第25 遺物 弥生土器・古式土師器
(5) Ⅱ区SK4 (6) Ⅱ区SK5	図版第26 遺物 弥生土器・古式土師器
図版第10 Ⅱ区遺構	図版第27 遺物 弥生土器・古式土師器
(1) Ⅱ区SK8・SK9 (2) Ⅱ区SK8	図版第28 遺物 弥生土器・古式土師器
(3) Ⅱ区SK7 (4) Ⅱ区SK11 (5) Ⅱ区SK13	図版第29 遺物 古代・中世の土器 土製品
(6) Ⅱ区SK12 (7) Ⅱ区SK15	図版第30 遺物 石器・石製品・土関連遺物

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図……………	1	第37図 I区遺構出土弥生土器・古式土師器2…	50
第2図 調査区区割り図……………	2	第38図 I区遺構出土弥生土器・古式土師器3…	51
第3図 発掘作業風景……………	3	第39図 I区遺構出土弥生土器・古式土師器4…	52
第4図 遺跡周辺の地形図……………	5	第40図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器1…	52
第5図 周辺の遺跡分布図……………	7	第41図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器2…	53
第6図 調査区全体図……………	9・10	第42図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器3…	54
第7図 I区土層断面図……………	11	第43図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器4…	55
第8図 I区遺構配置図……………	12	第44図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器5…	56
第9図 I区独立柱建物1……………	12	第45図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器6…	57
第10図 I区独立柱建物2……………	15	第46図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器7…	58
第11図 I区土坑……………	16	第47図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器8…	59
第12図 I区溝……………	17	第48図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器9…	60
第13図 Ⅱ・Ⅲ区土層図……………	18	第49図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器10…	61
第14図 Ⅱ・Ⅲ区遺構配置図①……………	19・20	第50図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器11…	62
第15図 Ⅱ・Ⅲ区遺構配置図②……………	21・22	第51図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器12…	63
第16図 Ⅱ・Ⅲ区建物1……………	24	第52図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器13…	64
第17図 Ⅱ・Ⅲ区建物2……………	25	第53図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器14…	65
第18図 Ⅱ・Ⅲ区建物3……………	27	第54図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器15…	66
第19図 Ⅱ・Ⅲ区建物4……………	28	第55図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器16…	67
第20図 Ⅱ・Ⅲ区建物5……………	29	第56図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器17…	68
第21図 Ⅱ・Ⅲ区建物6……………	31	第57図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器18…	69
第22図 Ⅱ・Ⅲ区井戸1……………	32	第58図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器19…	71
第23図 Ⅱ・Ⅲ区井戸2……………	34	第59図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器20…	72
第24図 Ⅱ・Ⅲ区土坑1……………	35	第60図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器21…	73
第25図 Ⅱ・Ⅲ区土坑2……………	36	第61図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器22…	74
第26図 Ⅱ・Ⅲ区土坑3……………	37	第62図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器23…	75
第27図 Ⅱ・Ⅲ区土坑4……………	38	第63図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器24…	76
第28図 Ⅱ・Ⅲ区土坑5……………	39	第64図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器25…	77
第29図 Ⅱ・Ⅲ区土坑6……………	40	第65図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器26…	78
第30図 Ⅱ・Ⅲ区土坑7……………	41	第66図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器27…	79
第31図 Ⅱ・Ⅲ区溝1……………	43	第67図 Ⅲ区遺構出土弥生土器・古式土師器…………	80
第32図 Ⅱ・Ⅲ区溝2……………	44	第68図 包含層出土弥生土器・古式土師器1…	81
第33図 Ⅱ・Ⅲ区溝3……………	45	第69図 包含層出土弥生土器・古式土師器2…	82
第34図 Ⅱ・Ⅲ区溝4……………	47	第70図 包含層出土弥生土器・古式土師器3…	83
第35図 Ⅱ・Ⅲ区溝5……………	48	第71図 包含層出土弥生土器・古式土師器4…	84
第36図 I区遺構出土弥生土器・古式土師器1…	49	第72図 包含層出土弥生土器・古式土師器5…	85

第73図	包含層出土弥生土器・古式土師器6	87	第90図	包含層出土弥生土器・古式土師器23	107
第74図	包含層出土弥生土器・古式土師器7	88	第91図	包含層出土弥生土器・古式土師器24	108
第75図	包含層出土弥生土器・古式土師器8	89	第92図	包含層出土弥生土器・古式土師器25	109
第76図	包含層出土弥生土器・古式土師器9	90	第93図	縄文土器	110
第77図	包含層出土弥生土器・古式土師器10	92	第94図	古代の土器1	112
第78図	包含層出土弥生土器・古式土師器11	93	第95図	古代の土器2	114
第79図	包含層出土弥生土器・古式土師器12	94	第96図	古代の土器3	115
第80図	包含層出土弥生土器・古式土師器13	96	第97図	古代の土器4	116
第81図	包含層出土弥生土器・古式土師器14	97	第98図	中世の土器・陶磁器1	117
第82図	包含層出土弥生土器・古式土師器15	98	第99図	中世の土器・陶磁器2	118
第83図	包含層出土弥生土器・古式土師器16	99	第100図	土製品	119
第84図	包含層出土弥生土器・古式土師器17	100	第101図	石器・石製品1	148
第85図	包含層出土弥生土器・古式土師器18	101	第102図	石器・石製品2	149
第86図	包含層出土弥生土器・古式土師器19	103	第103図	玉作り関連遺物1	150
第87図	包含層出土弥生土器・古式土師器20	104	第104図	玉作り関連遺物2	151
第88図	包含層出土弥生土器・古式土師器21	105	第105図	金属製品	151
第89図	包含層出土弥生土器・古式土師器22	106			

## 表 目 次

第1表	弥生土器・古式土師器観察表	120	第4表	土製品観察表	146
第2表	縄文土器出土位置一覧表	142	第5表	金属製品観察表	151
第3表	古代・中世の土器・陶磁器観察表	142	第6表	石器・石製品観察表	152

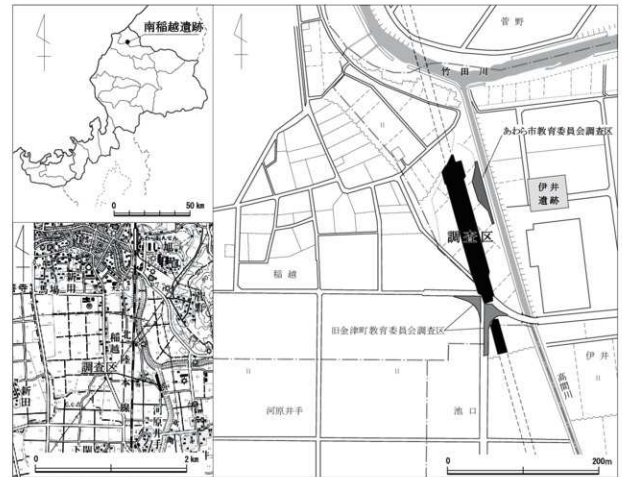
## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯(第1図)

#### 1 経緯

北陸新幹線建設事業は、東京と大阪を結ぶ日本海側の国土軸と位置づけられ、令和6年(2024)の金沢～敦賀間の開業に向けて建設が進められている。この予定路線上に位置するあわら市南稲越遺跡の範囲内において、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構(以下、機構)から福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文)に工事に伴う試掘調査依頼が提出された。

南稲越遺跡は、弥生時代から平安時代の遺物散布地として周知されており、過去には平成5年度(1993)に旧金津町教育委員会(現あわら市教育委員会)が町道改良工事に伴う発掘調査を行い、律令期を中心とした遺構・遺物を確認している。平成16・17年(2004・2005)には、あわら市教育委員会が河川整備事業に伴う発掘調査を行い、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした遺構・遺物を確認した経緯がある。また、高間川を挟んだ東側には、旧金津町教育委員会により工場団地造成に伴い平成2年(1990)に調査が行われた伊井遺跡が隣接し、弥生時代後期から古墳時代前期の玉作関連遺物を含む豊富な遺構・遺物が確認されている。このため、県埋文は事業範囲内の広範囲に及ぶ本格調査が必要になることは確実で



第1図 調査区位置図(縮尺 左上:1/250万・左下:1/50,000・右:1/5,000)

であると判断した。県理文は本格調査の必要範囲を確定するため、1回目の1次調査として市道南側の試掘調査を平成27年(2015)9月16日に行い、遺構・遺物を確認し、機械側に面積520㎡の本格調査が必要である旨を回答した。協議の結果、面積520㎡に途中、機械からの要請により新設農道分の面積30㎡を追加し、平成27年11月2日から同年12月28日まで2次調査である本格調査を行った。その2次調査中の同年11月25日には、1回目の1次調査の南側事業予定地内で2回目の1次調査を行ったが、遺構・遺物は確認できず、本格調査の対象にはならなかった。翌28年(2016)3月2日には、平成27年度の2次調査区と町道を挟んだ北側の事業予定地内において3回目の1次調査を行い、遺構・遺物を確認し、4,150㎡の範囲の本格調査を行うこと、調査範囲南端部の農道や市道が交わる範囲は、仮設の迂回路を設置した後に調査に着手することで機械側と合意し、平成28年7月11日から同年12月9日まで2次調査を行った。その後、平成28年度調査区北端部を東西に拡張する必要が生じたという機械からの要請を受け、平成30年(2018)2月5日に4回目の1次調査を行い、380㎡の範囲の本格調査を行うことになった。3回目の2次調査は、平成30年5月1日から6月29日まで実施した。3年度にわたる本格調査の総面積は5,080㎡である。

調査は年度をまたいで行われたため、以後、本書では各年度を併記する記述の慣習さを避けるため、平成27年度調査区をⅠ区、平成28年度調査区をⅡ区、平成30年度調査区をⅢ区と表記する。

## 2 調査の方法

調査地の現況は水田・畑である。Ⅰ区とⅡ区間の現市道の一部は、旧金津町教育委員会が平成5年度に調査した範囲に該当する。既述したように、過去の調査結果をふまえ、本格調査の必要が想定可能であったことから調査にあたっては全体を通して世界測地系に沿った10m×10mのグリッドを設定し、東西にA～H列を、南北に1～27列を配した。また、Ⅲ区が追加調査となった際は、西側に新たにA'列を配した(第2図)。

遺構番号は、Ⅰ区以外は遺構の規模に関わらず遺物が出土した遺構のみにつけている。掘立柱建物は遺構が出土した柱穴に関わらず、建物を構成すると把握した後に各柱穴に柱穴番号を付した。また、基本的に年度ごとに新たに遺構番号を付けたため、重複する番号も存在する。本書では遺構番号の前にⅠ区SK4などとして表記するが、調査面積が最も広く、多数の遺構・遺物を検出しているⅡ区が記述の主体となるため、遺構番号の前にⅡ区の表記が無いものはⅡ区の遺構を意味する。ただし、Ⅱ・Ⅲ区で確認した建物は通し番号のため、S1・S8の前にⅡ区の表記は無い。包含層はXとも表記している。

なお、発掘調査は、調査の迅速化ならびに円滑な遂行を図るため、その業務の一部を外部に委託して行った。

## 第2節 調査の経過

以下に、調査日誌を抄録する。

### 平成27年度(Ⅰ区)

- 11月9・10日 表土剥ぎ。11日までに事務所設置。
- 11月16日 作業開始。東西南壁にトレンチを掘削。
- 11月19日 G26・27区から包含層掘削と遺構面確認。
- 11月25日 調査区南側の水田で2回目の1次調査。
- 11月26日 追加調査30㎡について打合せ。
- 11月30日 FG23・24区包含層掘削。
- 12月2日 SB1柱穴掘削。G25区で溝(SD1)確認。
- 12月8日 SB2柱穴掘削。
- 12月9日 SD1から越前焼片出土。H24区遺構完掘中。
- 12月10日 SB2写真撮影。
- 12月14日 SK2写真撮影。実測、遺物取上げ後完掘。
- 12月15日 SK3写真撮影。実測、遺物取上げ。
- 12月20日 航空測量1回目(520㎡)。全景写真撮影。
- 12月21日 追加調査区の表土、包含層掘削。
- 12月22日 個別遺構の写真撮影。
- 12月23日 追加調査区の航空測量(30㎡)と写真撮影。
- 12月25日 遺物搬出、器材清掃。
- 12月28日 事務所解体し、現場作業終了。

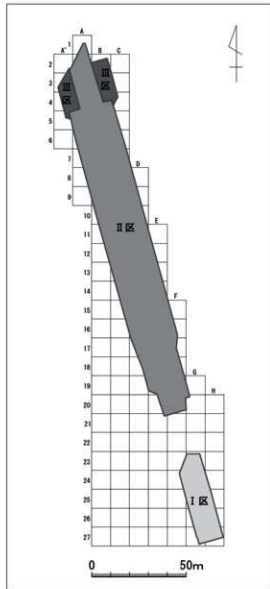
### 平成28年度(Ⅱ区)

- 7月4～7日 表土剥ぎ(1～17区道路まで)。
- 7月25日 作業開始。13～17列東西壁にトレンチ掘削。
- 7月27日 16・17列から包含層掘削。
- 8月2日 C13区で条痕文を有す土器(X001)出土。
- 8月8日 C12・13区、弥生中期の土器、須恵器等出土。E15区、中世の土師質皿少量出土。
- 8月10日 D14区、緑釉陶器出土。
- 8月11～15日 作業休止。
- 8月18日 B11区精査。溝、土坑のプラン確認。
- 8月23日 SE1、SD1・2など掘削開始。
- 8月24日 AB3・4区に東西トレンチ掘削。
- 8月25日 10～12区を中心に精査。溝、小穴等を確認。
- 8月27日 SD1～4や小穴、土坑の掘削。
- 9月2日 S11検出。SD7を確認しトレンチ掘削。
- 9月6日 DE15区を中心に精査し、落込み?を確認。
- 9月7日 S11の周溝を掘削。SK3写真撮影。
- 9月9日 SK6、SD8等掘削開始。B8・9区土坑確認。
- 9月12日 AB8・9区を中心に遺構掘削を行う。
- 9月16日 S11・2平面図作成。

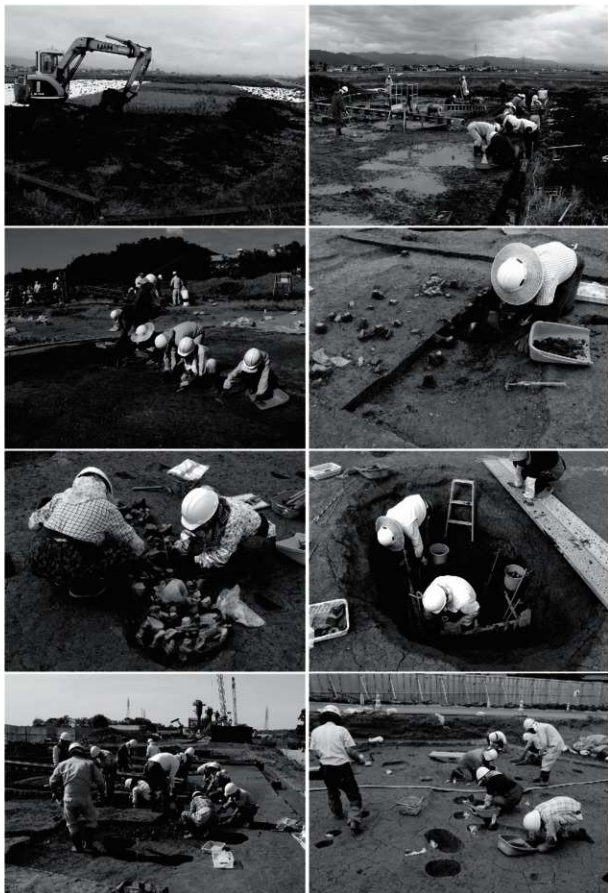
- 9月21日 S11・SK7・8写真撮影。
- 10月3日 SK16底面中央から土師質皿出土。
- 10月4日 17～20区の表土剥ぎを開始。13日まで。
- 10月7日 SE3の掘削を開始する。
- 10月12日 包含層掘削を終了する。
- 10月20日 SD12掘削開始。
- 10月24日 SD7・9以南を掘削し、落込み(SR1)を把握。
- 11月7日 SR1北側周部を検出していく。
- 11月10日 17～20区の旧道路以南の写真撮影と航空測量(1回目)を行う。
- 11月11日 SE4から内黒の塊が出土。
- 11月21日 E16区SR1から石片出土。
- 11月28日 SK33の写真撮影。
- 11月30日 全景写真撮影と航空測量(2回目)を行う。
- 12月6日 SE2の掘方を完掘。SR1追加掘削。
- 12月7日 SE2写真撮影・図化。SR1掘削。
- 12月8日 SR1東壁掘削。器材洗浄。
- 12月9日 土層図作成。器材搬出し、現場作業終了。

### 平成30年度(Ⅲ区)

- 4月4日 東側調査区の表土剥ぎ。
- 4月18日 西側調査区の表土剥ぎ。
- 5月9日 東側調査区の作業開始。全周に排水溝掘削。
- 5月10日 BC2区から包含層掘削。玉村3・4点確認。
- 5月15日 B3区包含層から菅玉1点出土。
- 5月16日 西側調査区A'・3・4区の包含層掘削開始。B3区から勾玉・菅玉出土。
- 5月25日 西側調査区の遺構精査。
- 5月28日 東側調査区の遺構面確認。精査始め。
- 5月29日 東側調査区、南半から遺構掘削開始。
- 6月1日 西側調査区、南半から遺構掘削開始。
- 6月6日 東側調査区的全景写真撮影。
- 6月7日 東側調査区3次元測量を行う。
- 6月14日 東西調査区全景と土坑や建物の写真撮影。
- 6月15日 西側調査区3次元測量。
- 6月18日 掘削土の洗浄作業を中心に補足作業を行う。
- 6月26～28日 器材洗浄・搬出、事務所清掃・解体。
- 6月29日 撤収を完了し現場作業終了。



第2図 調査区区分り図(縮尺1/2,000)



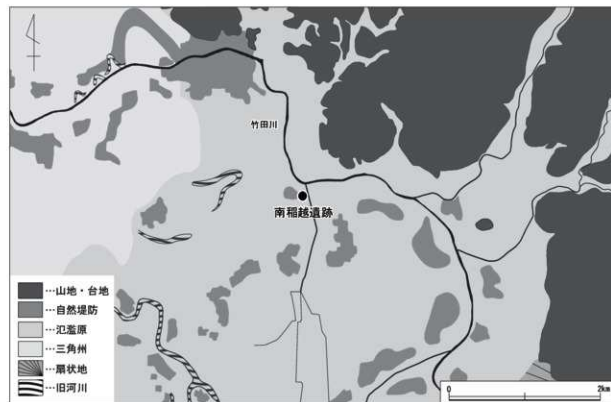
第3図 発掘作業風景

## 第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境 (第4圖)

南稲越遺跡は、福井県嶺北地方北部に広がる坂井平野北端部に位置し、標高は約5～7mを測る。行政区画では、あわら市の南端、坂井市坂井町との市境近くに位置する。あわら市は平成16年(2004)に旧芦原町と旧金津町が合併した市であるが、大まかな地形は、あわら市の北部一帯の大部分を坂井市三国町から続く加越台地・丘陵が占め、南部の一部を九頭竜川以北から広がる坂井平野が占めている。市北部に広がる加越台地は、土地の隆起により形成された洪積世の台地である。標高は、東部と西部で50～80m、中央部では30～40mを測り、各所に急傾斜面を伴う浅く広い谷地形が広がっている。福井県内では標高の低い台地・丘陵地帯が占める割合は低いため、加越台地では多様な土地利用がなされている。また、市南部に広がる坂井平野は、主に九頭竜川以北における呼称である。遺跡周辺は、嶺北地方北東部に位置する加越山地西麓から流れる竹田川・兵庫川などの河川の氾濫によって形成された沖積平野である。これら河川は山地から平野部に出たところで小規模な扇状地を、さらに西側に全体に緩く低平な氾濫原・三角州を形成する過程で、流域には多くの自然堤防や後背湿地を作りだした。坂井平野における氾濫原と三角州の境は不明瞭であるが、地表の性状や堆積物の違い、及び標高5～9m付近で傾斜変換部がみられることなどから区分される。

坂井平野北部を曲流する竹田川やその支流が形成した自然堤防上は、集落の立地条件には好適地であり、現集落や南稲越遺跡をはじめとする遺跡が多数存在している。また、旧河川や湿地の存在を窺わせるような地名が遺跡の近辺に存在することは旧地形を考える上で示唆に富む。



第4図 遺跡周辺の地形図(縮尺1/50,000)

## 第2節 歴史的環境 (第5図)

ここでは南福越遺跡周辺の発掘調査が行われた主要な遺跡について紹介する。

**南福越遺跡** (第5図1) あわら市福越・池口・伊井に所在する。町道拡幅に伴い平成5・6年(1993・1994)に旧金津町教育委員会(以下、旧金津町教委)が、河川整備事業に伴い平成16年(2004)にあわら市教育委員会が発掘調査を行った。前者では、時期は確定出来ないが古代の可能性のある掘立柱建物2棟を検出している。遺物は古代の須恵器・土師器を主体とし、弥生時代終末期や中世のものを含む。後者では、弥生時代終末期から古墳時代前期の土坑や古代の溝、井戸を検出している。

**清江館跡** (第5図7) あわら市大溝に所在する。越前防衛の北方の拠点として朝倉氏の武将である清江氏が拠点とした。町道敷設に伴い、平成5年(1993)に旧金津町教委が発掘調査を行った。遺構としては溝を検出し、遺物は土師質皿、越前焼、染付などが出土した。

**桑野遺跡** (第5図9) あわら市自由ヶ丘に所在する。遺跡は標高20m前後の丘陵上に位置する。土地区画整理・町道改良工事に伴い、平成4～6年(1992～1994)に旧金津町教委が行った。特に、縄文時代早・前期と考える土坑から、球状耳飾などの石製装身具が多数出土した。丘陵斜面からは貝塚を検出している。なお、平成24年(2012)には石製装身具が国重要文化財(考古資料)に指定されている。

**金津新江ノ尻遺跡 下関遺跡** (第5図12・37) あわら市新用に所在する金津新江ノ尻遺跡と坂井市坂井町下関に所在する下関遺跡の2つの遺跡にまたがる発掘調査を県営かんがい排水事業に伴い、平成24年(2012)に県理工が行った。調査範囲においては同一の集落と推定される。遺構は古代の溝と弥生時代中期の井戸、土坑を検出した。遺物には玉作関連遺物も出土し、弥生時代中期を中心とする墓域や廃棄の場からなる集落である。

**矢地山古墳群** (第5図18) あわら市矢地に所在する。墓数や時期などは明確でない。平成10年(1998)に旧金津町教委が矢地山11号墳の範囲・内容確認のための発掘調査を行った。その結果、墳丘の形状や弥生時代後期の遺物が出土したことから、1号墳については弥生時代後期の墳丘墓の可能性もある。

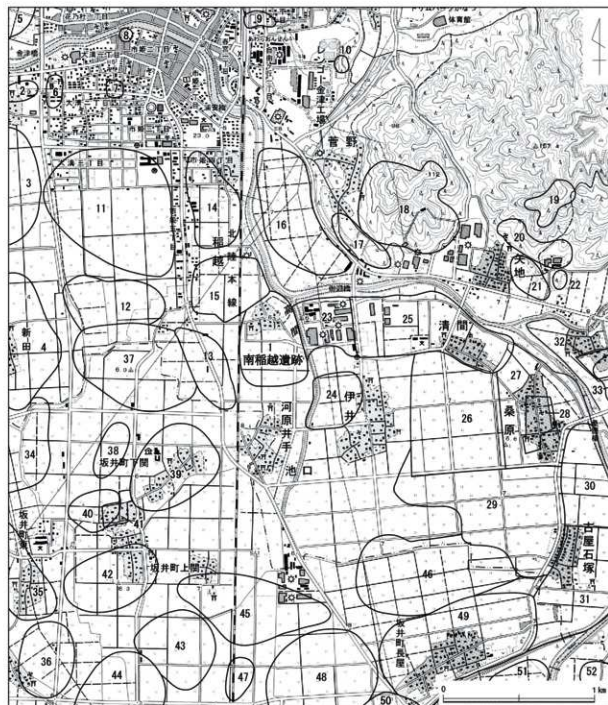
**伊井遺跡** (第5図23) あわら市伊井に所在する。平成2・4年(1990・1992)に工場建設に伴い、旧金津町教委が発掘調査を行った。特に平成2年の調査では、堅穴建物1棟、掘立柱建物4棟をはじめ、弥生時代終末期～古墳時代前期を主体とする遺構・遺物が出土した。また、菅玉および菅玉製作段階の未成品や勾玉、石釧などが出土し、玉作り集落であることが確認された。

**清間遺跡** (第5図25) あわら市清間・伊井に所在する。竹田川の左岸の自然堤防上に位置する。倉庫建設に伴い、平成7・8年(1995・1996)に旧金津町教委が発掘調査を行った。弥生時代後期～終末期を主体とする遺構・遺物を検出したが、建物は確認していない。

**桑原遺跡** (第5図27) あわら市桑原に所在する。圃場整備に伴い、昭和52年(1977)に旧金津町教委が発掘調査を行った。当地域は東大寺領桑原荘の比定地であり、桑原駅の記述から首道が付近を通っていたようである。発掘調査では、荘園に関する遺構・遺物は確認できなかった。

**大間東遺跡** (第5図35) 坂井市坂井町大味・東・蔵垣内に所在する。県道改良工事や県営かんがい排水事業に伴い、平成8・20・21年(1996・2008・2009)に県理工が発掘調査や工事立会を実施した。また、平成10年(1998)には旧坂井町教育委員会が、坂井大間西郷地区遺跡群として調査を行っている。平成8年の調査では、13～14世紀の「地鎮め」と考える銭貨を伴う柱穴を2基確認し、平成20年の調査では、9世紀末の井戸から、「倉」の墨書がある須恵器の皿が出土している。

**関中遺跡** (第5図39) 坂井市坂井町下関に所在する。県営かんがい排水事業に伴い、平成24年(2012)



No.	県番号	遺跡名	14	10075	北福越遺跡	27	10089	桑原遺跡	40	11036	鯉澤遺跡
1	10077	南福越遺跡	15	10076	福越遺跡	28	10090	桑原跡	41	11037	下関遺跡
2	09120	東新寺古戦場跡	16	10078	菅野古墳群	29	10091	古石塚西遺跡	42	11038	上関遺跡
3	09122	東新寺遺跡	17	10079	菅野古墳群	30	10092	古石塚北遺跡	43	11039	上関高田遺跡
4	09125	新田遺跡	18	10080	矢地山古墳群	31	10095	古石塚南遺跡	44	11040	上関高田遺跡
5	10063	北金津西遺跡	19	10081	矢地坂跡	32	10095	御堂尾遺跡	45	11049	高田遺跡
6	10064	馬場跡内遺跡	20	10082	矢地山古墳群	33	10096	御堂尾遺跡	46	11050	武蔵平田遺跡
7	10065	清江遺跡	21	10083	矢地遺跡	34	11029	東寺田遺跡	47	11051	玉木為住遺跡
8	10066	金津奉行跡	22	10084	八皇子山古墳群	35	11030	大間東遺跡	48	11052	河和田遺跡
9	10068	桑野遺跡	23	10085	伊井遺跡	36	11032	下関内遺跡	49	11053	長尾遺跡
10	10071	菅野矢吹田遺跡	24	10086	伊井古田遺跡	37	11033	下関西遺跡	50	11054	河和田遺跡
11	10072	南金津遺跡	25	10087	清間遺跡	38	11034	下関南遺跡	51	11056	御田遺跡
12	10073	金津新江ノ尻遺跡	26	10088	桑原西遺跡	39	11035	関中遺跡	52	13001	里竹遺跡

第5図 周辺の遺跡分布図(1/25,000)



に県埋文が発掘調査を実施した。遺構は溝、素掘り井戸、土坑を中心に検出し、遺物には土師質皿、越前焼、瀬戸美濃焼や木製品がある。13世紀後半と15世紀後半から16世紀前半を中心とする集落であり、遺跡の南西に位置する下関館跡に関連する可能性がある。

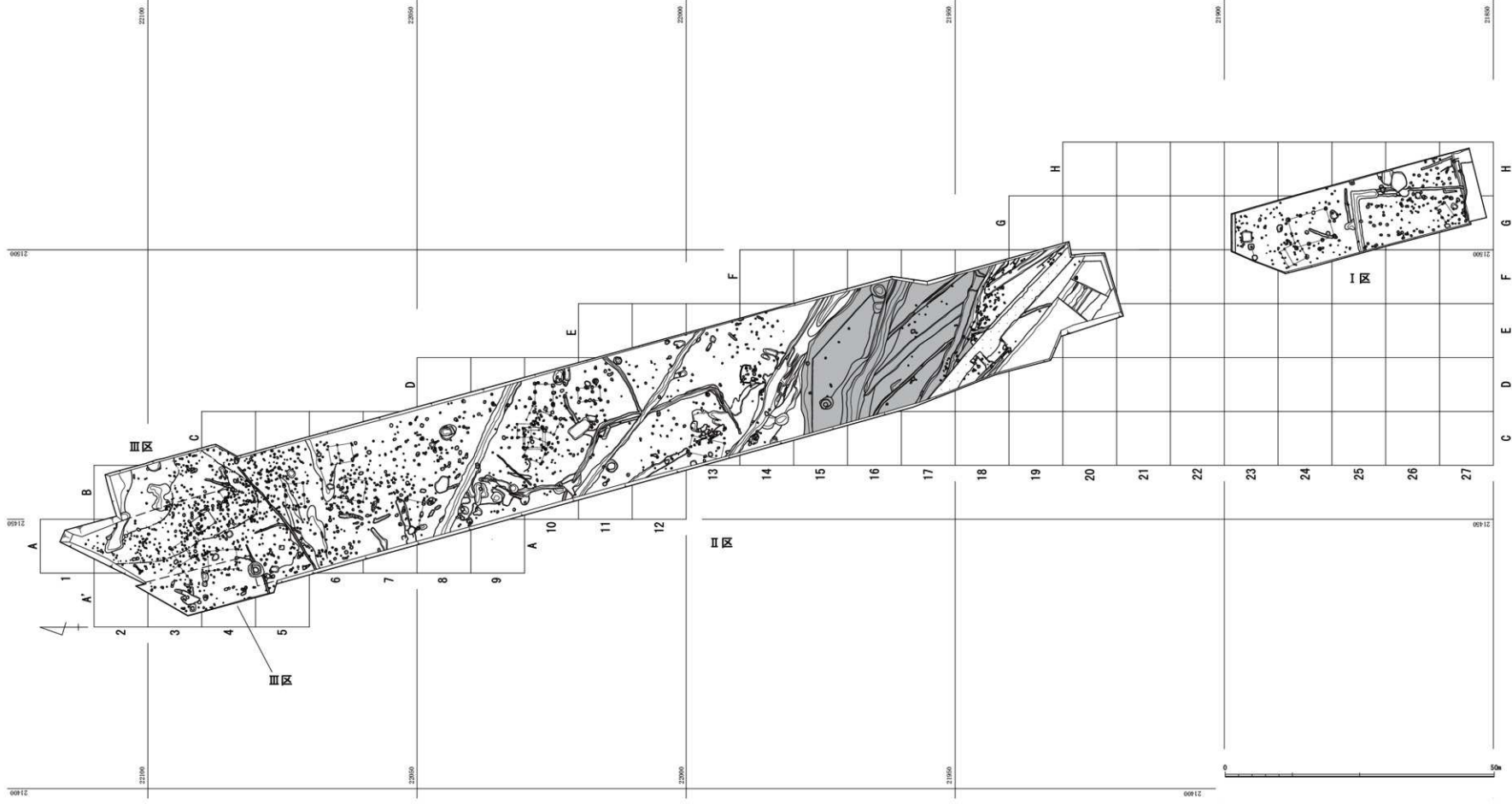
**上蔵垣内遺跡** (第5図44) 坂井市坂井町蔵垣内・五本・上関にかけて所在する。県営かんがい排水事業および国営九頭竜川下流土地区改良事業に伴い、平成21・22・25年(2009・2010・2013)に県埋文が発掘調査を実施した。古代・中世・近世の溝、井戸を多く検出したが、確実な建物遺構は確認していない。出土遺物には少量の縄文時代晩期、弥生時代中・後期の土器が含まれる。遺跡北東部と南西部では別集落と推定される。

**長屋遺跡** (第5図49) 坂井市坂井町長屋に所在する。かつての田島川と竹田川の合流点にあたる。県営長屋地区土地区改良総合整備事業に伴い、昭和60・61年(1985・1986)に県埋文が発掘調査を実施した。弥生時代終末期の方形周溝墓の他、土坑からは壺形土器が2点出土している。また、6～7世紀の遺構には竪穴建物、井戸を検出し、滑石製・土製の小玉が竪穴建物から、滑石製の子持ち勾玉が井戸上面から出土している。

**河和田遺跡** (第5図50) 坂井市坂井町河和田に所在する。田島川の自然堤防上に立地し、明治の終わりの耕地整理により遺跡の存在が知られることとなった。発掘調査は昭和39年(1964)に国学院大学によって玉作遺跡研究の一環として行われ、古墳時代初頭の工房址を検出し、車輪石未成品や管玉未成品などが出土した。その後、昭和55年(1980)から3か年の調査が明治大学考古学研究室によって行われた。

#### 引用・参考文献

- 金津町教育委員会 1977『伊井地区圃場整備事業に伴う発掘調査概要(桑原遺跡)』
- 福井県 1981『土地分類基本調査 三国』
- 福井県 1987『土地分類基本調査 大聖寺』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1987『長屋遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第13集
- 福井県教育委員会 1993『福井県遺跡地図』
- 金津町教育委員会 1995『金津町埋蔵文化財調査概要』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1996『第11回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1997『第12回福井県発掘調査報告会資料』
- 金津町教育委員会 2001『遺跡発掘事前総合調査』金津町埋蔵文化財調査報告書 第2集
- 坂井町教育委員会 2005『坂井大関西郷地区遺跡群』坂井町埋蔵文化財調査報告
- 福井県あわら市教育委員会 2007『南稲越遺跡』あわら市埋蔵文化財調査報告 第1集
- 坂井市 2007『新修 坂井町誌 通史編』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013『大関東遺跡・上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第139集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014『上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第151集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016『関中遺跡 下関遺跡 金津新江ノ尻遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第161集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2017『上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第164集
- 福井県あわら市教育委員会 2019『桑野遺跡』あわら市埋蔵文化財調査報告 第3集



第6図 調査区全体図（縮尺 1/600）

## 第3章 遺構

### 第1節 I区の概要

#### 1 地形と層序 (第7図)

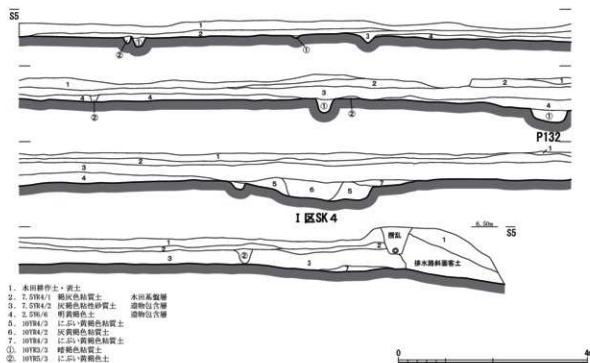
I区は表土下に厚さ12~50cmの包含層が堆積する。包含層は2層に細分可能である。上層は灰褐色粘質土で厚さは最大約40cmを測り、南側に厚く残存している。下層は全域には堆積していないが、灰褐色粘質土を含んだ明黄褐色土で厚さは最大で約25cmを測る。包含層からは古墳時代前期、律令期、中世の遺物が混在して出土し、古墳時代前期の遺物を最も多く含む。遺構確認面は包含層下の黄褐色粘質土上面である。遺構確認面の標高は約5.3~5.9mを測り、北側の23列から南側に緩く傾斜する。

#### 2 遺構の分布

I区の遺構には、掘立柱建物4棟、土坑4基、溝7条の他、柱穴・小穴類多数がある。柱穴や小穴が主体となるが、建物を構成するものは限られ、また遺物を含むものも少ない。掘立柱建物は調査区の北半部に3棟が分布し、過去の調査でも西方にかけて分布する傾向がある。調査区の南半部には直角に折れる溝が存在する。これらの溝と一体または関連すると考える溝が過去の調査区でも確認されており、区画溝と考える。

#### 3 遺物の出土状況

I区の遺物には、古墳時代前期の土師器、古代の須恵器、中世の越前焼・常滑焼などがある。古墳時代の遺物は比較的広範囲から出土している。古代の遺物は、総量は少ないものの、24・25区を中心に出土する傾向がある。中世の遺物も少ないものの、遺構に関連して25・27区でやや多く出土する。石器・石製品の類は非常に少ない。



第7図 I区土層断面図 (縮尺1/80)

## 第2節 I区の遺構 (図版第1~3、第8~12図)

## 1 掘立柱建物

**I区SB1 (第9図)** F・G23に位置する。柱穴2基のみの確認である。柱穴の平面形はいびつな隅丸方形を呈し、一辺が0.9~1.1m、深さは0.2~0.4mを測る。これらの柱穴列は、調査区西方に延び、旧金津町調査区内で確認された遺構と一連ならば、桁行の北側は1間、南側は3間、梁行は1間の東西方向に棟を持つ建物となる可能性がある。柱穴1・2から移動式甍片を含む土師器・須恵器が出土した。柱穴の平面形や出土遺物から、この建物は古代に属すと考える。

**I区SB2 (第9図)** G24・25に位置する。I区SB3と北西隅で重複するが、柱穴の切り合いはない。3間×2間で、桁行7.4m、梁行5.4m、方位はN17°Wを測り南北方向に棟を持つ。I区SB1が建物を構成した場合、直交する位置関係にある。柱間寸法は桁行間2.3~2.5m、梁行間2.4~3.0mを測る。柱穴の平面形は一辺0.6m前後の隅丸方形を呈し2段に掘られるものが主体となる。梁行の中央の柱穴は規模が小さく、なおかつ北側は2穴が近接している。柱穴の深さは0.2~0.4mを測る。柱根は遺存していない。柱穴1・6・8から土師器・須恵器が出土した。柱穴の平面形や出土遺物から、この建物は古代に属すと考える。

**I区SB3 (第10図)** F・G24に位置する。2間×1間で北側に底を持つ。主屋の桁行は南側では2間だが北側では1間となり、桁行3.4m、梁行2.8m、方位はN62°Eを測る。主屋および底の柱穴の平面形は不整な円形を呈し、南端隅の柱穴以外、径0.3m前後、深さは0.14~0.44mを測る。南端隅の柱穴は径0.7~0.8m、深さは0.4mを測り、この柱穴のみ2段に掘られている。柱穴から遺物は出土していない。

**I区SB4 (第10図)** G26・27区に位置する。桁行は北側が3間、南側が1間、梁行は西側が3間、東側が2間の不規則な構造となっている。規模は、桁行が3.15m、梁行が2.0m、方位はN45°Eを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈するが規模の差が大きく、主体となるのは径0.3m前後、深さ0.1m前後を測るものである。柱穴1・2から土師器小片が出土している。

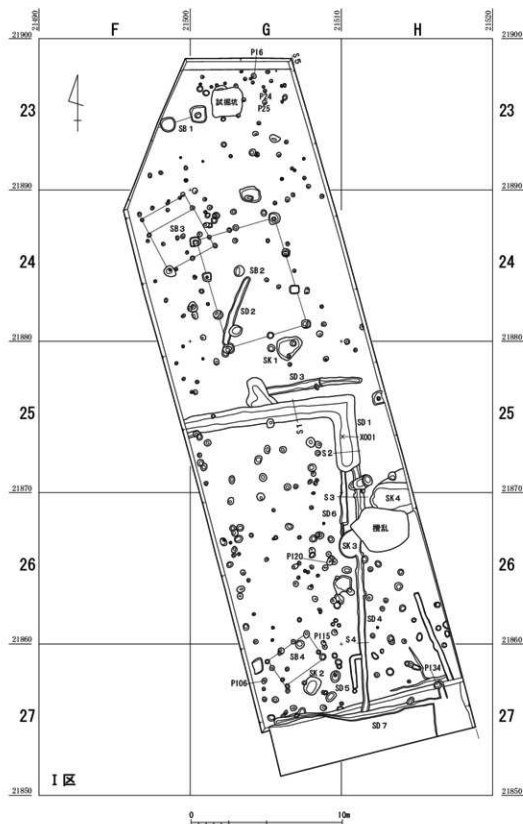
## 2 土坑

**I区SK1 (第11図)** G24・25に位置する。平面形は不整楕円形を呈する。長軸1.8m、短軸1.3m、深さ0.3mを測る。底面は平坦面となり、壁は緩やかに立ち上がる。断面は浅皿状を呈す。覆土は暗褐色粘質土が主体となる。古墳時代前期の鉢が出土した。

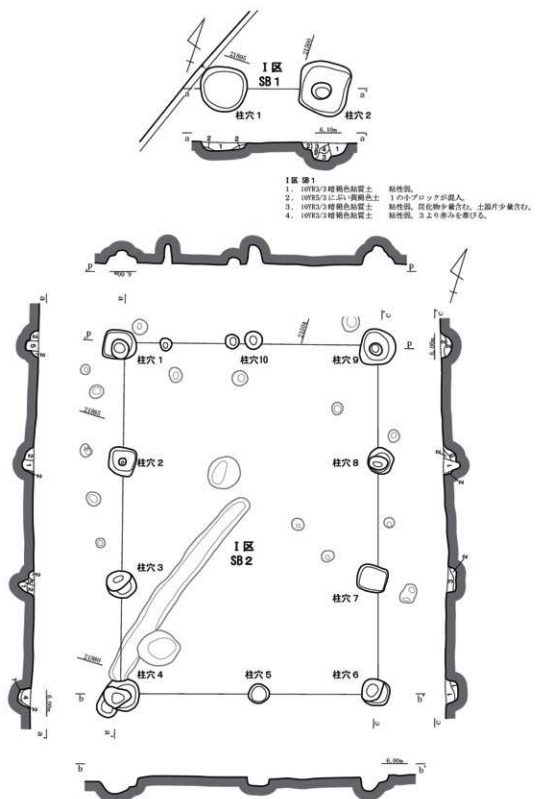
**I区SK2 (第11図)** G27に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、西側で小穴に切られる。長軸1.2m、短軸0.9m、深さは0.2mを測る。底面は丸く、断面は箱状を呈す。覆土は暗褐色粘質土が主体となり、中位から底面で古墳時代前期の甍、高坏などが出土した。

**I区SK3 (第11図)** H26に位置し、北東部は攪乱によって失われている。SD4と切りあう。平面形は楕円形を呈する。長径1.9m、短径1.4m、深さは0.13mを測る。底面は平坦面となり、断面は浅皿状を呈す。覆土は黒色粘質土が主体である。中央部から古墳時代前期の土器がまとめて出土した。

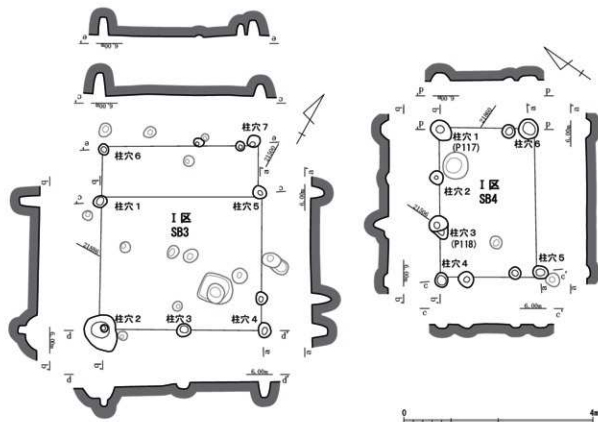
**I区SK4 (第11図)** H25・26に位置し、南端部は攪乱によって失われている。東側は調査区外に延びるため全体形は定かでないが、北側が傾斜する長楕円形と推定する。確認長2.6m、最大幅は3.0m、深さは0.35mを測る。底面は平坦面となり、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰褐色土が主体である。古墳時代前期の土器が多量に出土した。



第8図 I区遺構配置図 (縮尺1/250)



第9図 Ⅰ区掘立柱建物1 (縮尺1/80)



第10図 Ⅰ区掘立柱建物2 (縮尺1/80)

## 3 溝

**Ⅰ区SD1** (第8・12図) F～H25に位置する。直線的にほぼ東西方向に延び、G・H列の境で直角気味に南方に折れる。幅は1.2～1.5mを測るが、南北方向に延びる箇所の方が幅広い。深さは0.4～0.6mを測る。底面は丸みを帯びる。旧金津町調査区の溝7と同一の溝である。区画溝としての性格を想定する。中世の越前焼を含むが古代の須恵器が多く出土しており、溝の時期は古代と考える。

**Ⅰ区SD2** (第8図) G24に位置し、北北東～南南西に直線的に延びる。長さは4.7m、幅は0.4～0.5m、深さは0.7m前後を測る。古墳時代と考える土師器片が出土した。

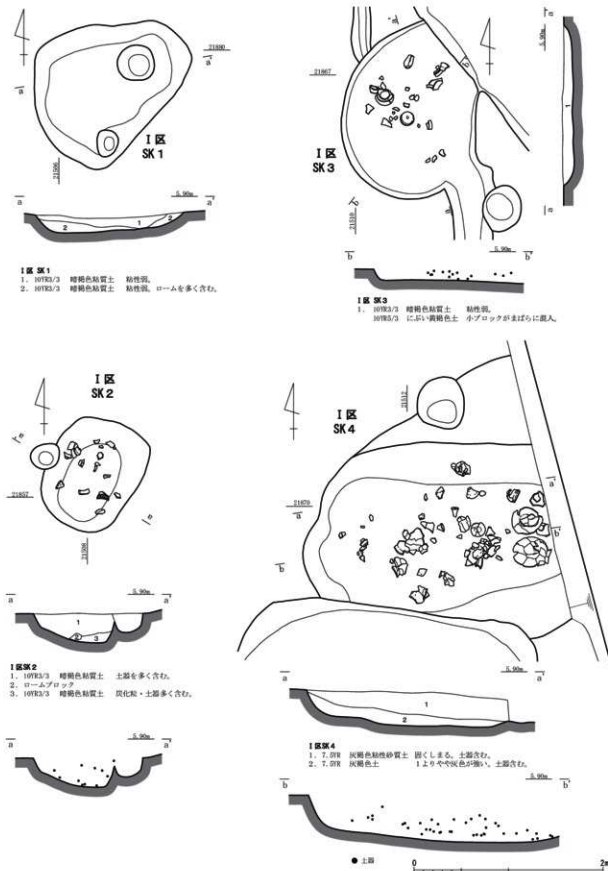
**Ⅰ区SD3** (第8図) G・H25に位置し、Ⅰ区SD1と並行し、直線的にほぼ東西方向に延びる。最大幅は0.6m、深さは東半部で0.2m、西半部で0.7mを測る。古墳時代と考える土師器片が出土した。

**Ⅰ区SD4** (第8・12図) H25～27に位置し、直線的に南北方向に延びる。Ⅰ区SK3や攪乱に接する部分は開口部と考える。最大幅は0.6m、深さは0.2mを測る。古代の須恵器小片が出土した。

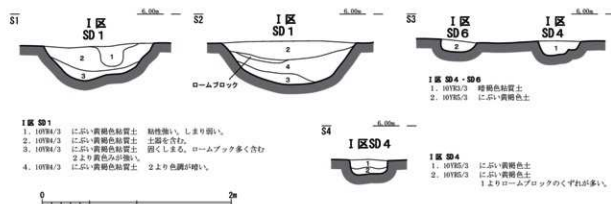
**Ⅰ区SD5** (第8・12図) H27に位置し、L字状に折れる。小規模な溝だが、Ⅰ区SD1・3・4・6と一連の性格を持つと考える。最大幅0.4m、深さ0.8mを測る。古墳時代と考える土師器片が出土した。

**Ⅰ区SD6** (第8・12図) H25・26に位置し、Ⅰ区SD4と並行することで、2条でⅠ区SD1と同程度の幅を有す。最大幅は0.5m、深さは0.1～0.2mを測る。図示可能な遺物はない。

**Ⅰ区SD7** (第8図) G・H27に位置し、G・H列境で緩く屈曲する。最大幅0.5m、深さ0.1～0.4mを測る。弥生時代後期末の装飾器台などが出土した。



第11図 I区土坑 (縮尺1/40)



第12図 I区溝 (縮尺1/40)

## 第3節 II・III区の概要

## 1 地形と層序 (第13図)

II・III区の包含層は最大3層に細分可能である。III区東壁の土層堆積状況からは、X1層として黒褐色土が最大30cm、X2層にふい黄褐色土が最大約90cm、X3層の黒色粘質土が最大20cmの厚さで堆積する。II区の15~17列東壁では川(SK1)を境に北側ではX3層に相当する黒色土の堆積は確認できないもの、川の南側では川の埋没後にX3層に相当する黒色土が堆積する。X1、X2に相当する層は北方のIII区と比較すると薄く、これらの層はI区における包含層に相当する。III区の西側調査区西壁ではX2層は確認できない。包含層出土遺物の時期は混在する結果となり、特に上部層では後世に削平と再堆積の影響を受けたとも考えられる。また、調査時には確認できなかったが、表土下の面で掘りこまれる遺構が存在することから平面的に確認できなかった遺構の遺物を包含層遺物とした場合もある。

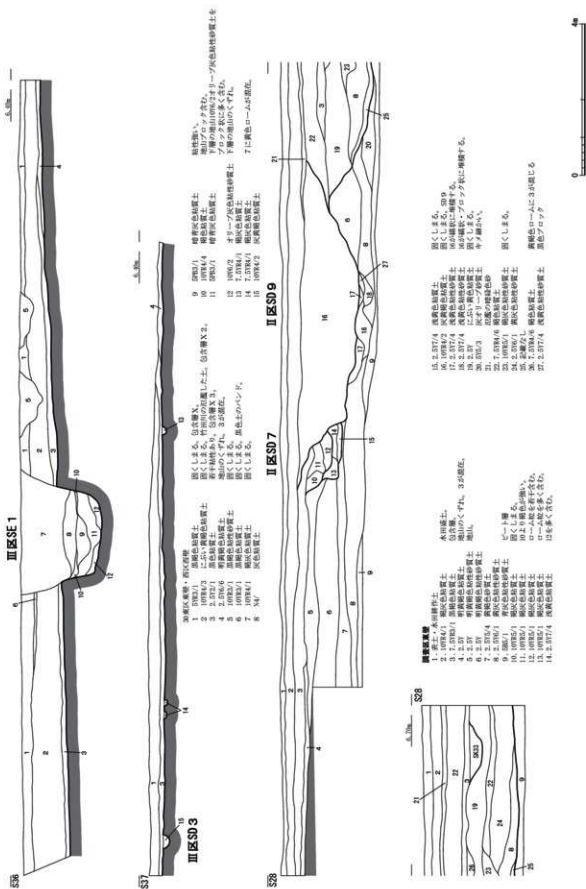
遺構確認面の標高は、B2区内が最も低く、標高は4.8m前後を測る。これより西から南部にかけて緩やかに標高が上がり、A6・7区で5.9m前後を、10・11列にかけ5.7~5.8mを測る。12列以南は緩やかに低くなり、川跡や溝が集中する16・17区で4.9~5.1m前後を測り、18列以南は再び微高地となる。北東部の谷状地形と16・17列の川跡の間に微高地が存在したと言える。

## 2 遺構の分布

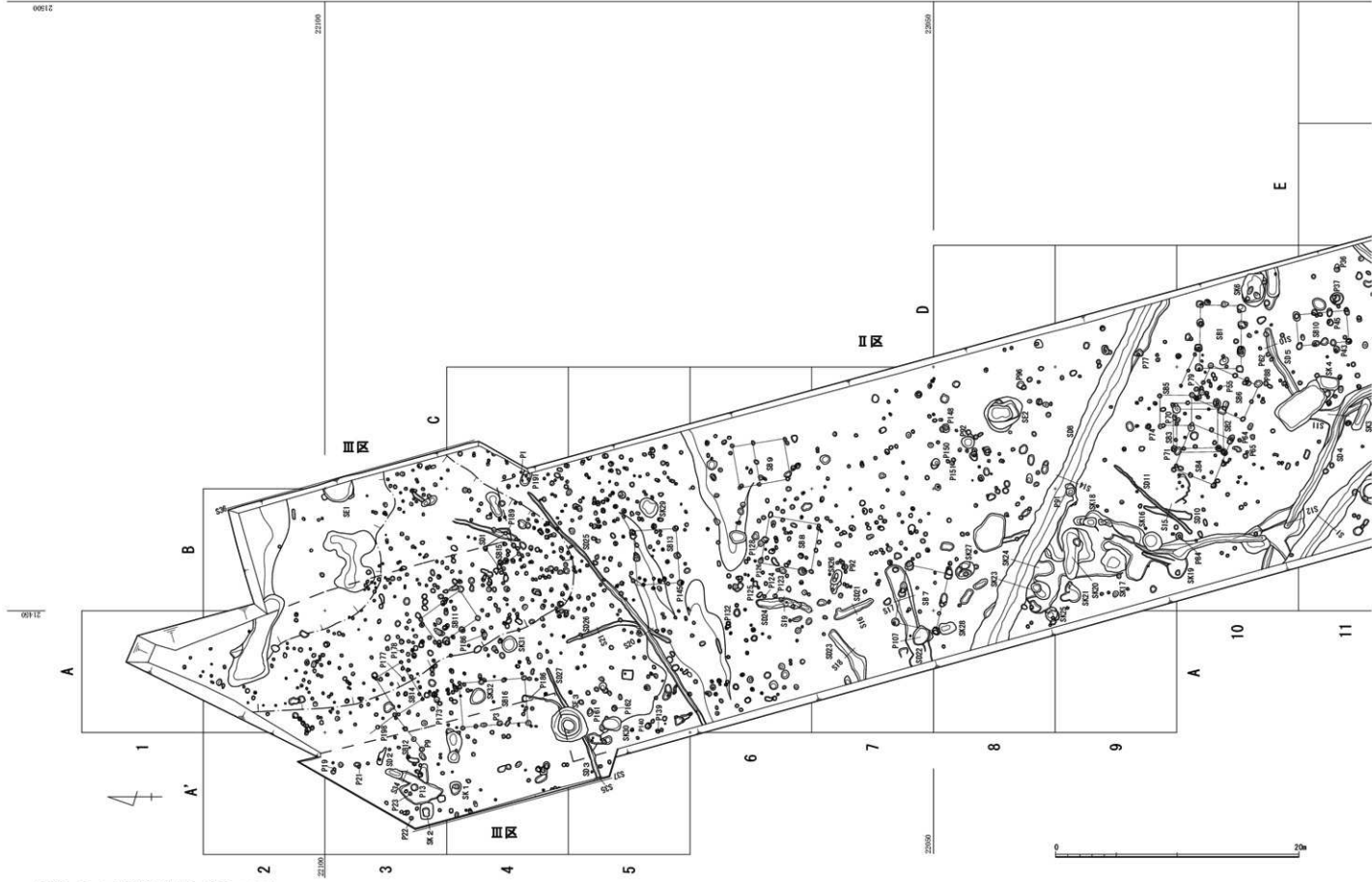
II・III区の遺構には竪穴建物2棟、掘立柱建物17棟の他、遺物が出土し番号を付した井戸5基、土坑35基、溝29条、および小穴多数がある。遺物が出土した遺構は、調査区全域におよぶが、遺構の種類とその分布状況は概ねSD7および9とした溝の北側と南側で大別できる。

## 3 遺物の出土状況

II・III区の遺物は包含層および遺構から、多量の弥生時代後期から古墳時代前期の土器を中心に古代の須恵器、土師器、緑釉陶器、中世の陶磁器、土師質皿などが出土した。石製品には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての玉作関係遺物がある。遺構の分布状況と関連し、弥生時代から古墳時代前期の土器は概ね15列以南は出土量が減少するが、古代および中世の遺物は2~5列および13~15列にかけて多く出土する傾向があり、後者はSD7やSD9の存在が関係しているよう。玉作関連遺物は北側の2・3列に特に多く、その他の石器・石製品は分散する傾向がある。

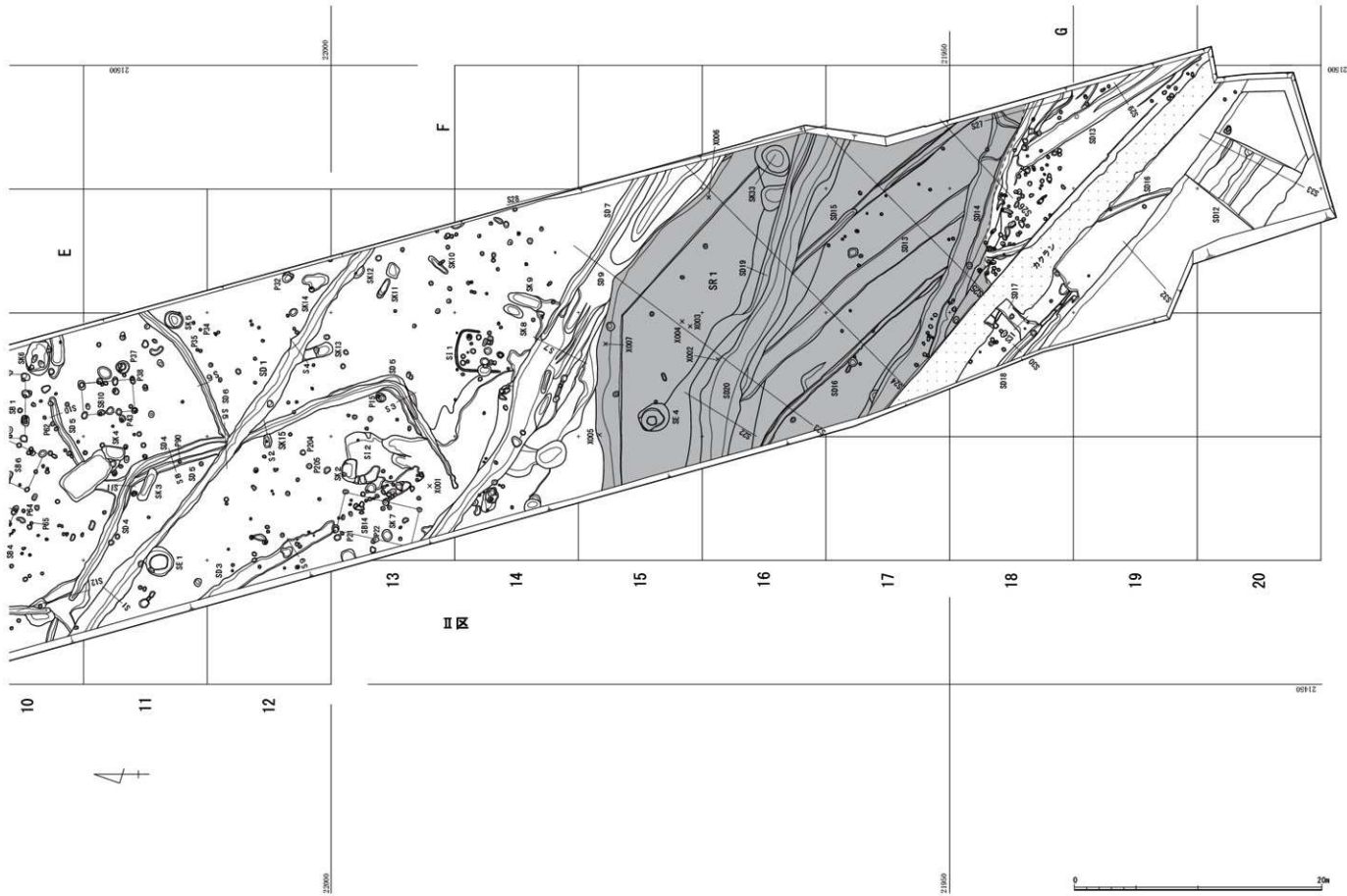


第13図 II・III区土層図(縮尺1/100)



第14图 II·III区遺構配置図①(縮尺 1/300)





第15图 II・III区遺構配置図② (縮尺 1/300)

## 第4節 II・III区の遺構 (図版第1・4～14、第14～35図)

## 1 竪穴建物

**II区SI1** (第16図) D14に位置し、周溝とその内側の柱穴・小穴を確認した。建物南側の残りが悪く周溝は途切れているが、平面形は隅丸長方形を呈すと考える。確認長は4.0m、幅3.4m、方位はN6°Eを測る。壁周溝は主に北側が残存し、幅0.2m、深さ0.1mを測る。主柱穴は長軸上に配置された2本柱(柱穴1、柱穴2)で、径0.4～0.6m、深さは0.2～0.5mを測る。建物を切るP3・4をはじめ、建物内に多数の小穴を確認したが、明確に建物に伴うものは不明である。弥生時代後期の土器が出土している。建物の時期は弥生時代後期と考える。

**II区SI2** (第16図) C13に位置する。南西側はII区SD3に切られる。平面形は不整な方形を呈し、一边は4.9m前後、深さは0.1～0.2mを測る。壁周溝は無く、壁の立ち上がりは緩やかである。竪穴内でP1・2・24を確認したが建物との関連は不明である。柱穴を伴わない壁建ちの構造であったかもしれない。北側には弥生時代の土器を含み、底面に焼土が堆積するSK2が位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.8m、深さは0.2mを測る。西側のP1からは古墳時代前期の甕や葎石などが出土した。

## 2 掘立柱建物

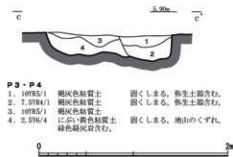
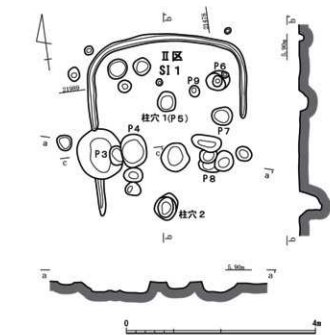
**II区SB1** (第17図) D10に位置する。3間×1間で、桁行5.3m、梁行3.4m、方位はN88°Wを測り東西方向に棟を持つ。柱間寸法は桁行間1.6～2.0mを測る。柱穴は、平面形が不整形を呈し、一边0.6m前後、深さ0.5m前後を測り、底部付近で2段に掘られるものが主体となる。II区SB6と西側で重複するが、柱穴の切り合いはない。柱穴3・5から古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SB2** (第17図) C10に位置する。1間×1間で、桁行3.8m、梁行3.5mを測り、南北方向に棟を持ちほぼ正方形を呈す。柱穴は、平面形が不整形ないし楕円形を呈し、径0.6～0.7m、深さ0.5～0.8mを測る。建物が集中する区域にあたり、II区SB3～6と重複する。II区SB2南東隅の柱穴3がII区SB6の桁行中央の柱穴8と重複している。柱穴1・4から古墳時代前期の土師器片が出土した。

**II区SB3** (第17図) C9・10に位置する。1間×1間で、桁行3.7m、梁行3.6mを測り、南北方向に棟を持ち、ほぼ正方形を呈す。II区SB2と同規模の建物であり、建て替えを想定できる。柱穴4とSB2柱穴4の関係からSB2に先行する。柱穴は平面形が円形を呈し、径0.5～0.7m、深さ0.5～0.7mを測り、2段に掘られる。当初は土坑として検出した柱穴3(II区SK22)から古墳時代前期の壺底部(第48図12)が出土した。

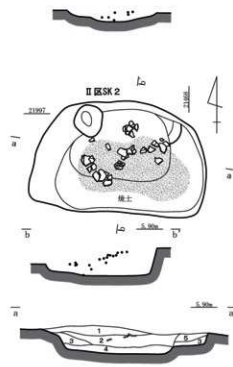
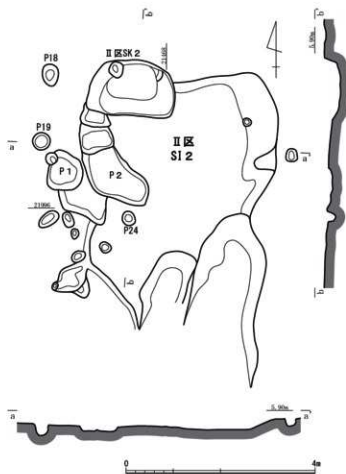
**II区SB4** (第18図) C9・10に位置する。2間×2間で、桁行4.0m、梁行3.5mを測り、方位はN67°Wを測り東西方向に棟を持つ。柱間寸法は桁行間1.9～2.1m、梁行間1.5～2.0mを測る。柱穴は、平面形が円形ないし楕円形を呈し、径0.4～0.5m、深さ0.37～0.6mを測り2段に掘られるものもある。梁行中央の柱穴は規模が小さく深さは0.06～0.14mと浅い。建物が集中する区域にあたり、II区SB4北東隅の柱穴4はII区SB5南東隅の柱穴2と重複している。柱穴5～8から古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SB5** (第18図) C9・10に位置する。1間×1間で、桁行2.6m、梁行2.5mを測り、南北方向に棟を持ちほぼ正方形を呈す。調査区内で最も小規模な建物である。柱穴は、平面形が不整形な円形を呈し、径0.4m前後、深さ0.3～0.4mを測る。建物が集中する区域にあり、II区SB2～4と重複している。II区SB4とは南西隅の柱穴2が重複する。同じ1間×1間のII区SB2・3とは近接し棟方向が共通する。II区SB1とは棟方向が直交する。柱穴2・4から古墳時代前期の土師器が出土した。



P3・P4

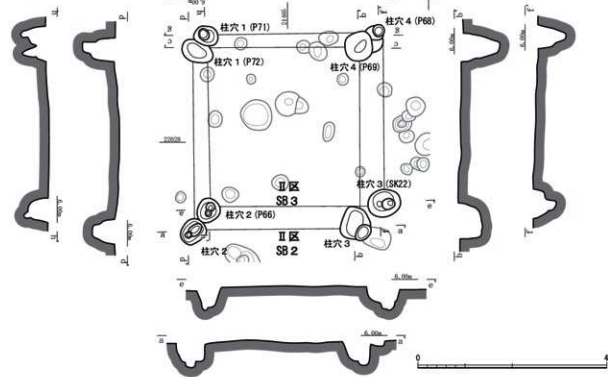
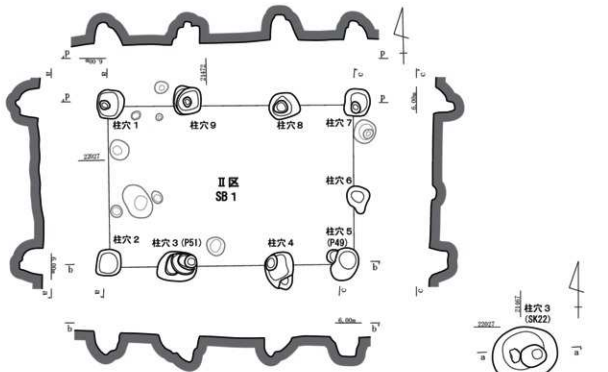
1. 1076/1 褐色粘質土 固くしまる。赤生土層を含む。
2. 7.579/1 褐色粘質土 固くしまる。赤生土層を含む。
3. 1076/5 褐色粘質土 固くしまる。赤生土層を含む。
4. 2.579/4 同上。褐色粘質土 固くしまる。黒色のくずれ。緑色粘質土を含む。



II区 SK2

1. 1076/2 灰黄褐色粘質土 固くしまる。
2. 1076/3 同上。黄褐色粘質土 固くしまる。ローム層を多く含む。
3. 1076/5 同上。黄褐色粘質土 固くしまる。ロームを含まない。
4. 2.579/8 褐色粘質土 硬土。
5. 2.577/4 浅黄色粘質土 固くしまる。黒色のくずれ。

第16図 II・III区建物1 (縮尺1/80・1/40)



第17図 II・III区建物2 (縮尺1/80・1/40)

**II区SB6** (第19図) C・D10に位置する。2間×2間で、北側に櫓などの付属施設を伴う。桁行4.2m、梁行3.0m、方位はN24°Eを測る。柱間寸法は桁行間2.0~2.2m、梁行間1.4~1.6mを測る。柱穴は、平面形が円形を呈し、径0.4m前後を中心とし、深さ0.3~0.6mを測る。西側桁行中央の柱穴8がII区SB2柱穴3と重複する。櫓は1.6m北に位置し、径0.3m前後の3基の柱穴からなる。確認長は2.8mである。柱穴2と櫓のP81・83から古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SB7** (第18図) A・B7・8に位置する。2間×1間で、桁行5.0m、梁行3.4m、方位はN80°Wを測る。柱間寸法は桁行間1.9~3.1mを測るが東側の方がやや狭い。柱穴は、径0.7m前後の平面円形のもの、長軸1.0~1.2mの不整形円形を呈するものがある。深さは0.3~0.5mを測る。柱穴6から古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SB8** (第19図) B6に位置する。2間×1間で、桁行4.1m、梁行3.9m、方位はN°10Eを測る。柱間寸法は梁行間1.8~2.1mを測る。柱穴は、径0.3m前後の平面円形、楕円形を呈するものがある。深さは0.2~0.5mを測る。柱穴1・2・5から古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SB9** (第20図) C6に位置する。2間×1間で、桁行4.4m、梁行3.4m、方位はN11°Wを測る。柱間寸法は桁行間1.7~2.4mを測り北側の方がやや狭い、中央に間仕切りと考える柱穴を備える。柱穴は、径0.4m前後の平面円形を呈し、深さは0.2~0.3mを測る。柱穴から遺物は出土していない。

**II区SB10** (第19図) D11に位置する。3間×1間で、桁行4.1m、梁行2.5m、方位はN4°Wを測る。柱間寸法は桁行間1.3~1.5mを測る。柱穴は、径0.5m前後の平面円形のもの、長軸0.6~0.75mの楕円形を呈するものがある。深さは0.3~0.6mを測る。柱穴3~5・7・8から古墳時代の土師器が出土した。

**II区SB11** (第20図) A3・4に位置する。2間×1間で、桁行4.0m、梁行2.7m、方位はN37°Wを測る。柱間寸法は桁行間1.1~1.5mを測る。柱穴は、径0.3~0.5mの平面円形を呈す。深さは0.2~0.5mを測る。柱穴2・3から古墳時代の土師器が出土した。

**II区SB12** (第20図) A'・A3に位置しII区とIII区にまたがる。桁行3間、梁行は1間分を確認した。桁行3.6m、方位はN50°Eを測る。柱間寸法は桁行間1.9~3.1mを測る。柱穴は、径0.4m前後の平面円形を呈し、深さは0.2~0.3mを測る。柱穴1・2・5から古墳時代前期の土師器が出土した。

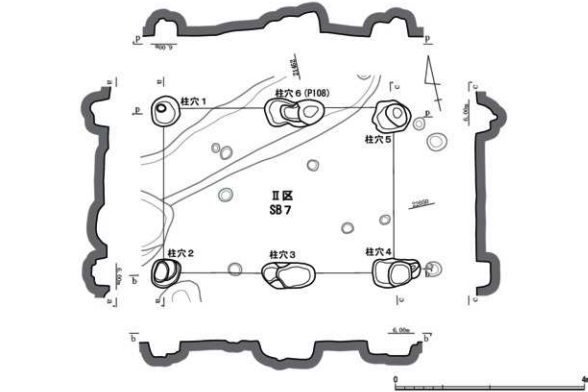
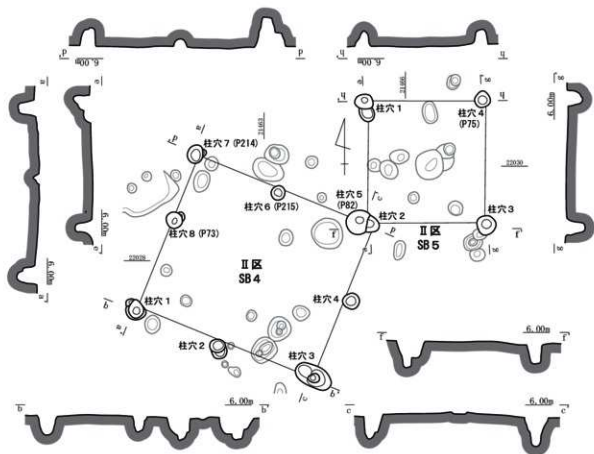
**II区SB13** (第21図) B5に位置する。2間×1間だが北西隅の柱穴を欠く。桁行4.5m、梁行3.5m、方位はN86°Eを測る。柱間寸法は桁行間2.3mを測る。柱穴は、径0.5m前後の平面円形を呈し、中に段を持つものがある。深さは0.3~0.5mを測る。柱穴2から古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SB14** (第21図) A3に位置する。1間×1間で、桁行3.5m、梁行2.4m、方位はN58°Eを測る。柱穴は、径お0.3m程度の平面円形を呈し、深さは0.2~0.4mを測る。遺物は出土していない。

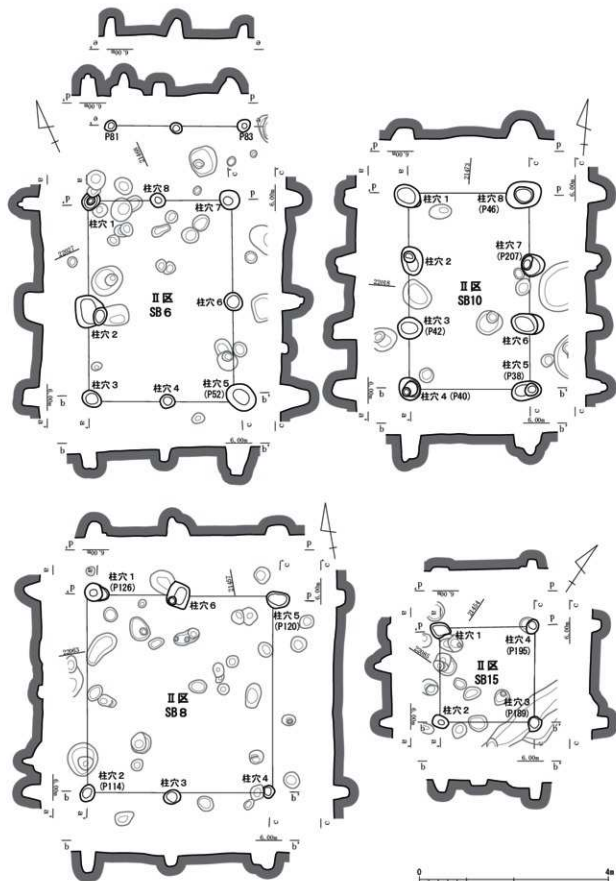
**II区SB15** (第19図) B4に位置する。1間×1間で、桁行2.0m、梁行2.0m、方位はN36°Wを測る。柱穴は、径0.4m前後の平面円形を呈し、深さは0.1~0.4mを測る。柱穴3・4から古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SB16** (第21図) A4に位置しII区とIII区にまたがる。3間×1間で、桁行5.4m、梁行3.6m、方位はN5°Wを測る。柱間寸法は桁行間1.8~2.0mを測る。柱穴は、径0.2~0.4m前後の平面円形のもの、長軸0.5mの不整形円形を呈するものがある。深さは0.1~0.5mを測る。柱穴1・4・6・7から古墳時代前期の土師器が出土した。

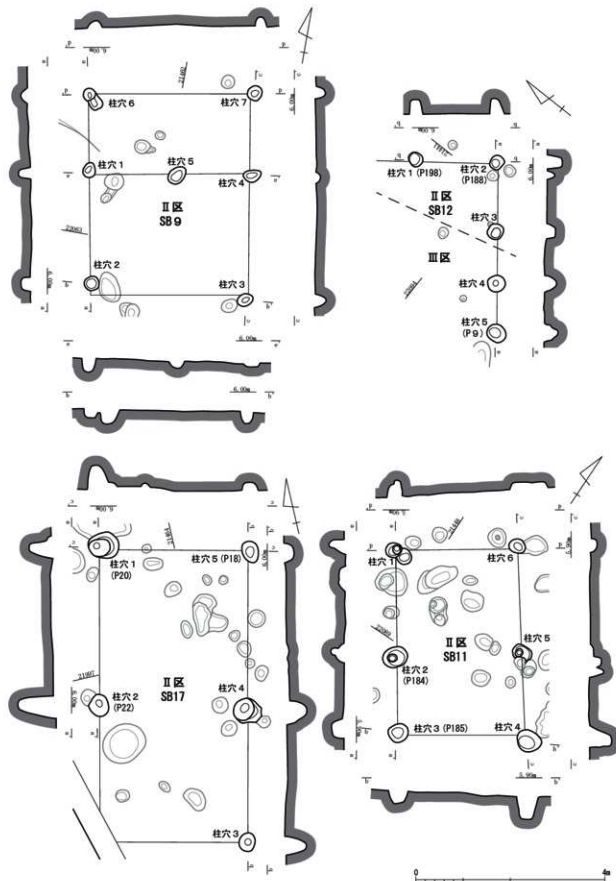
**II区SB17** (第20図) C13に位置する。2間×1間で、南西隅の柱穴を欠く。桁行6.1m、梁行3.2m、



第18図 II・III区建物3 (縮尺1/80)



第19図 II・III区建物4 (縮尺1/80)



第20図 II・III区建物5 (縮尺1/80)

方位はN13° Wを測る。柱間寸法は桁行間2.8～3.3mを測る。柱穴は、径0.4～0.6mの円形を呈し、深さは0.2～0.7mを測る。柱穴1・2・5から古墳時代前期の土師器が出土した。

### 3 井戸

**II区SE1** (第22図) B・C11に位置する。掘方の平面形は円形を呈し径2.2m、断面形は、下部は筒状となり上部は斜めに開き、深さ1.4mを測る。底部付近には廃棄されたと考える礫が複数個出土した。中世の土器・陶磁器を中心に出土し、須恵器が多く混入している。

**II区SE2** (第23図) C8に位置する。掘方の平面形は楕円形を呈し長径3.4m、短径2.7mを測る。断面形は、下部は逆台形状、上部は筒状となり、深さ2.4mを測る。底部から約1.0m上から、板材を縦に組んだ平面方形の木組みを持つ。形状から北側部分は、木組み井戸の前段階の井戸掘方の可能性がある。混入を多く含むが、中世の土器・陶磁器を中心に、砥石などが出土した。

**II区SE3** (第22図) A4・5に位置する。掘方の平面形は円形を呈し径2.8mを測る。断面形は逆凸状となり、底面に溜槽状の掘り込みがある。深さは1.5mを測る。構造物は遺存していない。中世の土師質皿、白磁などを中心に出土している他、古墳時代前期の土器が多く混入している。

**II区SE4** (第22図) D15に位置する。掘方の平面形は不整形円形を呈し長軸2.5m、短軸2.1mを測る。断面形は逆凸状となり、底面に溜槽状の掘り込みがある。深さは1.5mを測る。構造物は遺存していない。内面黒色の高台付埴 (第94図18) など、古代の須恵器・土師器が出土した。

**III区SE1** (第23図) B3に位置する。掘方の平面形は径約2.4mの円形と推定する。確認範囲での断面形は逆台形状となり、深さは掘削面から1.2mを測るが、本来の掘り込み面からは2.1mを測る。底面近くから中世の土師質皿 (第98図34) が出土した。

### 4 土坑

**II区SK3** (第24図) C11に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸2.8m、短軸0.7mを測る。長軸方向の断面形は底面から緩やかに壁が立ち上がり、深さは0.7mを測る。土坑墓と考える。弥生時代後期の器台 (第42図2) が上面から出土した他、鉢がある。

**II区SK4** (第24図) C11に位置する。隅丸方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.1mを測る。断面形は箱状を呈し、深さは0.6mを測る。土坑墓と考える。古墳時代前期の土器が出土した。

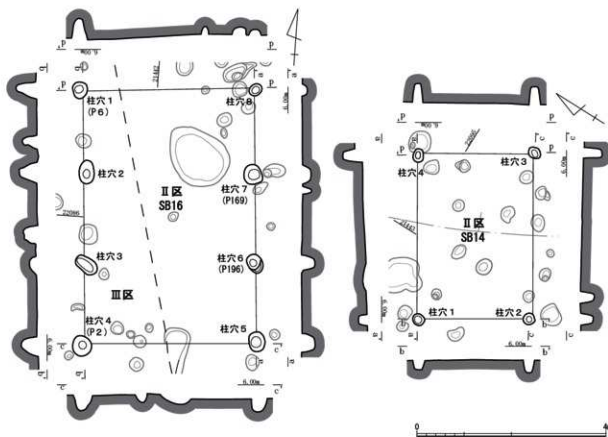
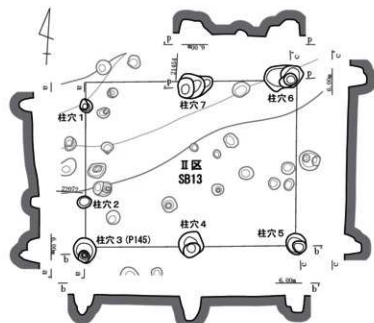
**II区SK5** (第24図) D11に位置する。平面形は円形を呈し、径1.35mを測る。断面形は浅皿状を呈し、深さは0.3mを測る。弥生時代後期の甕が出土した。

**II区SK6** (第24図) D10に位置する。楕円形を呈すと推定し、確認長2.7m、短軸1.9mを測る。断面形は底面から緩やかに壁が立ち上がり、深さは0.4mを測る。上面付近から古墳時代前期の土器がまると出土した他、磨石類、台石類がある。

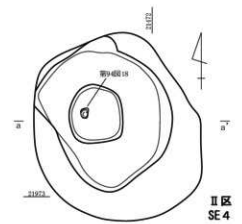
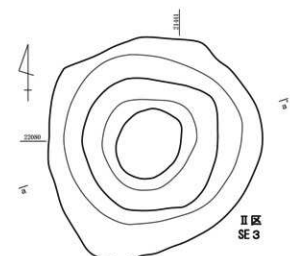
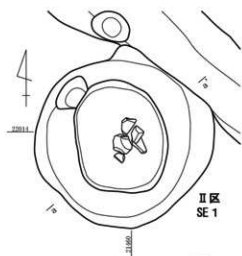
**II区SK7** (第25図) C13に位置する。平面形は円形を呈し径0.9mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは0.6mを測る。底面にわずかに段を持つ。主に古代の須恵器、土師器が出土した。

**II区SK8** (第25図) D・E1に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.7m、短軸0.8mを測る。断面形は壁が急傾斜で立ち上がる逆台形を呈し、深さは0.6mを測る。土坑墓と考える。底面から弥生時代中期の土器が出土した。

**II区SK9** (第25図) E14に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸2.8m、短軸1.0mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは0.4mを測る。土坑墓と考える。弥生時代後期の甕、壺、装飾器台などの他、磨石類が出土した。



第21図 II・III区建物6 (縮尺1/80)



- II区 SE 1**
1. 1078/2 灰青褐色土 固くしめる。
  2. 1078/2 黒褐色土 固くしめる。灰燼多い。
  3. 1078/2 灰青褐色土 固くしめる。灰燼やや多い。
  4. 1078/2 黒褐色土 中や軸地あり。
  5. SD1/1 灰土 軸地あり。粘土を未だらに含む。
  6. SD1/1 灰土 砂質が多い。
  7. 1078/1 黒褐色土
  8. 1078/1 黒褐色粘質土 砂質が多い。

- II区 SE 3**
1. 1078/2 灰青褐色粘質土 固くしめる。
  2. 1078/1 黒褐色粘質土 1層を多く含む。ローム粘土を含む。
  3. 1078/1 黒褐色粘質土 固くしめる。
  4. 5. SD1/4 灰土 1層を多く含む。ロームブロックのくずれ。
  5. 5. SD1/4 灰褐色土 軸地あり。粘土を未だらに含む。
  6. SD1/1 灰土 砂質が多い。
  7. 1078/1 黒褐色粘質土

- II区 SE 4**
1. 1078/1 黒褐色粘質土 固くしめる。ロームブロック多く含む。
  2. 1078/1 黒褐色粘質土 固くしめる。ローム粘土を含む。
  3. 5. SD1/3 灰褐色粘質砂質土 固くしめる。
  4. 1078/1 黒褐色粘質土 固くしめる。
  5. 5. SD1/2 灰青褐色粘質土 固くしめる。より灰褐色土をおびる。
  6. 5. SD1/1 黒褐色粘質土
  7. 5. SD1/2 黒褐色粘質粘砂質土

第22図 II・III区井戸1 (縮尺1/60)

**II区SK10**(第25図) E13に位置する。小穴に切られる。溝状を呈し、長軸2.0m、短軸0.5mを測る。断面形は浅皿状を呈し、深さは0.1mを測る。古墳時代前期と考える土師器が出土した。

**II区SK11**(第25図) E13に位置する。溝状を呈し、長軸1.8m、短軸0.5mを測る。断面形はU字状を呈し、深さは0.2mを測る。古墳時代前期と考える土師器が出土した。

**II区SK12**(第26図) E13に位置する。SD1に切られる。平面形は推定円形を呈し、推定径1.2mを測る。深さは0.5mを確認した。弥生時代中期の土師器が出土した。

**II区SK13**(第26図) D12に位置する。溝状を呈しSD1に切られる。確認長2.6m、幅1.0mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは0.3mを測る。弥生時代後期以降の高坏などが出土した。

**II区SK14**(第26図) E12に位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸2.1m、短軸1.2mを測る。断面形は浅皿状を呈し、深さは0.2mを測る。古墳時代前期と考える土師器が出土した。

**II区SK15**(第26図) C12に位置する。SD5に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7mを測る。断面形は浅皿状を呈し、深さは0.2mを測る。弥生時代中期の甕が出土した。

**II区SK16**(第26図) B9に位置する。SD2を切る。平面形は円形を呈し、径2.0mを測る。断面形はU字状を呈し、深さは0.5mを測る。底面から古代の土師質皿(第94図25)が出土した。

**II区SK17**(第27図) B9に位置する。平面形は不整形円形を呈し、径1.6mを測る。断面形はU字状を呈し、深さは0.5mを測る。古墳時代前期の土師器の他、磨石類が出土した。

**II区SK18**(第27図) B9に位置する。SD2と切り合う。平面不整形を呈し、長軸2.9m、短軸1.2mを測る。断面は浅皿状を呈し、深さは0.3mを測る。古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SK20**(第27図) B8・9に位置する。平面形は不整形楕円形を呈し、複数の遺構が切り合ったとも考えられる。長軸4.2m、短軸2.4mを測る。断面形は浅皿状を呈し、深さは0.4mを測る。古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SK21**(第29図) B9に位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸1.8m、短軸1.7mを測る。断面形は浅皿状を呈し、深さは0.2mを測る。古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SK23**(第29図) B8に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.8m、短軸1.3mを測る。断面形は浅皿状を呈し、深さは0.2mを測る。古墳時代前期の土師器片が出土している。

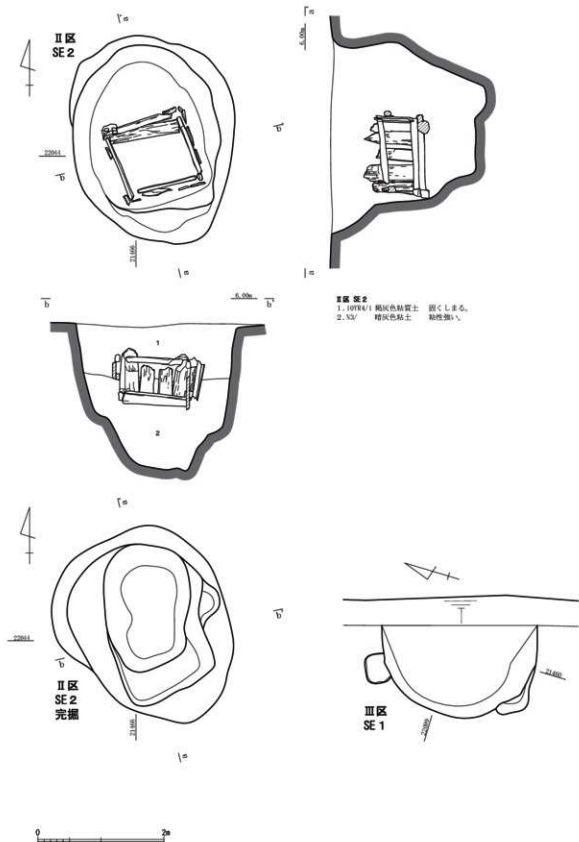
**II区SK25**(第29図) AB8・9に位置する。平面形は不整形円形を呈し径1.1mを測る。断面形は底面に段を持つ浅皿状を呈し、深さは0.2mを測る。弥生時代後期の甕が出土した。

**II区SK26**(第28図) B7に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸2.0m、短軸0.9mを測る。断面形は底面が狭い逆台形を呈すが、長軸方向では東側が一段低くなる。深さは0.5mを測る。遺構検出時から土層図2層中まで、破碎された状態の古墳時代前期の土師器が多数出土した。

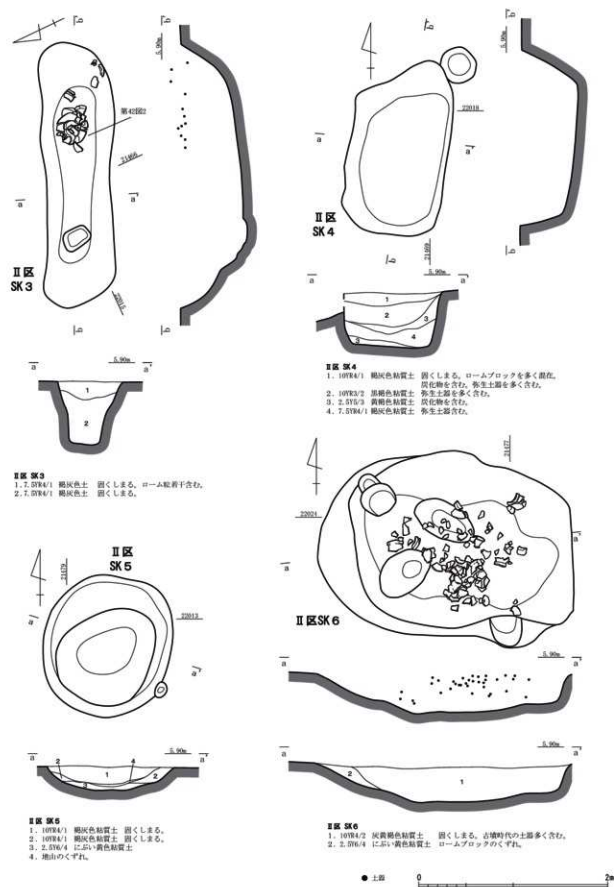
**II区SK27**(第29図) B8に位置する。平面形は楕円形を呈し長軸1.7m、短軸1.2mを測る。断面形は底面に段を持つ浅皿状を呈し、深さは0.5mを測る。古墳時代前期と考える土師器が出土した。

**II区SK28**(第29図) B7に位置する。平面形は隅丸方形を呈し長軸1.4m、短軸0.9mを測る。断面形は緩やかに壁が立ち上がり、深さは0.3mを測る。古墳時代前期の土師器の他、台石類が出土している。

**II区SK29**(第29図) B5に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.7m、短軸1.4mを測る。断面形はわずかに段を持つ底面から緩やかに壁が立ち上がり、深さは0.3mを測る。古墳時代前期の土師器がままとって出土した。

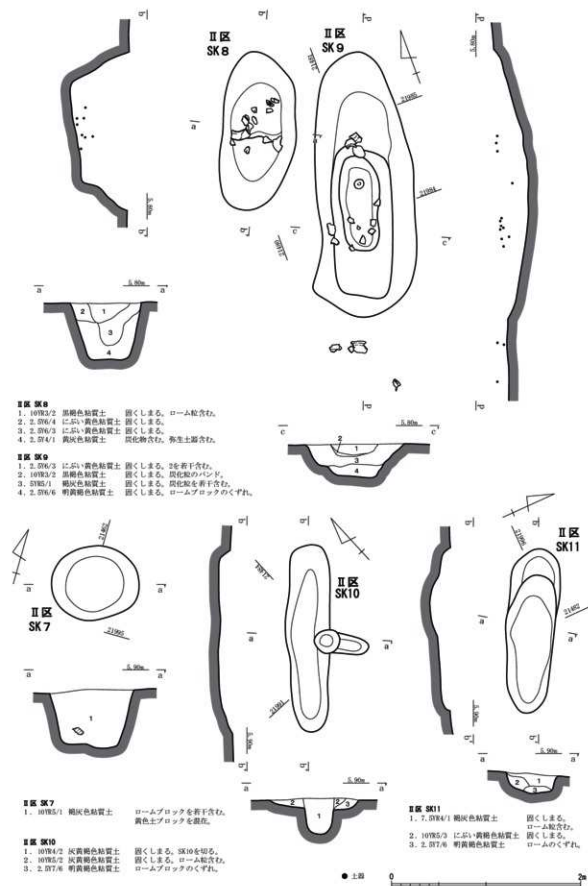


第23図 II・III区井戸2 (縮尺1/60)

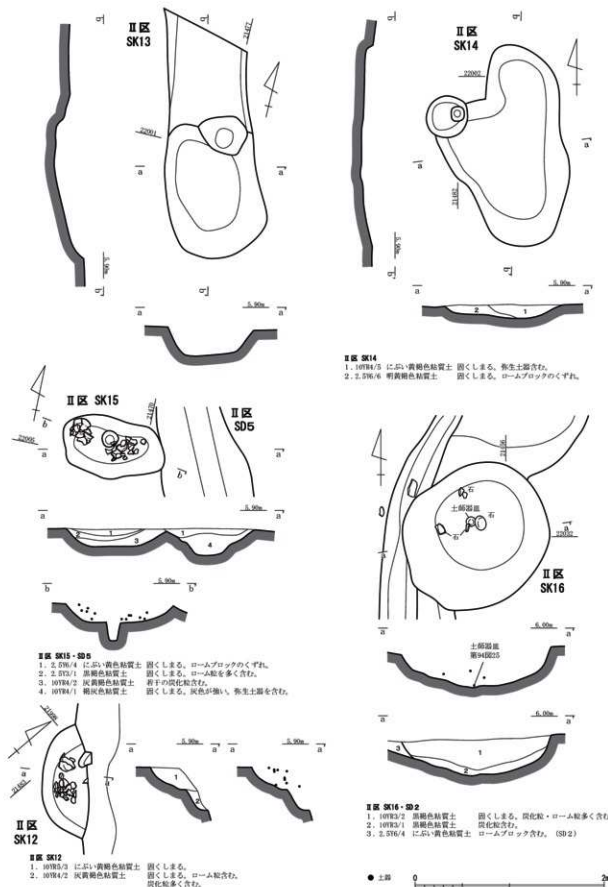


第24図 II・III区土坑1 (縮尺1/40)

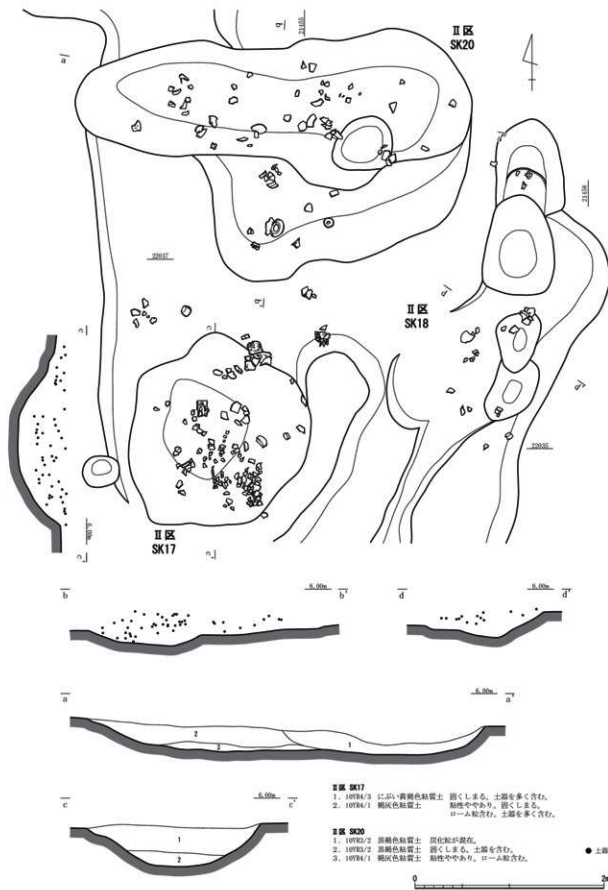




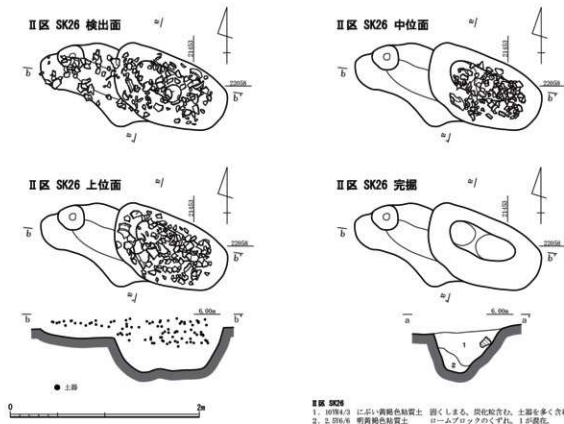
第25図 II・III区土坑2 (縮尺1/40)



第26図 II・III区土坑3 (縮尺1/40)



第27図 II・III区土坑4 (縮尺1/40)



第28図 II・III区土坑5 (縮尺1/40)

**II区SK31(第30図)** A4に位置する。平面形は円形を呈し径1.2mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さ0.8mを測る。古代の土師器甕小片や須恵器が少量出土した。

**II区SK32(第30図)** A4に位置する。平面形は楕円形を呈し長軸1.5m、短軸1.2mを測る。断面形は方形形状を呈し、深さ1.1mを測る。古代の土師器小片や須恵器の坏片が少量出土した。

**II区SK33(第30図)** F16に位置する。平面形は円形を呈し、径2.5mを測る。断面形は緩やかな逆台形を呈し、深さは0.9mを測る。古墳時代前期の土師器が出土した。

**III区SK1(第30図)** A'4に位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.9mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは0.4mを測る。古代の土師器皿が出土した。

**III区SK2(第30図)** A'3に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.0mを測る。断面形は浅皿状を呈し、深さは0.2mを測る。弥生時代後期の土器が出土した。

#### 5 小穴

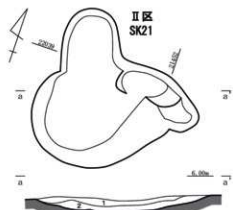
**II区P43(第31図)** D11に位置する。平面形は不整形円形を呈し、径0.6mを測る。断面の中位に段を有し、深さは0.7mを測る。遺物は古墳時代前期の蓋脚部(第64図23)が出土した。

**II区P64(第31図)** C10区に位置する。平面形は円形を呈し、径0.3mを測る。断面形はU字状を呈し、深さは0.13mを測る。遺物は、中世の土師質皿(第98図31~33)が出土した。

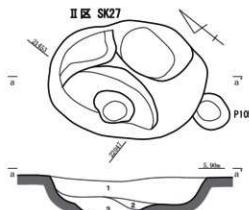
**II区P92(第31図)** C8に位置し、東側は小穴に切られる。平面形は円形を呈し、径1.1mを測る。断面形はU字状を呈し、深さは0.4mを測る。古墳時代前期の土師器が少量出土した。

#### 6 溝・旧流路

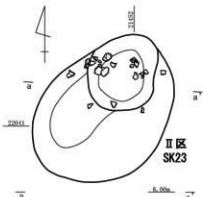
**II区SD1(第31図)** B10からE13にかけて北西-南東方向に直線的に延びる。底面は溝の東西部分が



● II 区 SK21  
1. 10784/2 灰黄褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。  
2. 10784/7 灰黄褐色粘質土 固くしまる。ロームを多く含む。



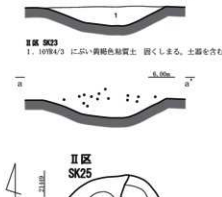
● II 区 SK27  
1. 10785/2 灰黄褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。  
2. 10785/7 灰黄褐色粘質土 固くしまる。1よりやや細かい。  
3. 2.578/4 濃い黄褐色粘質土 固くしまる。ロームブロックのくずれ。



● II 区 SK23  
1. 10784/3 濃い黄褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。



● II 区 SK28  
1. 2.578/1 褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。  
2. 10782/1 灰色粘質土 固くしまる。ロームブロックのくずれ。  
3. 2.576/4 濃い黄褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。

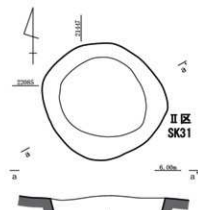


● II 区 SK25  
1. 10784/2 灰黄褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。

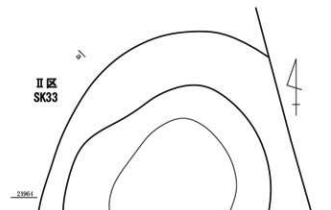


● II 区 SK29  
1. 10784/3 濃い黄褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。  
2. 10784/3 濃い黄褐色粘質土 ロームを多く含む。

第29図 II・III区土坑6 (縮尺1/40)



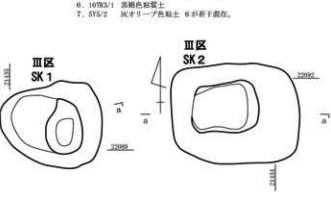
● II 区 SK31  
1. 10784/3 濃い黄褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。  
2. 10784/2 灰黄褐色粘質土 固くしまる。  
3. 10785/1 褐色粘質土 固くしまる。  
4. 10786/6 明黄褐色粘質土 固くしまる。  
5. 10784/1 褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。



● II 区 SK33  
1. 10784/1 褐色粘質土 固くしまる。  
2. 2.577/4 褐色粘質土 固くしまる。  
3. 2.576/1 褐色粘質土 固くしまる。  
4. 7.578/6 明黄褐色粘質土 固くしまる。3が覆う。  
5. 10785/1 褐色粘質土 固くしまる。  
6. 10784/1 褐色粘質土 固くしまる。  
7. 575/2 灰ケリーブ色粘土 6が断片露出。



● II 区 SK32  
1. 10784/3 濃い黄褐色粘質土 固くしまる。ロームを多く含む。  
2. 10784/2 灰黄褐色粘質土 固くしまる。土層を含む。  
3. 10786/6 明黄褐色粘質土 地山のくずれ。  
4. 10784/1 褐色粘質土 やや粘質。



● III 区 SK1  
1. 3.573/1 褐色粘質性砂質土 固くしまる。土層を含む。  
2. 10784/2 灰黄褐色粘質土 固くしまる。地山のロームブロック若干含む。  
3. 10784/2 灰黄褐色粘質土 2より地山のロームブロック多く含む。  
4. 2.577/8 黄色粘質土 地山のロームのくずれ。3が露出。

● III 区 SK2  
1. 10784/2 灰黄褐色粘質土 固くしまる。地山のロームブロック若干含む。  
2. 2.577/8 黄色粘質土 地山のロームのくずれ。

第30図 II・III区土坑7 (縮尺1/40)

溝中央部より低い。確認長40.0m、最大幅1.8m、深さ1.0mを測る。弥生時代後期の土器を中心に多く出土したが、図示可能なものは少ない。

**II区SD2** (第32図) B9・10にかけて南北方向に屈曲気味に延びる。II区SK16・18・19と切り合う。確認長16.2m、最大幅1.7m、深さ0.3mを測る。古墳時代前期の土器、磨石類が出土した。

**II区SD3** (第33図) B12からC13にかけて北西-南東方向に延びる。最大幅1.4m、深さ0.1mを測る。南方に行くにつれて次第に浅くなり消滅するが、本来はII区SD7付近まで伸びていたと考える。時期不明の土器小片があるが、他の溝の方向から中世以降に属す可能性がある。

**II区SD4** (第31・32図) B10からC12にかけて北西-南東方向および南北方向に屈曲して延びる。II区SD5との前後関係は不明だが、II区SD1を切り、II区SD6に切られる。最大幅1.1m、深さ0.3mを測る。古墳時代前期の土器が多く出土した。

**II区SD5** (第31・32図) C14からD10にかけて東西、南北方向に2か所で屈曲する。II区SD1を切り、II区SD6に切られる。最大幅1.1m、深さ0.6mを測る。古墳時代前期の土器が出土した。

**II区SD6** (第31図) D11・12にかけて北東-南西方向に弓なりに延びる。II区SD4を切りII区SD1以南には延びない。最大幅0.7m、深さ0.3mを測る。古墳時代前期の土器が出土した。

**II区SD7** (第33図) C13からF16にかけて北西-南東方向に延び、緩やかに南東方向に深くなる。II区SD9に切られるが、北西部は南東部に比べ、壁の立ち上がりが徐々に浅くなり不鮮明な底面となる。本来SD9とすべき遺物も含まれると考えるが、古代の須恵器、土器が多量に出土した。

**II区SD8** (第33図) A8からD9にかけて北西-南東方向に直線的に伸びる。溝底面の顕著な高低差は認められない。確認長33.0m、最大幅2.6m、深さ1.2mを測る。弥生時代後期を中心に多量の土器の他、砥石が出土した。

**II区SD9** (第33図) C13からF16にかけて北西-南東方向に延び、東壁際にかけて深くなる。北西部は南東部に比べ、不整形な底面となる。中世の土器・陶磁器を中心に出土しており、古代の須恵器・土器が混入する。第13図からも掘り込み面が上位であることが判る。本来は中世以降の溝と考える。

**II区SD10・11** (第33図) A・B9・10に位置する。北東-南西方向に走るSD11が、南北方向に走るSD10を切る。SD10は確認長4.0m、最大幅0.7m、深さ0.2mを、SD11は確認長8.4m、最大幅0.3m、深さ0.14mを測る。SD10からは古墳時代前期と考える土器片が、SD11から古代の土器器、須恵器が出土した。

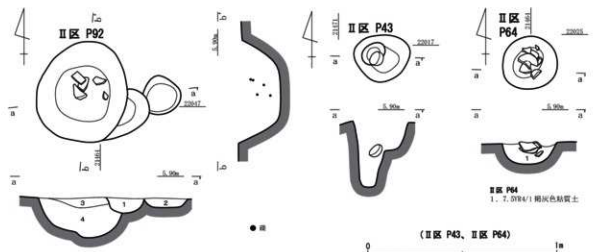
**II区SD12** (第33図) D18からF20にかけて北西-南東方向に延びる。古代、中世の他、近世以降の遺物が出土するため一部の掘削に止めた。確認範囲では幅7.8m、深さ1.5mを測る。近世以降の流路の可能性はある。

**II区SD13** (第34・35図) D16からF19にかけて北西-南東方向に直線的に延び、北西部で浅くなり消滅する。緩やかに北西方向に深くなる。II区SD14・19・20を切り、最大幅1.9m、深さ最深部で0.5mを測る。古代の土器が出土した。

**II区SD14** (第34図) D17からF18にかけて西西北-東南東方向に延び、緩やかに西方向に深くなる。II区SD13に切られ、SR1南岸と重複する。弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。

**II区SD15** (第34図) D16からF18にかけて北西-南東方向に延びる。底面の顕著な高低差は認められない。II区SD20を切り、北西側はしだいに浅くなり消滅する。時期不明の土器質片が出土した。

**II区SD16** (第34図) C16からF19にかけて北西-南東方向に弓なりに延び、緩やかに北方向に深くなる

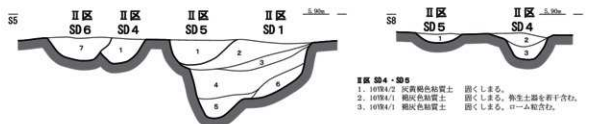


- II区 P92**
1. 1095/2 におい黄褐色粘土 固くしまる。
  - 1095/3 におい黄褐色粘土 ロームブロック多量含む。
  - 1095/2 におい黄褐色粘土 固くしまる。ロームブロック含む。
  - 1095/4 褐色粘土 固くしまる。礫を含む。



- II区 SD1**
1. 1095/2 灰黄褐色粘土 固くしまる。
  - 1095/1 褐色粘土 ロームブロック多量含む。

- II区 SK13**
1. 1094/3 におい黄褐色粘土 固くしまる。弥生土器含む。
  2. 1094/6 褐色粘土 固くしまる。ロームブロック多量含む。
  2. 1094/1 褐色粘土 固くしまる。2ヶ所礫含む。
  2. 1094/2 におい黄褐色粘土 固くしまる。2ヶ所礫含む。
  2. 1094/1 褐色粘土 固くしまる。灰土。4ヶ所下礫含む。

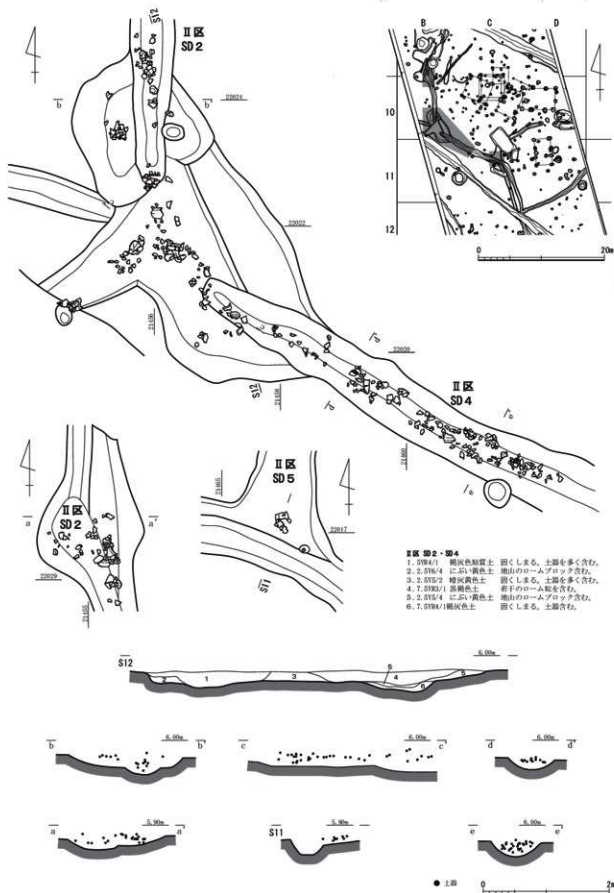


- II区 SD1・SD4・SD5・SD6**
1. 1094/4 褐色粘土 固くしまる。弥生土器含む。
  - 1094/2 灰黄褐色粘土 1より色暗く含む。ローム含む。
  - 1094/2 灰黄褐色粘土 2よりローム多量含む。
  - 1094/2 赤褐色粘土 2より色暗い。弥生土器多量含む。
  - 1094/4 褐色粘土 ロームブロック多量含む。
  2. 1094/4 におい黄褐色土 ロームブロックのくずれ。
  - 1094/3 褐色粘土 固くしまる。礫を含む。弥生土器を含む。

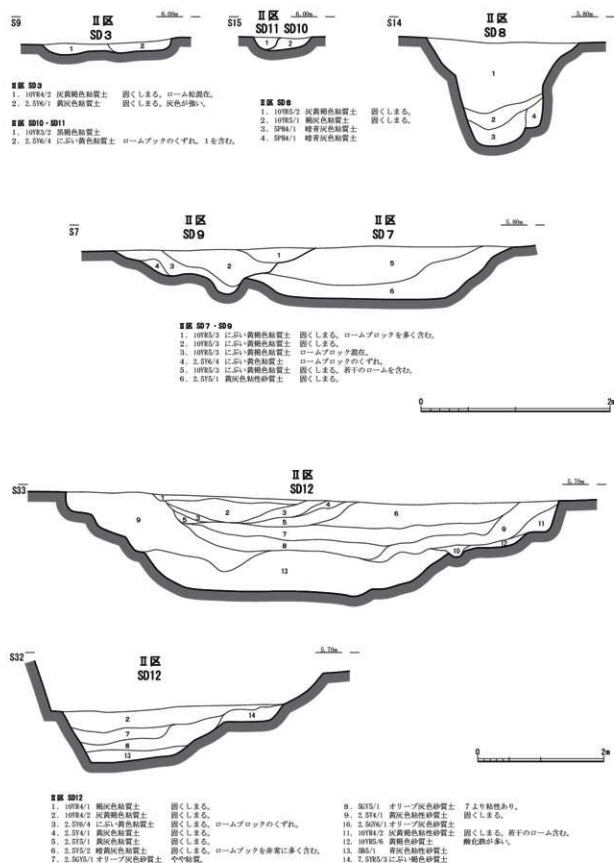


- II区 SD6**
1. 1094/2 におい黄褐色土 ローム多量含む。
  - 1094/4 におい黄褐色土 固くしまる。弥生土器含む。

第31図 II・III区小穴、溝1 (縮尺1/20、1/40)



第32図 II・III区溝2 (縮尺 1/600・1/60)



第33図 II・III区溝3 (縮尺 1/40・縮尺 1/60)

る。幅狭く浅い溝である。時期不明の土師質片が出土した。

**II区SD17**(第35図) D18に位置し、北東-南西方向に延びる。一部分のみの確認に留まる。時期不明の土師質片が出土した。

**II区SD18**(第35図) D・E18に位置し、北西-南東方向に直線的に延びる。一部分のみの確認に留まる。時期不明の土師質片が出土した。

**II区SD19・20**(第34図) C15・16からF16・17にかけて、概ね東西方向に延び、緩やかに西方方向に向かって深くなる。SD19、20と遺構番号を付したが、本来は1条の溝であり、SD20が埋没していく過程で規模縮小していった段階がSD19といえよう。最深部は0.8mを測る。SD19から古墳時代前期の土師器が、SD20からは同、小片が出土した

**II区SD21**(第35図) A・B7に位置し、概ね南北方向に延びる。確認長3.5m、幅0.6m、深さ0.3mを測る小規模な溝である。古墳時代前期と考える土師器が出土した。

**II区SD22**(第35図) A・B7に位置し、概ね東西方向に延びる。西側は調査区外に延びる。幅1.6m、深さ0.1mを測る浅い小規模な溝である。古墳時代前期と考える土師器が出土した。

**II区SD23**(第35図) A7に位置し、概ね南西-北東方向に延びる。西側は調査区外に延びる。最大幅1.3m、深さ0.2mを測る浅い小規模な溝である。弥生時代後期の土器が出土した。

**II区SD24**(第35図) B6に位置し、南北方向に延びる。確認長4.6m、最大幅0.8m、深さ0.2mを測る浅い小規模な溝である。西側肩部を中心に弥生時代後期の土器が出土した。

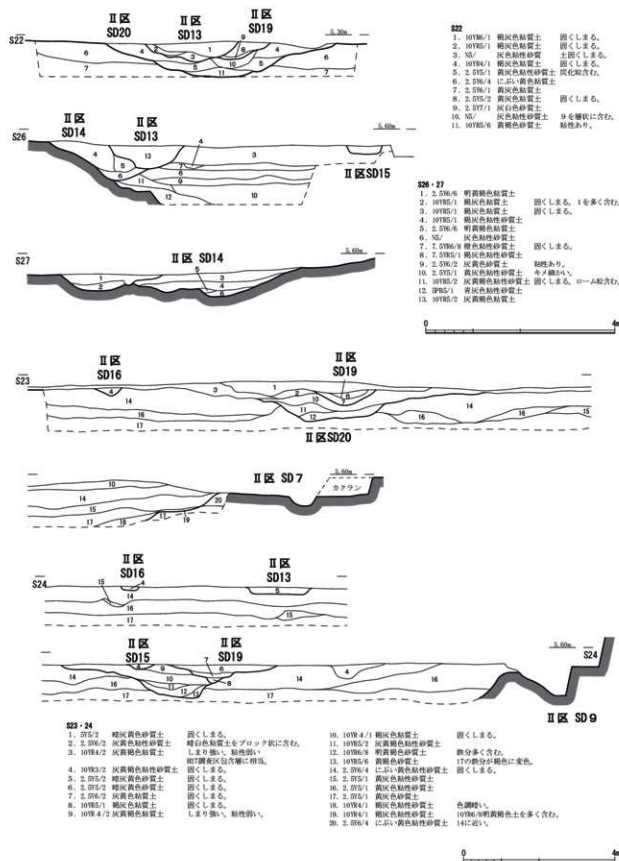
**II区SD25**(第35図) A6からB4にかけて、北東-南西方向に延びる。II区SD26を切る。底面の顕著な高低差は認められない。確認長24.0m、最大幅0.5m、深さ0.2mを測る、幅の細く浅い溝である。古代と考える灰軸片が出土した。

**II区SD26**(第35図) A5に位置し、概ね南北に弓なりに屈曲する。II区SD25に切られる。底面には顕著な高低差は認められない。最大幅0.4m、深さ0.2mを測る、細く浅い溝である。上面から古墳時代前期の甕底部片が出土した。

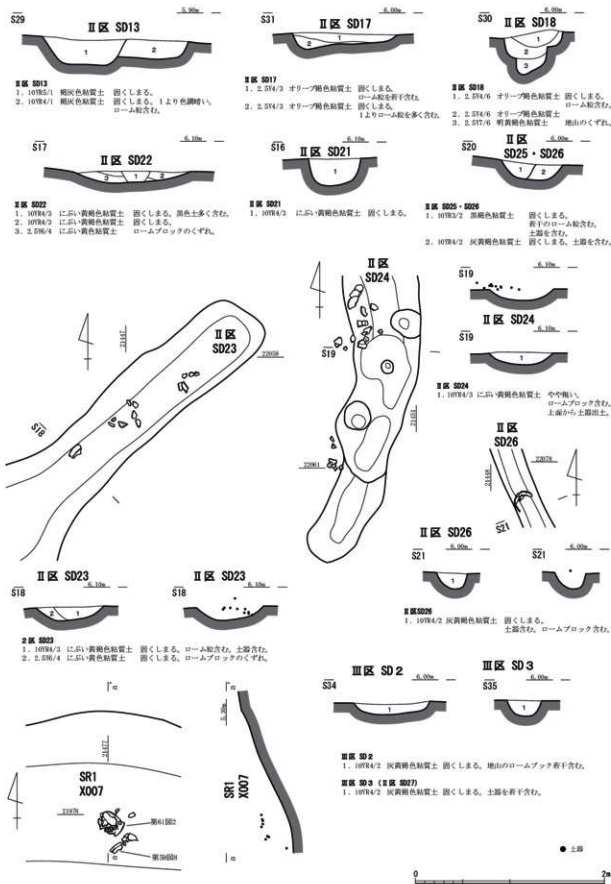
**III区SD2**(第35図) A'3に位置する南北方向に延びる小規模な溝である。小穴を伴う浅い落ち込み状の遺構から延びる。古墳時代前期の土師器が出土した。

**III区SD3**(第35図) A4からA'5にかけて、概ね北東-南西方向に直線的に延びる。II区SD27と同一の溝で、II区SE3に切られる。最大幅0.4m、深さ0.2mを測る細く浅い溝である。古墳時代前期の土師器が出土した。

**II区SR1**(第34・35図) C15・16からF16~18にかけて確認した。E15内でやや湾曲する東西方向に延びる自然流路である。北側および南側の肩部のみの確認とし、旧河道を横断するトレンチは確認面から1.2mまでの掘削に止めた。なお、南側の肩部はSD14と重複する範囲がある。幅は20.0~22.0mを測る。埋土は粘性砂質土が主体となり、埋没する過程で湿地状となっていた可能性があり、埋没後はII区SE4・SK33・SD13~16・19・20の遺構確認面となる。弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多量出土している。遺物が単体、及びまとまって出土した地点があり、1例の出土状況を図示した(第35図X007)。X007は流路の肩部付近で確認した甕(第59図8、第61図2)である。また、北側肩部からはX006とした石杵(第101図12)が出土した。



第34図 II・III区溝4 (縮尺1/80・縮尺1/100)



第35図 II・III区溝5・自然流路 (縮尺1/40)

第4章 遺物

第1節 土器・土製品 (第36～100図、第1～4表)

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代から中世までの各時代の土器が多くを占める。ここでは弥生時代でも中期の土器を含む古墳時代前期までの土器について遺構ごとに説明し、そののち包含層出土の土器、古代の土器、中世の土器、そして土製品の順に説明していく。

1 弥生時代から古墳時代前期の土器 (第36～93図)

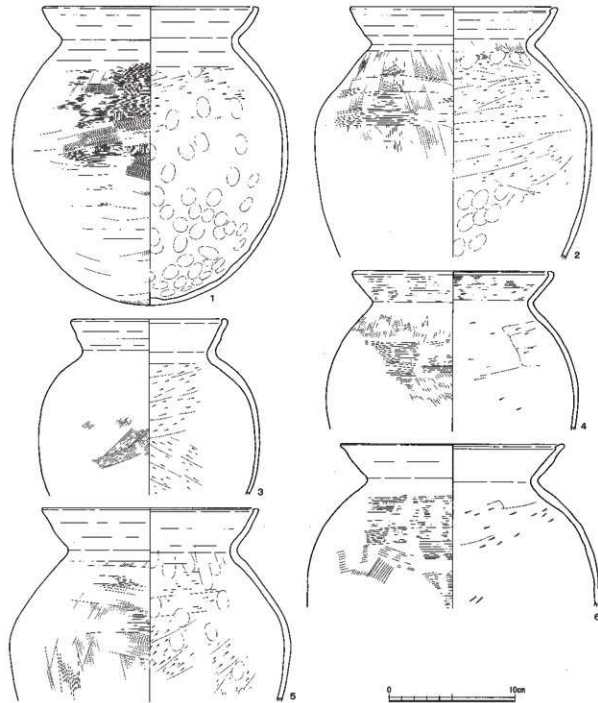
1 I区の遺構出土土器

I区SK1は無文で有段が不明瞭な鉢(第36図1)がある。I区SK2は3点図化できた。甕は擬凹線文があるものと無文のものがある。前者は口縁端部が先細りするもので、内面に連続指頭圧痕を明瞭に残すもの(第36図2)と、擬凹線文が摩滅のため不明瞭なもの(第36図3)である。高坏(第36図4)は丸い底部から屈曲して外反する坏部である。I区SK3は5点図化した。甕は摩滅で表面の剥落が著しく、本来は擬凹線文のあったと思われるもの(第36図10)である。壺は無文の有段口縁で口径が15cm前後に復元できるもの(第36図8)と、20cmを超える口径で大型の壺(第36図5)がある。短く「ハ」の字に開く脚台(第36図9)は、有段口縁の壺につくものである。また同様な器台筒部(第36図7)もある。鉢では、有段口縁で擬凹線文があるもの(第36図6)は口径と器高がほぼ同じに復元できる。I区SK4は17点を図化した。甕は7点ある。口縁内面が肥厚する布置式は6点あるが、肥厚が小さいもの(第37図1)、端部の全



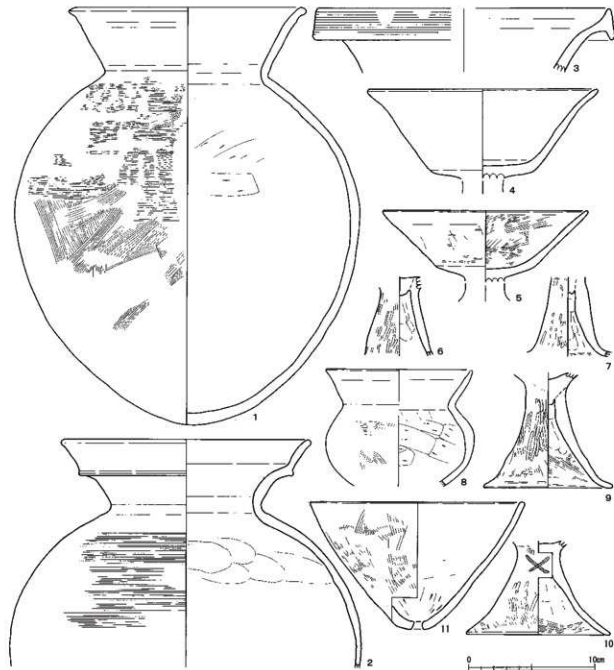
第36図 I区遺構出土弥生土器・古式土器Ⅰ (縮尺1/3)

体が突出するもの(第37図4)、丸みのある突出となるもの(第37図3)、突出して水平に平坦面を作るもの(第37図2・5・6)と若干異なる。壺は丸底でやや縦長の丸い胴部の屈曲した頸部から口縁が「ハ」の字に開くもの(第38図1)で、口縁端部が僅かに外反する。「ハ」の字に開くもの(第38図2)は、口縁の立ち上がりを目立たせに突出させる二重口縁である。口縁を上下に伸ばして有段とするもの(第38図3)は、5条の擬凹線を施文する。小型の壺(第38図8)は「ハ」の字に開く口縁の端部を揃まみ上げる。高坏は坏部が直線「ハ」の字に開くもの(第38図5)と、僅かに外反するもの(第38図4)がある。脚部には外反して「ハ」の字に開き、裾端部を外反させるもの(第38図9)と、全体に僅かに外反するもの(第



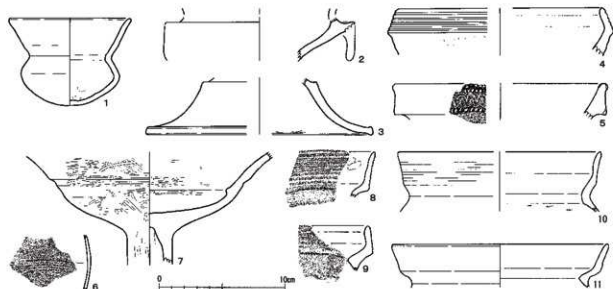
第37図 1区遺構出土弥生土器・古式土師器2 (縮尺1/3)

38図10)があり、後者には「×」の梵書きがある。上半の筒部だけのもの(第38図6・7)も同様であろう。有孔鉢(第38図11)は小さな平底である。I区SD7は5点を図化した。壺は内湾する有段口縁に5条の擬凹線を施文するもの(第39図4)と、また口縁部が大きく開く丸底の小型の壺(第39図1)は完全近くは復元できた。口縁帯の上下端部に刺突を加え、その間に櫛波状文を施文するもの(第39図5)は、器台の受部と考える。無文の有段脚(第39図3)は高坏か器台のいずれか判断できない。垂下帯を欠いた裝飾器台片(第39図2)もある。柱穴・小穴出土遺物には、I区P24からは外面がハケ調整、内面がケズリで非常に薄い甕胴部片(第39図6)が出土している。I区P106からは先端が先細りし、内面に指頭圧痕のある有段擬凹線文甕(第39図8)が出土している。I区P115からは直立する有段擬凹線文甕の口縁(第39図9)が出土している。I区P120からは有段口縁甕の口縁部が2点出土しているが、微かに擬凹線文を確認で



第38図 1区遺構出土弥生土器・古式土師器3 (縮尺1/3)



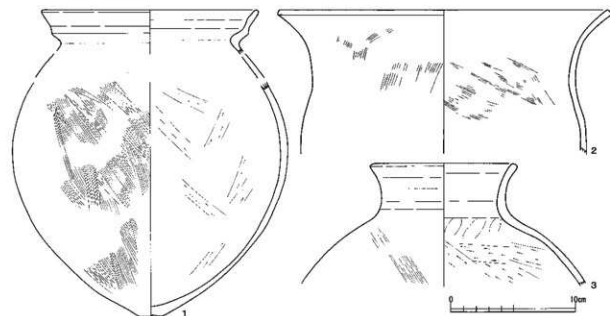


第39図 I区遺構出土弥生土器・古式土器4 (縮尺1/3)

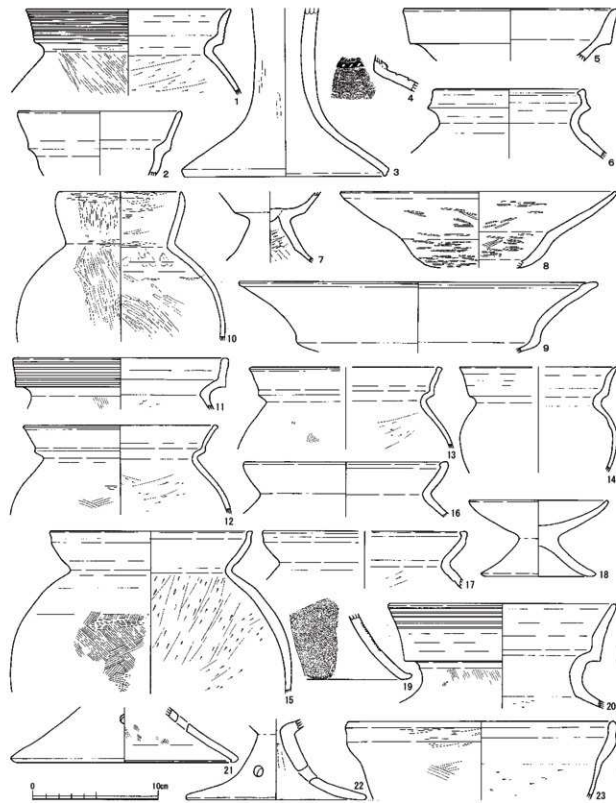
さるもの(第39図10)の頸部は丸みがあり、内面の有段は不明瞭である。無文の有段と思われるもの(第39図11)の頸部は「く」の字に屈曲する。I区P134からは坏部が丸い底の高坏(第39図7)が出土している。

## 2 II区区の遺構出土土器

II区SI2は3点を図化した。有段口縁の甕(第40図1)は外反する口縁部の立ち上がりを出させるが、山陰系に典型的な鋭い突出ではなく、全体に盛り上げるようなものである。胎土などから同一個体と考えられる底部は僅かながら平底を残す。II区SI2のビット(P1)から出土した壺(第40図3)は丸みのある頸部から僅かに外反する短い口縁部である。II区SI2のSK2からは、外面がタテハケ調整、内面がナメハケ調整で器形からも弥生時代中期の甕(第40図2)が出土している。粉れ込みか、SK2が本来はSI2に伴わないかであろう。II区SE1は4点図化できた。9条の擬凹線文が明瞭な甕(第41図1)と、「へ」



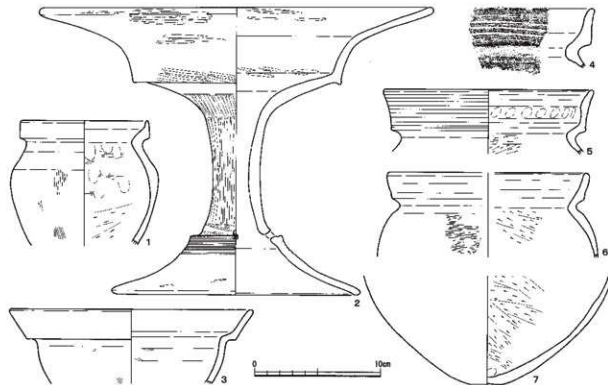
第40図 II区遺構出土弥生土器・古式土器1 (縮尺1/3)



第41図 II区遺構出土弥生土器・古式土器2 (縮尺1/3)

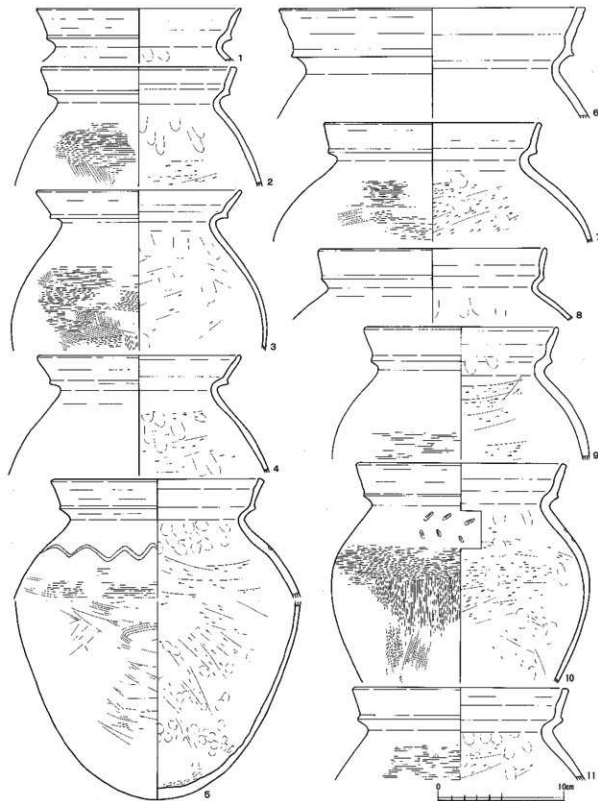
の字状の筭刺突のある壺胴部上半片(第41図4)、緩く外反して端部となる脚台(第41図3)に、無文の有段口縁鉢(第41図2)である。II区SE2は4点図化できた。壺は内傾する短い有段口縁の山陰系のもの(第41図6)と、無文の有段口縁で(第41図5)である。高坏は丸い坏底部から屈曲して直線に伸びる口縁の

もの(第41図8)と、小型の高坏の坏部と脚部の接合部分(第41図7)である。Ⅱ区SE3は15点図化した。甕はほぼ直立する有段口縁で擬凹線文が明瞭なもの(第41図11)と、摩擦で擬凹線文が不明瞭なもの(第41図14)で、後者は口縁が外反し、端部が先細りする。有段でも口縁の立ち上がり突出する山陰系のもの(第41図12・13)は、口縁端部にヨコナデして面を有する。口縁端部が内面に肥厚する布留式のものには、肥厚が大きいもの(第41図16)と、小さいもの(第41図17)がある。口縁を垂直に1cm弱ほど立ち上げるもの(第41図15)は、内湾する口縁で胴部上半にヨコハケを残すことから、布留式に類するものと考えられるがその類例は確認できていない。壺は擬凹線文がある有段口縁(第41図20)と、縦長の丸い胴部から屈曲して口縁が立ち上がり、端部を揃えて僅かに内傾する口縁のもの(第41図10)である。後者は胴部から口縁部外面はタテミガキ、端部のみヨコミガキする。高坏は口縁内面が幅広く肥厚するもの(第41図9)と、「ハ」の字に開く脚部に小さく開く受部のもの(第41図18)である。後者は摩擦が酷く、端部の形状が怪しい。器台は脚部の中ほどでさらに大きく外反する(第41図22)。高坏か器台か判断できない脚部には、2条の沈線を挟んでS字のスタンプを施文するもの(第41図19)と、「ハ」の字に開く脚部のやや下に孔が位置するもの(第41図21)がある。鉢には有段が不明瞭なもの(第41図23)があり、窪む口縁帯中ほどに擬凹線のようにヨコハケを行う。Ⅱ区SK3からは3点図化した。鉢の2点は有段口縁である。有段が揃まみ出したように小さなもの(第42図1)は無文の口縁部である。無文のもの(第42図3)は器高より口径が大きくなる。器台は口縁部が大きく開くもの(第42図2)で、脚部が有段になる。施文は有段脚に6条の沈線を巡らすだけである。Ⅱ区SK4からは底部1点(第41図7)である。小さいが明らかに平底である。Ⅱ区SK5からは甕の口縁部3点を図化した。擬凹線が4条と明瞭なもの(第42図4)と、条線が不明瞭なもの(第42図5)があり、後者には連続指頭圧痕を明瞭に残す。無文の有段口縁(第42図6)は、頸部が「く」の字に屈曲する。Ⅱ区SK6からは28点が図化できた。布留甕口縁内面の肥厚は小さいもの(第44図7・10)、丸みのある突出となるもの(第44図5)、突出して水平に平坦面を作るもの(第44図4・



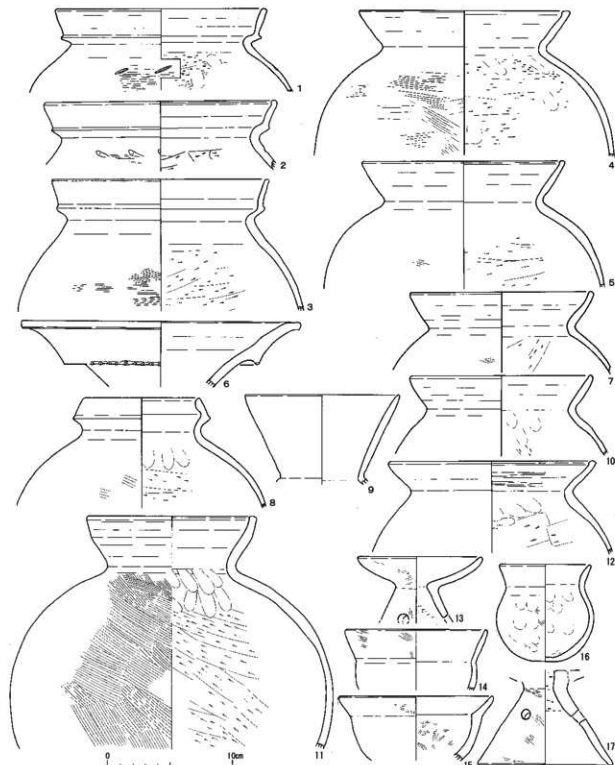
第42図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土器器3 (縮尺1/3)

12)である。山陰系の甕の多くは口縁帯が外傾する。口縁端部の突出するものは少なく、突出するもの(第43図9、第44図2)も小さい。先細りするものや丸くするもの(第43図1・4・8、第44図1)は少なく、平坦にするもの(第43図2・3、5~7・10・11、第44図3)が多い。立ち上がりの突出も弱いもの(第



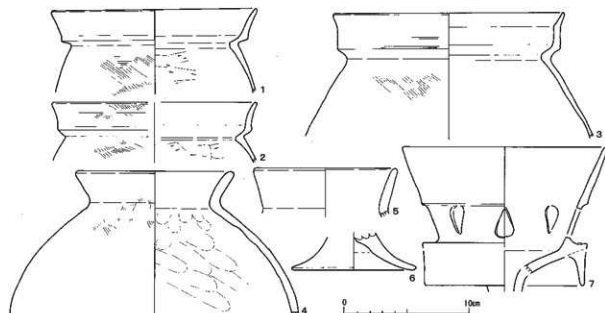
第43図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土器器4 (縮尺1/3)

43図1・2・6・8・9、第44図2)、強いもの(第43図3～5・7・10・11、第44図1・3)に分かれる。施文は波状の沈線を巡らせるもの(第43図5)と、羽状の列点を3カ所加えるもの(第43図10)である。壺には二重口縁の立ち上がり(第44図6)がある。山陰系の壺(第44図8)は立ち上がりの突出も明瞭で、大きく内傾する。内湾して立ち上がる口縁端部を明らかに肥厚させるもの(第44図11)は、口縁や胴部の器壁も厚く、頸部も小さくすぼまる。口縁が「ハ」の字に開くもの(第44図9)は丸い



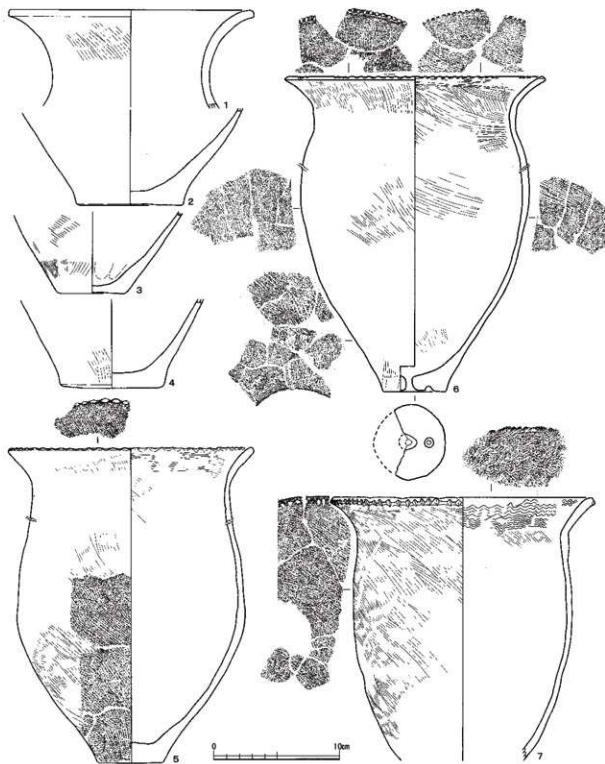
第44図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器5 (縮尺1/3)

胴部となる壺である。器台は内湾して開く小型器台(第44図13)の他、単純に「ハ」の字に開く脚台(第44図17)がある。「ハ」の字に開く脚部(第47図4)は接合部の状況から器台である。鉢は頸部の屈曲が弱いもの(第44図16)、「く」の字に屈曲し開きが大きいもの(第44図15)、立ち気味に小さく開くもの(第44図14)がある。II区SK9からは7点図化した。甕の有段口縁は3点で口縁部を無文とする(第45図1・2)が、端部先細りのもの(第45図3)は摩滅が著しく掘田線文が微かに残る。「く」字口縁(第45図4)は、器壁も甕よりやや厚く胴部が大きく張ることから壺にも分類できる。壺には直立する短い口縁部片(第45図5)もある。「ハ」の字に外反する脚台(第45図6)は壺や鉢の小型品に付く例が多い。脚部を欠く裝飾器台(第45図7)は、水滴形の透かしが8個に復元できる。II区SK8とII区SK12、II区SK15からは弥生時代中期の土器のみが確認されている。II区SK8からは広口壺の口縁部(第46図1)と、底部と考えられるもの(第46図2)が出土している。底部はSK12・15などの甕の底部と比較すると、厚手で平底の安定感があるもので、胎土や色調などからも同一個体と判断した。II区SK12からは甕(第46図5)が出土しているが、口縁部と胴部は、胎土や色調もほぼ同じであることから同一個体であろう。また別個体と考えられる底部(第46図4)もある。II区SK15からは甕2個体と底部が出土している。甕の口縁内面には波状文があるもの(第46図7)とヨコハケのもの(第46図6)がある。底部まで復元できた甕(第46図6)も接合できていないが、胎土や色調に加えて、ハケ調整からも同一個体であろう。この底部には焼成後に穿った孔があり、その横には貫通していない孔の窪みがある。この他に厚手の安定した甕の底部と考えられるもの(第46図3)も出土している。II区SK13からは小型の高杯の坏部と脚部との接合部分(第47図5)の1点だけ図化できた。II区SK16からは2点図化できた。甕(第47図9)は頸部の復元径が小さく、外面がタテハケののち胴部上半をヨコハケ調整、頸部直下を指押さえる。小型器台(第47図8)は、受部が揃まみ上げた端部となる。II区SK17からは10点図化できた。甕はいずれも布留式で、肥厚が小さく丸みのあるもの(第47図1)、肥厚した口縁上端に水平面を有するもの(第47図2・10)、揃まみ上げて沈線を加えて上に突出させるもの(第47図3)と個体差がある。胴部はタテハケののち、胴部最大径から上半部にはヨコハケ調整が基本である。二重口縁の壺(第47図7・11)は大きく開く頸部内部の段は弱い外面の



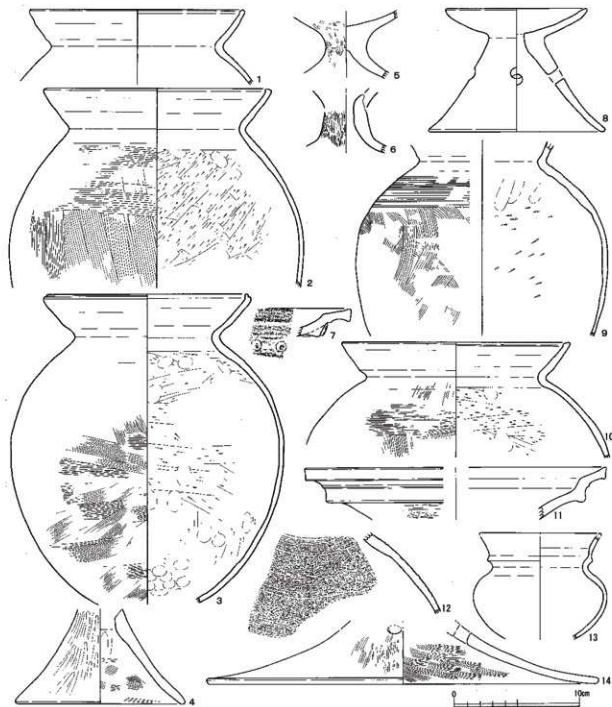
第45図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器6 (縮尺1/3)

段は明瞭で、口縁端部に幅広の平坦面があるものである。浮文が確認できないもの(第47図11)と、二個一対確認できたもの(第47図7)がある。胴部上半の破片に5~6条の直線文と山形波状文を2段に施文するもの(第47図12)は、胎土や色調などから先の二重口縁(第47図7・11)の胴部片と考えられる。有段の口縁の立ち上がりを突出させる小型の壺(第47図13)は山陰系の影響であろうか?大きく開く脚部(第47図14)は小さな坏部の高坏と考えられる。小さな接合部分(第47図6)は器台のものと考えられる。II



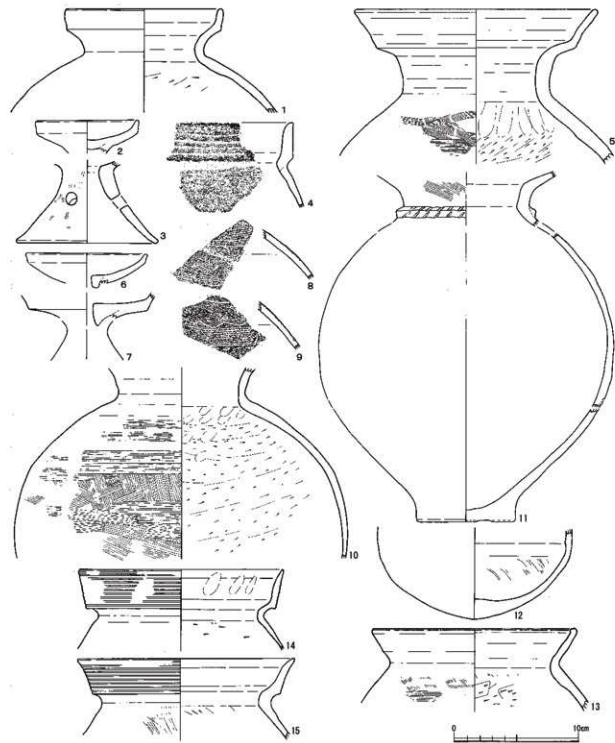
第46図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器7 (縮尺1/3)

区SK18からは4点図化した。甕はほぼ直立する有段口縁(第48図4)で、5条の擬凹線が施文される。壺はほぼ直立する有段口縁(第48図1)で丸みのある胴部に続く。小型器台(第48図2)は受部のみで、摩擦が著しい。器台の脚部(第48図3)は中型のものとなるであろう。II区SK20からは7点図化した。甕はない。壺は模様や凸帯などが全くない有段口縁(第48図5)と、二重口縁の胴部と考えられるもの(第48図10)がある。大きな平底から長胴に復元できる壺(第48図11)は接合しないもの、類似する胎土から刺突を加えた凸帯の頸部となり、口縁部を欠く。櫛描波状文を上下の櫛描直線文で挟む施文(第48図8・9)は壺の胴部上半の破片であろう。器台には受部の口縁部の上に横まみ上げる小型器台(第48図6)と、



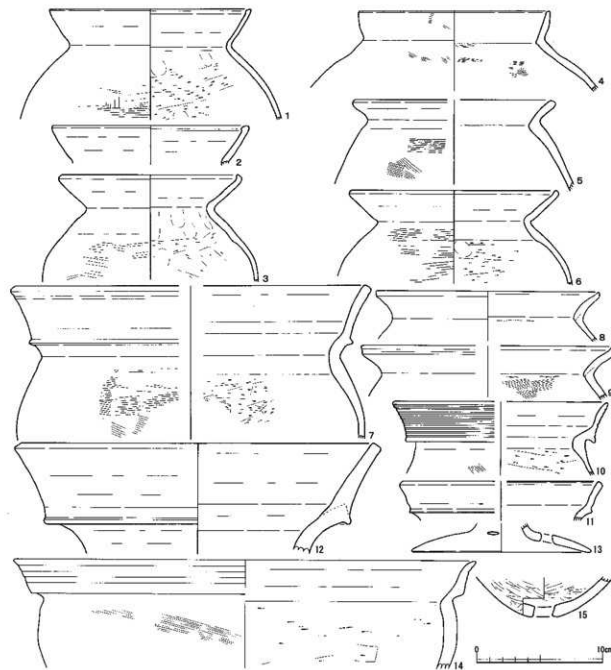
第47図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器8 (縮尺1/3)

やや大きめの坏底部(第48図7)の中型の器台がある。Ⅱ区SK22(SB3柱穴3)からは中型の壺底部(第48図12)の1点が図化できた。底部をやや厚くし僅かに尖底状とする。Ⅱ区SK24からは小さく口縁端部内面が肥厚する布留式の甕(第48図13)の1点が図化できた。Ⅱ区SK25からは擬凹線を施文する有段口縁甕2点を図化できた。擬凹線は9~10条と明瞭だが、内面に連続指頭圧痕があるもの(第48図14)と、ないもの(第48図15)がある。Ⅱ区SK26からは19点図化できた。有段口縁の甕は1点(第49図10)で、ゆるく外反する口縁である。有段でも立ち上がりが出する山陰系の甕は口径が16cmのもの(第49図11、第50図3・



第48図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器9 (縮尺1/3)

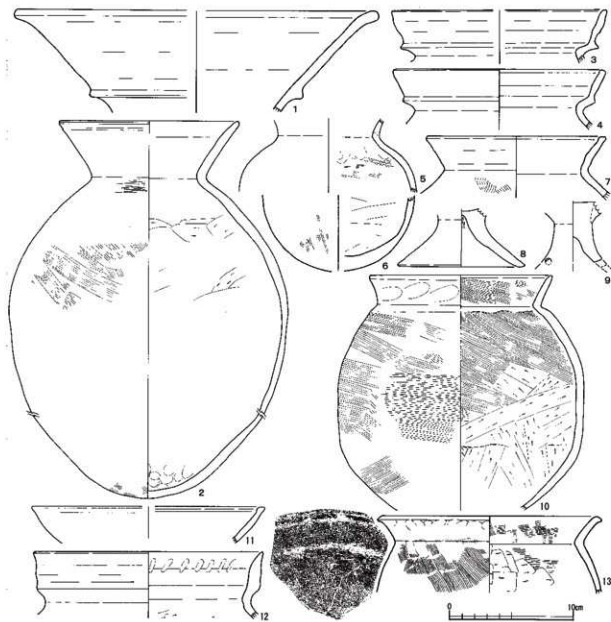
4)と、30cm近くになる大型のもの(第49図7)がある。「く」の字甕は短い口縁部外面がやや膨らむもの(第49図4)、短い口縁全体がやや厚くなるもの(第49図5)、端部を僅かにつまみ上げるもの(第49図6・8)、つまみ上げが明瞭なもの(第49図9)などがある。口縁端部内面が肥厚する布留式の甕は、肥厚が小さいもの(第49図1)と、やや大きいもの(第49図2)、上につまみ出すもの(第49図3)である。二重口縁の甕には有段部の突出が明瞭なもの(第49図12)と、突出が明瞭ながら小さいもの(第50図1)がある。頸部から「ハ」の字に開くもの(第50図2)は、やや長胴で丸底になると思われる。鉢は口径が30cmを超える大型の有段口縁で擬凹線が明瞭(第49図14)で、端部が先細りする。底部に焼成前に穿孔するもの(第49図15)は丸底である。高坏や器台などの脚部は扁平で器高が低いもの(第49図13)である。Ⅱ区SK28からは3点図化した。口縁端部内面が僅かに肥厚する甕(第50図7)と、丸い胴部片の壺(第50図5)、厚い丸底



第49図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器10 (縮尺1/3)

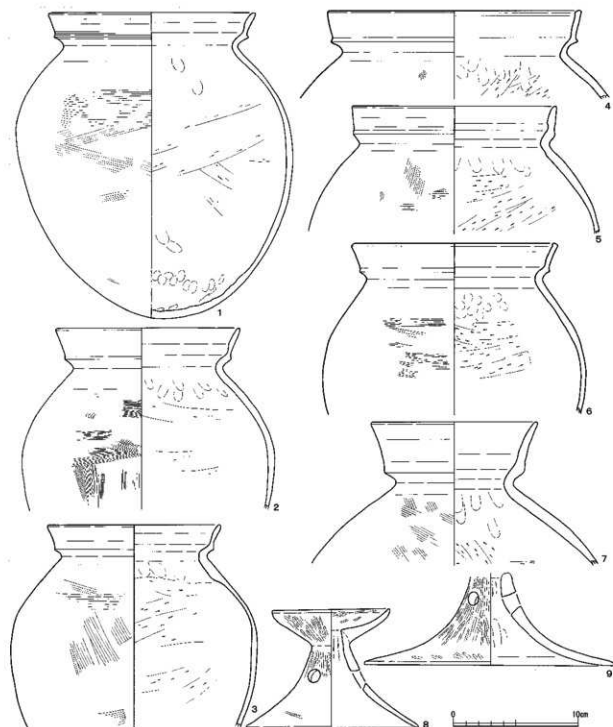
の壺(第50図6)である。Ⅱ区SK29からは9点図化した。図化した甕6点(第51図1～6)はいずれも有段口縁の立ち上がりが突出する山陰系だが、突出や口縁端部が若干異なる。突出は小さいが明瞭なもの(第51図1・4・6)、不明瞭な突出のもの(第51図2・3・5)の2つのタイプがある。北陸在地の無文有段口縁甕との違いは、口縁を立ち上げる際に内面に段を残すなどである。壺は有段口縁(第51図7)で、口縁帯に擬凹線文があるように見えるが、摩擦のため明らかではない。高坏は大きく開く脚部(第51図9)で、坏部が小さい東海系と考えられる。器台は典型的な小型器台(第51図8)である。Ⅱ区SK31からは高坏の坏部と脚部との接合部(第50図9)と、鉢などの脚部(第50図8)の2点を図化した。Ⅱ区SK33からは甕4点を図化した。無文の有段口縁(第50図12)は内面に連続指頭圧痕が明瞭である。口縁内面が肥厚するもの(第50図11)は水平な端面となる。「く」の字甕(第50図10・13)はいずれも口縁部をヨコナデしない指押さえのみとする。

Ⅱ区SD1からは口縁部を欠く高坏の坏底部(第52図2)と、「ハ」の字に開く蓋の摘み部(第52図1)の



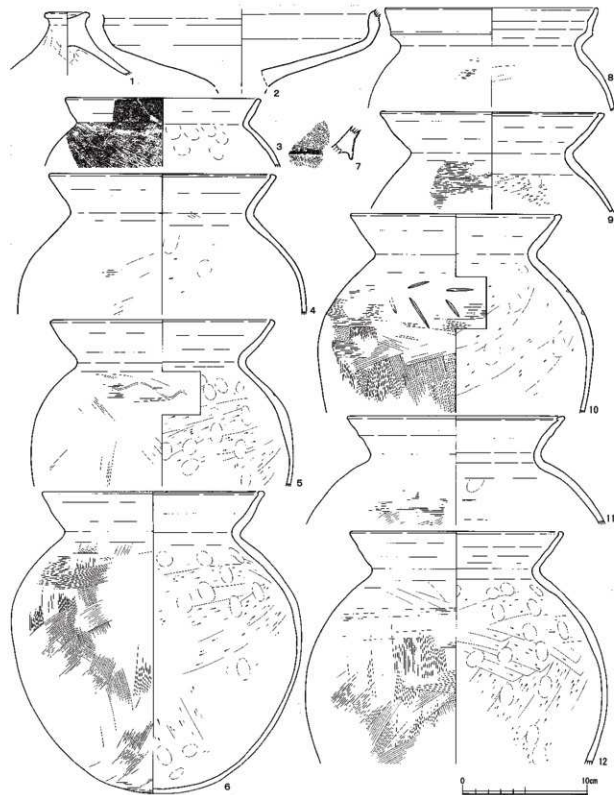
第50図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器11(縮尺1/3)

2点を図化した。Ⅱ区SD2からは25点を図化した。甕は有段口縁でも立ち上がりが突出する山陰系(第52図8)で、口縁を立ち上げる際に残す内面の段が明瞭である。「く」の字甕(第52図3)はハケ調整のちにタタキを行う。口縁の内面が肥厚する布留式の甕は7点ある。肥厚が小さいものは1点(第52図5)のみで、明瞭なもの(第52図4・6・10～12)が多く端部が水平な面となる。胴部上半に刺突を加えるもの(第52図10)があり、刺突は横向きの「ハ」の字を3カ所連続する。壺ではやや縦長の丸い胴部から、頸部から直接大きくラップ状に外反する口縁のもの(第53図1)を略完形に図化できた。胴部中ほどは調整



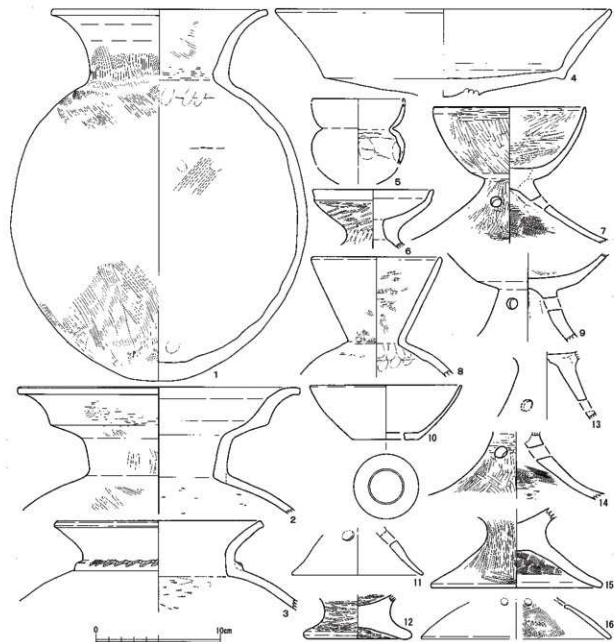
第51図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器12(縮尺1/3)

が不明でその他はタテハケ調整である。同じようにラッパ状に開くやや短い口縁の壺(第53図3)には、頸部に刺突を加えた凸帯を貼り付ける。二重口縁の壺(第53図2)には、凸帯や浮文、櫛描文など全く加飾がない。内湾する口縁端部を欠くもの(第53図5)は小型の丸底、口縁部が直線に「ハ」の字に開く壺(第53図8)は中型の丸底と思われる。高坏には大きな坏底部からほぼ直線に開く大型もの(第53図



第52図 II区遺構出土弥生土器・古式土器13 (縮尺1/3)

4)と、塊状の小さな坏部に大きく開く脚部のもの(第53図7)がある。接合部のみのもの(第53図9)であるが、小さな坏底部から内湾する口縁の高坏である可能性が高い。この他にも「ハ」の字に開く脚部片(第53図13・14)や、僅かに内湾する脚部(第53図16)も高坏であろう。塊状の坏底部に4cm弱ほどの焼成前の孔が確認出来るもの(第53図10)は、接合部分との接合が悪く、脚部が離れてしまったものと考えられる。小型器台には口縁端部を掴み上げる受部(第53図6)と、円孔の位置から小型器台の脚部と考えられるもの(第53図11)がある。やや粗いヨコミガキの脚台(第53図12)や、「ハ」の字に開く孔のない脚台(第53図15)は小型の壺・鉢などに付くものと考えられる。II区SD3からは1点を図示したのみである。櫛描波状文の加飾のある壺の小片(第52図7)で、口縁部の形状は不明である。II区SD4からは14点図化した。布留式壺は7点(第54図1～4・8・10・11)あり、いずれも肥厚は明瞭である。特に口縁端部が水平な面となるもの(第54図1・3・4・8・11)が目立ち、丸みのあるもの(第54図2・10)もある。



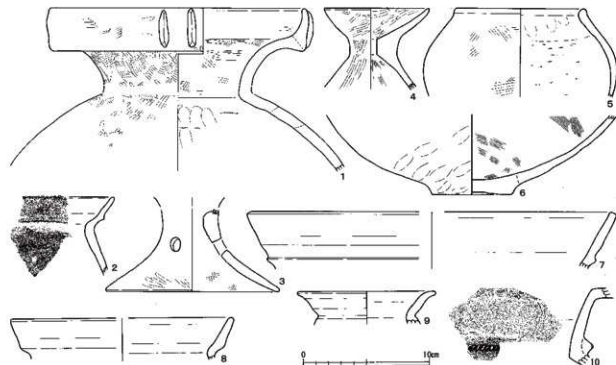
第53図 II区遺構出土弥生土器・古式土器14 (縮尺1/3)

有段口縁甕でも立ち上がり突出する山陰系(第54図6・7・9)は、いずれも外傾して開く口縁帯である。立ち上がりの突出が明瞭なもの(第54図6・7)と、やや不明瞭なもの(第54図9)がある。壺は浮文や施文がない二重口縁(第54図14)と、短く立ち上がった口縁が内傾する山陰系のもの(第54図13)がある。刺突を加えた凸帯の下に2列のへら刺突を2段残すもの(第54図5)も壺であろう。受部のみの小型器台(第54図12)は、口縁端部を揃まみ上げる。Ⅱ区SD5からは6点図化した。甕は口縁帯の立ち上がりが明



第54図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器15 (縮尺1/3)

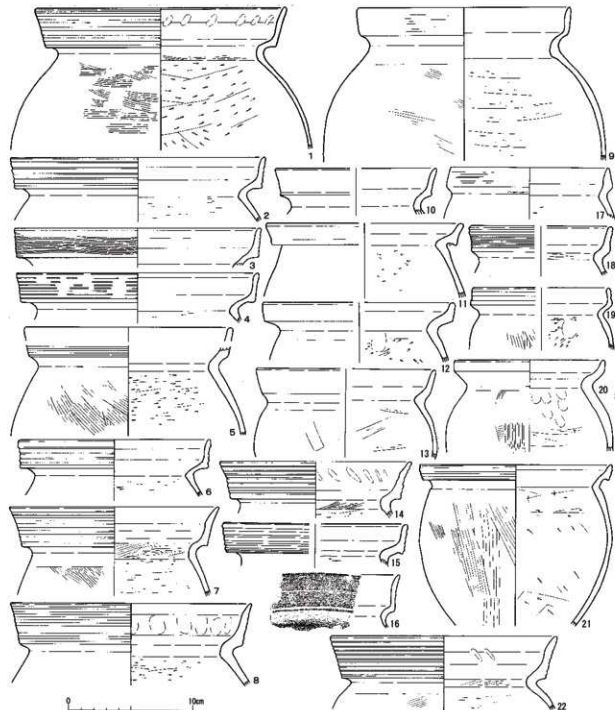
瞭な突出する山陰系(第55図2)である。壺には直立する有段口縁に2本1対の棒状浮文を貼りつけるもの(第55図1)で、貼り付けるのは4方向と考えられる。口縁端部を丸くして膨らませる無頸壺の胴部上半(第55図5)や、突出した平底で丸みのある胴部下半のもの(第55図6)なども壺である。器台には受部が通常より深いもの(第55図4)や、3つある孔がかなり上に位置する脚部(第55図3)がある。Ⅱ区SD6は1点図化した。口縁帯が明瞭に突出する山陰系の甕(第55図7)がある。Ⅱ区SD7からは3点を図化した。甕は口縁帯が無文の有段口縁(第55図8)で、内面の立ち上がりの段が不明瞭である。壺には刺突を加えた凸帯を胴部からの立ち上がりには貼り付ける頸部片(第55図10)がある。大きく開いた口縁部のさらに端部を揃まみ出すもの(第55図9)は小型の鉢と考えられる。Ⅱ区SD8からは49点図化した。有段口縁の甕で擬凹線文があるもの16点(第56図1～8・14～16・18・19・21・22、第55図2)と、無文の有段口縁7点(第56図9～13・17・20)ある。前者には内面に指頭連続瓦痕があるものが4点で、指頭痕が右上がりのもの(第56図1)が本来のものであるが、内3点(第56図8・14・22)は左上がり珍しい。また立ち上がりの下端に1条のみ沈線を巡らせる特異なもの(第56図16)もある。さらに有段口縁として立ち上がりの短い古い様相を示すもの(第56図21)まである。無文のものには口縁帯が長く伸びるもの(第56図9・10・13)と、揃まみ上げて立ち上げる程度のもの(第56図11・12・20)、揃まみ上げて内傾するもの(第56図17)などがある。布留式の甕(第57図1)は口縁端部が僅かに膨らむ程度である。壺には一見すると有段口縁の甕に見えるが、甕のものより頸部の屈曲が強く、胴部が丸いもの(第57図3)である。甕であれば本来薄くなる胴部下半も厚い。中型の壺には、ハケ調整の長胴から口縁部が直立する弥生時代後期に典型的なもの(第57図4)や、直立する口縁がやや開くもの(第57図7・8)があり、円形浮文を貼りつける甕(第57図6)もある。櫛描波状文があるもの(第57図13)は壺の胴部上半と考えられる。擬凹線文のある有段脚台(第57図5)は壺などにつくものであろう。高坏は類例の多い丸みのある坏底部から外反しながら大きく開く口縁部のもの(第57図12)、同じような器形だがやや角張った坏底部から開く口縁部



第55図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器16 (縮尺1/3)

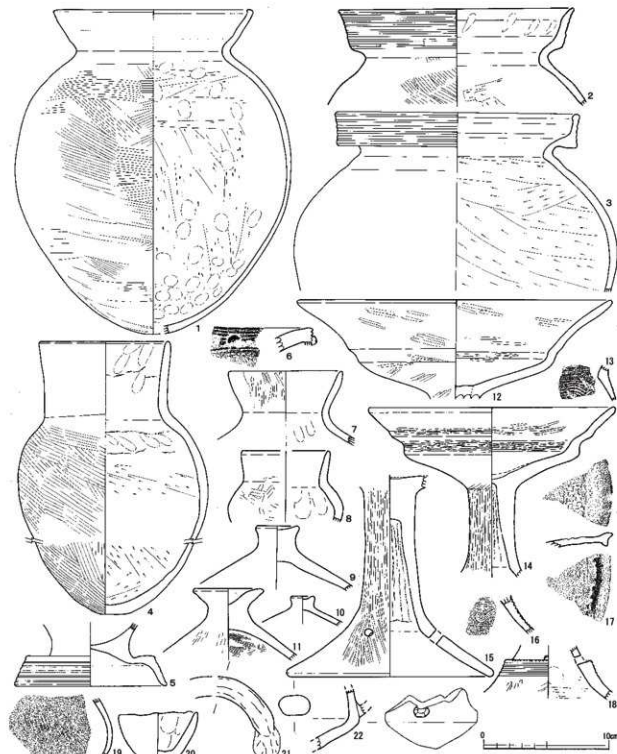


が短いもの(第57図14)、外反しないので直線に開くもの(第58図5)がある。明らかな高坏の脚部は、「ハ」の字に開くもの(第57図15)で、S字のスタンプ文があるもの(第57図16)や、有段脚(第57図18)については高坏か器台のいずれかは不明である。器台は大きくラップ状に開く受部の立ち上がり部分(第58図6)のみで、裝飾器台は立ち上がりも垂下帯も剥がれた痕跡のもの(第57図17)である。鉢は把手が欠損した脚部片(第57図22)、連続したヘラ刻みを施文するもの(第57図19)、大型の有段口縁に付くような半円環形の把手部分(第57図21)、手捏の小型のもの(第57図20)などがある。大きめの脚台(第58図7)には上に壺などが付き、小さな脚台(第58図8・9)はいずれも鉢などに付くものと考えられる。蓋には大きめで



第56図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器17 (縮尺1/3)

幅み部が小さいもの(第57図9)、やや開いて大きくなるもの(第57図11)があり、小さめのもの(第57図10)は幅み部もより小さい。II区SD9からは3点図化した。甕はほぼ直立する有段口縁(第58図2)と、胴上半片で刺突列点があるもの(第58図3)である。有段口縁でも口縁部全体が厚手のもの(第58図1)は蓋である。II区SD11から図化できたのは器台の脚筒部(第58図4)の1点だけである。II区SD14からは5点図化した。甕はほぼ直立する有段口縁で4・5本の擬凹線文があるもの(第58図10)と、無文有段口

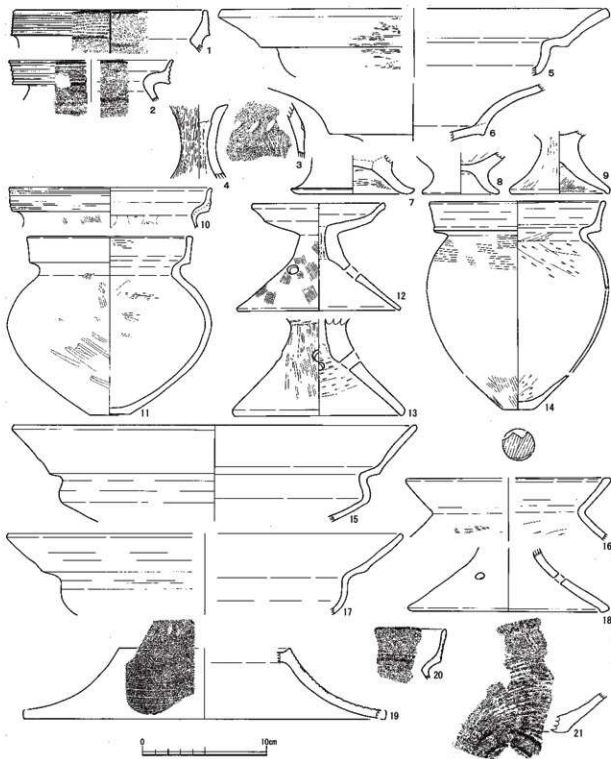


第57図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器17 (縮尺1/3)

縁(第58図14)である。後者は胴部下半を欠くが胎土などから同一の個体と考えられる底部があり、全体の器形が伺える。また頸部直下がヨコハケ調整であるのも珍しい。有段口縁でも胴部や口縁部内面にもミガキ調整のもの(第58図11)は壺であろう。器台は脚部(第58図13)と、小型器台(第58図12)がある。Ⅱ区SD19からは布留式甕1点(第58図16)を図化した。Ⅱ区SD23からは高坏で口縁が直線に開く有段の坏部(第58図15)の1点を図化した。Ⅱ区SD24からは4点図化した。有段の口縁部にS字のスタンプを施文するもの(第58図20)は壺である。高坏は口縁が直線に開く有段の坏部(第58図17)に、脚端部が内面で段をもうけるもの(第58図18)である。S字のスタンプ文のある有段脚部(第58図19)は、高坏か器台かは判断できない。Ⅱ区SD26からは輪高台の底部で胴部にタタキ目を残す甕(第58図21)の1点を図化した。

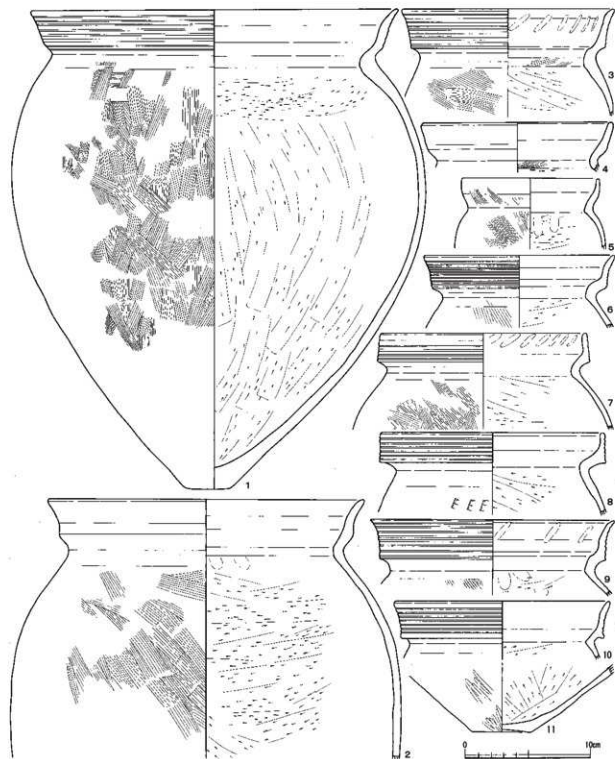
Ⅱ区SR1からは53点図化した。甕の有段口縁は13点あり、擬凹線文がある有文が7点、無文が6点である。前者には口径が25cm、器高も35cmを超える特大のもの(第59図1)があり、一般的な口径より大きくなり胴部最大径がかなり上に位置する。口縁部の擬凹線文は明瞭であるが、口縁は全体に外傾し、調整等は一般的なものとほぼ同じである。17~18cmと一般的な口径であるもの(第59図3・7~10、第60図1~3)は、口縁部の形状はほぼ直立するもの(第59図8)と、やや内傾するもの(第59図7)もあり、前手の肩部には輪刺突列点文があることから、他の有段口縁甕より古手の時期を示す。口縁端部を先細りさせて外反するもの(第59図6)は口径がやや小さい。口縁内面には連続指頭圧痕を残すもの(第59図3・7・9)が半数以上ある。無文の有段口縁にも口径が25cmを超えるもの(第59図2)があり、かなり長胴となる。有段口縁の立ち上がりが不明瞭で丸みをおび、内面の有段も明確ではない。外面の調整のハケも通常みられるものより、太く荒い。やや上底の底部(第59図11)は有段口縁の底部であろう。無文の有段口縁には、外面の立ち上がりが不明瞭で、内面にも明瞭な有段とならないもの(第59図4)や、甕ではなく鉢に分類できそうなもの(第59図5)、口縁の立ち上がりが明瞭ながら丸味のあるもの(第60図1・2)、山陰系のもの(第60図3)など、有段口縁として典型なものは見当たらない。「く」の字甕は13点図化した。個体差が大きい。器形全体が伺えることができるまで復元できたものは、口径が30cm、器高も35cmを超えるもの(第61図1)と、口径が18cm、器高も27cmほどの一般的な大きさのもの(第61図2)で、やや縦長の卵系の胴部にやや上底気味の平底で、口縁端部を丸くする。口縁部がかなり厚手で、その内面をヨコミガキするもの(第61図5)も、胴部下半を欠くが同様の器形と考えられる。口縁端部を平坦にするもの(第60図4~7・11)には胴部にタタキ目があるもの(第60図5・6)、同一個体の下半部片から丸い胴部と考えられるもの(第60図7)などがある。口縁端部が先細りするもの(第60図10)は頸部以下が直線となり、丸い器形とはならない。口縁端部を丸くするもの(第60図9、第61図3・4)は胴部部分が少なく、その形状は不明である。布留式の甕は1点(第60図8)があるが、その口縁の肥厚が盛り上がるように明瞭な部分と、肥厚が伸びて垂れ下がった状況の部分があり、同一個体とは思えないほど違いが大きい。蓋は口縁が単純にひらくものと、有段となるものの2種類である。前者にはほぼ直立する口縁のもの(第62図1)、外傾するがほぼ直線に伸びるもの(第62図2)、外反しながら開くもの(第62図3)である。有段口縁の蓋には、頸部から有段となる口縁帯が立ち上がる北陸在来のもので、二重口縁がある。有段口縁でも口縁帯が長く伸びるもの(第62図6・9)と、短い立ち上がり(第62図5・7・8)の2種類ある。口縁帯内面に連続指頭圧痕を残すもの(第62図6)は、端部になると先細りする。擬凹線文を施文した口縁帯が開くもの(第62図9)は頸部が小さくすまざる。無文で立ち上がりが短いもの(第62図8)は口縁端部を丸くする。短い立ち上がりの口縁帯に円形竹管文を巡らせ、立ち上がりに刺突列点を加えるもの(第62図5)は、胴部上半に2段の描輪直線文の下に円形竹管文を2段巡らし、その間に羽状

に刺突列点を加え、さらに口縁上端にも同様の刺突列点を加える。二重口縁には、立ち上がりにヘラ刺突を巡らせ口径が27cm前後と大型で器壁も厚いもの(第62図4)と、二重口縁でも大きく開かない口縁で、立ち上がりに二個一對の円形浮文を残すもの(第62図10)がある。胴部上半の最大径の部分から突出した平底の壺胴部(第63図14)は、単純なハケ調整もあるが、砂粒の動きや欠落の跡もあり、蓋としてはあまり見られない器面の調整である。高坏は口縁の内面が肥厚するもの(第63図4・5)と、丸みのある坏底



第58図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器19(縮尺1/3)

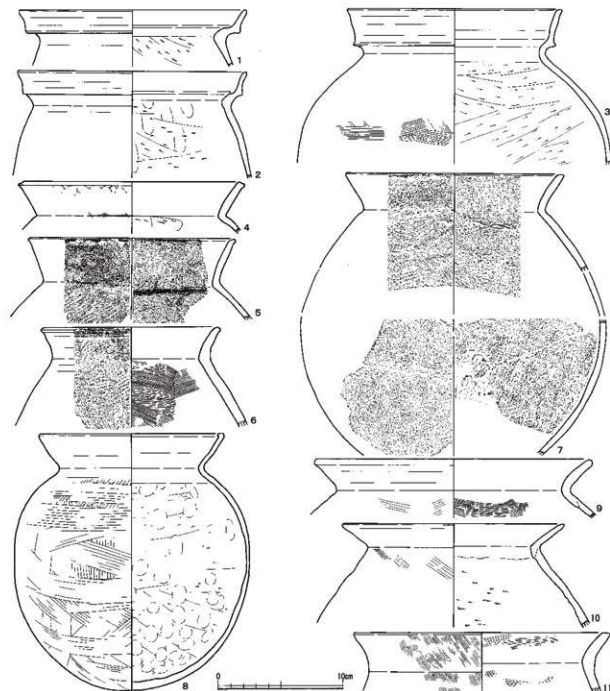
部から口縁が外反して開くもの(第63図8)で、ラップ状に開く口縁のもの(第63図10)は器台である。小型器台にはその受部のみもの(第63図11)と、略兜形に図化できたもの(第63図3)は、受部と脚部との間、脚部上半の器壁が非常に厚い。脚台で明らかに高坏となるものは、「ハ」の字に開くだけのもの(第63図13)と、有段のもの(第63図15)がある。明らかに器台となるもの(第63図7)は有段である。口縁端面に円形浮文を貼り付けるもの(第63図6)も器台であろう。外反して大きく開くもの(第63図12)は、高



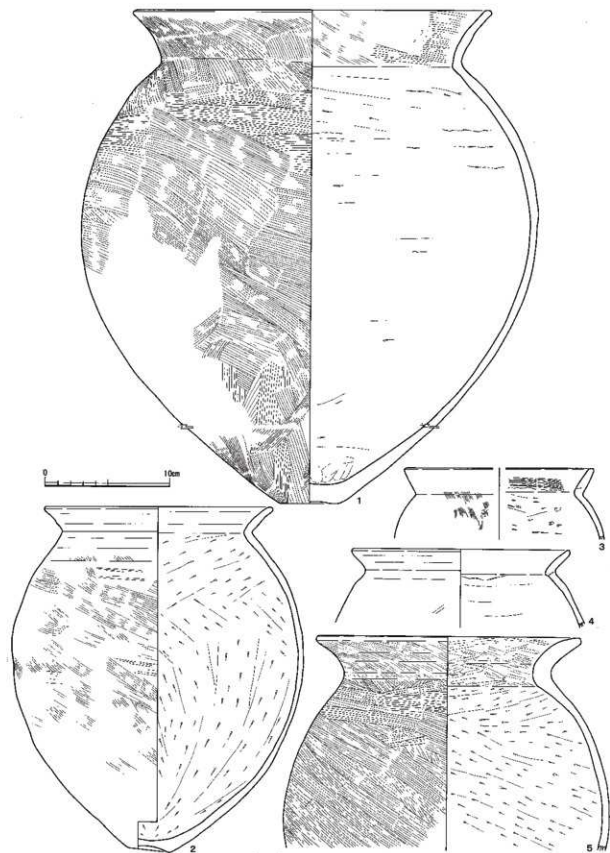
第59図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器20 (縮尺1/3)

坏か器台かは判断できない。裝飾器台(第63図1・2)は、2点とも垂下帯を欠く。蓋は横み部の径が5cm近いもの(第63図9)で、器高が高くなく扁平である。鉢は丸い底から有段の口縁が大きく伸びるもの(第63図16)で、「ハ」の字に開く脚部が付く。

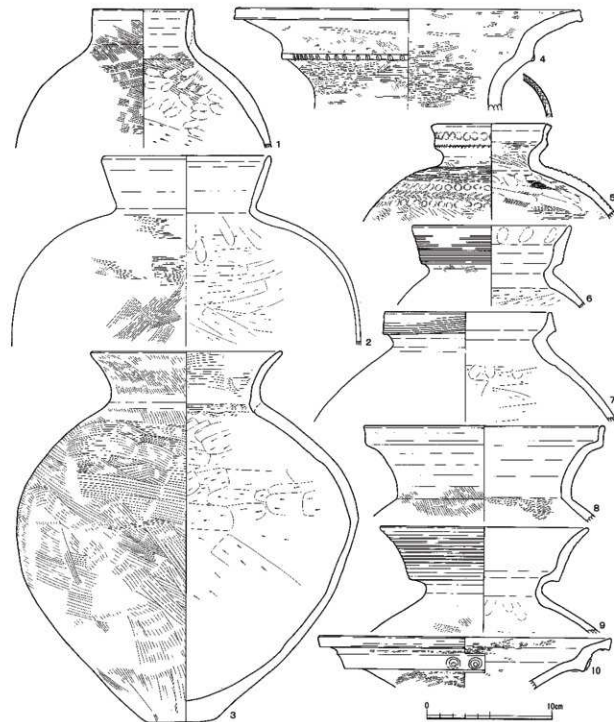
遺構から出土した、紛れ込みであろう弥生時代中期の土器をここでまとめて説明する。II区SD1からは壺の口縁部と、壺でも別個体の頸部の2点を図化した。口縁部(第64図1)は太めの頸部からあまり開かないで外反し、垂直な端面とする。頸部から胴部上半にかけての破片(第64図2)は、7本の櫛推直線文を3・4段重ね、これとは合わせない間隔で7段に扇形文を推定4方向に施文する。最下段は櫛推波状文であろう。II区SD23からは口縁下端に刺突列点を加えるもの(第64図3)を図化した。破片が小さい



第60図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器21 (縮尺1/3)



第61図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器22 (縮尺1/3)

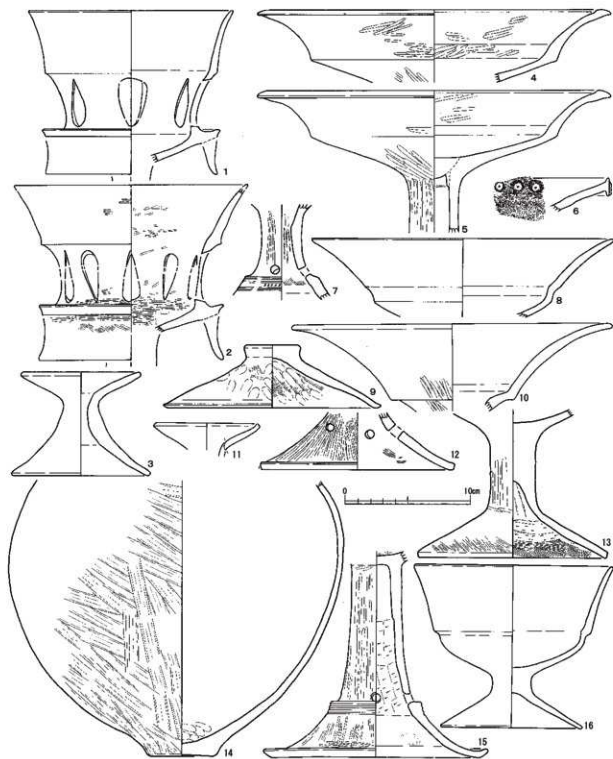


第62図 II区遺構出土弥生土器・古式土師器23 (縮尺1/3)

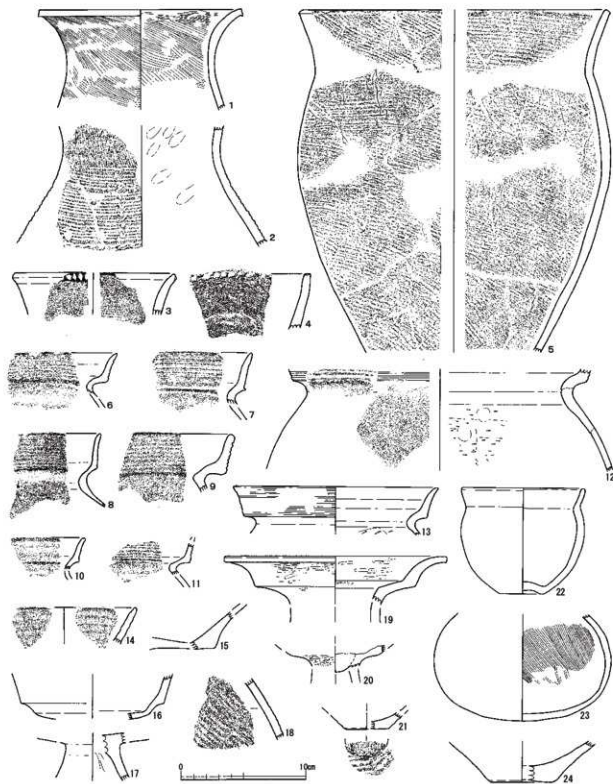
ので口径が予想できなく、甕となる可能性もある。II区SR1からは3つに分かれた破片から、器形を復元した大型の甕と小片の口縁部の2点を図化した。大型の甕(第64図5)は縦長の胴部を持ち、あまり屈曲しない頸部からやや外反となる口縁部で、口縁端部にも胴部にも施文はない。小片の口縁部片(第64図4)は端部上面に押圧、もしくは刻みを加える。外面が弱いケズリで、縄文時代晩期である可能性もある。

II区の柱穴・小穴出土遺物について説明する。II区P21からはタタキ目のある胴部片(第64図18)、II区P22(SB17柱穴2)からは壺底部(第64図24)、II区P32からは端部先細りの擬凹線文甕(第64図8)が出土

している。Ⅱ区P35からは有段口縁の台付鉢(第64図16)が出土している。Ⅱ区P36からは口縁帯の立ち上がりを鋭く突出させる擬凹線文甕(第64図7)が出土している。Ⅱ区P37からは大型の擬凹線文有段口縁甕の頸部から胴部上半(第64図12)、甕の口縁部2点(第64図6・13)を図化したものが、同一個体の可能性もある。小片だが胴部にタキ目のある底部(第64図21)も出土している。鉢(第64図22)は略完形として図化できた。Ⅱ区P38(SB10柱穴5)からは擬凹線文甕口縁の立ち上がり部分(第64図11)が出土している。



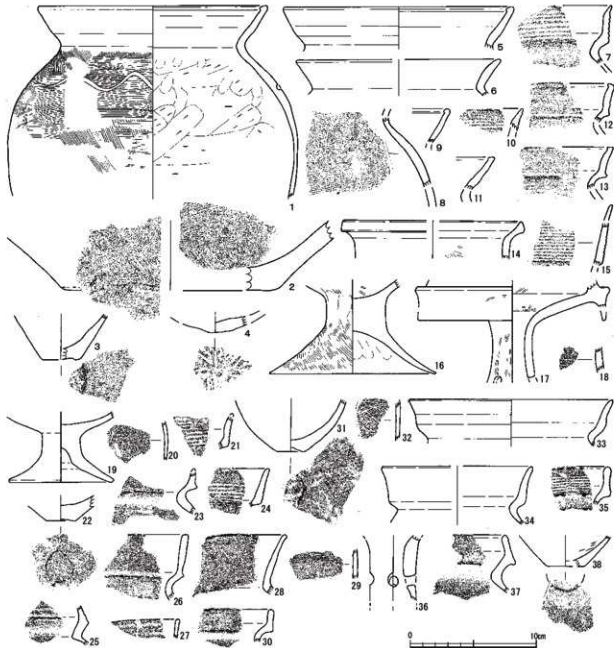
第63図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器24(縮1/3)



第64図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器25(縮1/3)

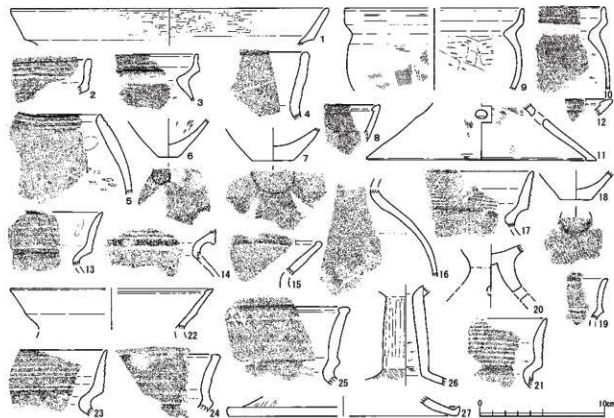
Ⅱ区P45からは壺の二重口縁(第64図19)が出土している。Ⅱ区P43からは壺の胴部(第64図23)が出土した。Ⅱ区P70からは「く」の字甕の口縁(第64図14)が出土している。内外面ともに強いヨコナデの痕跡を残す。Ⅱ区P71(SB3柱穴1)からは開いていた穴に粘土塊を充填した高坏の坏底部(第64図20)が出土している。Ⅱ区P77からは器台受部の立ち上がり部(第64図15)が出土している。Ⅱ区P84からは高坏の坏部と脚部の接合部分(第64図17)が出土している。Ⅱ区P88からは擬凹線文が不鮮明となった有段口縁(第64

9)が出土している。Ⅱ区P90からは無文の有段口縁(第64図10)が出土している。鉢、または小型の壺の口縁と考えられる。Ⅱ区P91から出土したものは甕11点、壺2点、鉢2点、器台2点の合計17点を数えるが、本来Ⅱ区SD8に含むべきものも多いと考える。有段口縁で擬凹線文があるもの2点(第65図7・10)は端部先細りする。口縁下端を突出するもの(第65図12)か、上へ平端面を作る(第65図13)。「く」の字甕には口縁が単純に開くもの(第65図6)と、布留式の甕は肥厚が小さく明確ではないもの(第65図11)、明瞭なもの(第65図1・5・9)がある。後者(第65図1)には、籠描きの波状沈線を巡らす。同様な胴部片(第65図8)もある。これらの底部ではないが、尖底に近い位置までタタキ目を残すもの(第65図4)がある。壺は厚く大きい平底のもの(第65図2)と、小さい平底で立ち上がり急なもの(第65図3)である。鉢は有段の口縁でも立ち上がらないもの(第65図14)と、全面にハケ調整を残す脚台(第65図16)も鉢か小型の壺に付くものであろう。裝飾器台は受部(第65図17)と、口縁部の



第65図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器26 (縮尺1/3)

一部(第65図15)である。前者は赤色に塗彩されたとするよりも、赤味の強い粘土を表面に覆ったと考えられる。後者は擬凹線文のみがある一部であるが、その擬凹線文が甕や壺などとは異なり丁寧な施文なのは裝飾器台によく見ることのできるものである。Ⅱ区P96からは鉢や壺などに付く脚台(第65図19)が出土している。Ⅱ区P123からは有段口縁甕の口縁(第65図21)が出土している。Ⅱ区P124からは擬凹線文のある有段口縁甕(第65図24)が出土している。Ⅱ区P162からは無文の有段口縁甕(第65図33)が出土している。Ⅱ区P125からは非常に薄い甕胴部片(第65図20)と、有段口縁甕の頸部(第65図23)が出土している。Ⅱ区P126(SB 8柱穴1)からは「く」の字甕の口縁(第65図28)が出土している。Ⅱ区P128からは山陰系甕の口縁(第65図26)が出土している。Ⅱ区P132からは非常に薄い甕胴部片(第65図29)が出土している。Ⅱ区P139からは器種は不明だが3条の沈線がある胴部片(第65図18)が出土している。Ⅱ区P140からは上底の底部(第65図31)が出土している。Ⅱ区P145(SB13柱穴3)から出土しているのは、壺などでも小型で裝飾性の高いもの(第65図27)であろう。Ⅱ区P151からは平底の底部(第65図22)が出土している。Ⅱ区P153からも非常に薄い甕胴部片(第65図32)が出土している。Ⅱ区P161からは口縁帯が内傾する有段口縁(第65図25)が出土している。Ⅱ区P162からは、直立する有段口縁擬凹線文甕(第65図35)、無文の有段口縁で端部先細りするもの(第65図34)、同じく無文の有段口縁が内傾するもの(第65図37)に、それら有段口縁甕の底部と考えられるもの(第65図38)、さらに四方向に孔がある脚部上半(第65図36)が出土している。Ⅱ区P164から出土したものは甕5点、壺3点、鉢2点、高坏2点を図化した。甕は有段口縁(第66図3)と、布留式甕口縁部2点(第66図8・12)である。内面を削る小さな底部(第66図6)は前者の有段口縁などのものであろう。壺は有段で擬凹線文のある口縁(第66図2)、頸部から直立する口縁部のもの(第66図4)、無形壺の胴部上半(第66図5)である。やや厚い平底(第66図7)は壺であろう。鉢は有段口



第66図 Ⅱ区遺構出土弥生土器・古式土師器27 (縮尺1/3)

縁で2点(第66図9・10)図化した。同一個体の可能性を残す。高環はヨコミガキの有段口縁のもの(第66図1)と、「ハ」の字に開く脚部(第66図11)である。Ⅱ区P165からは無文の有段口縁鉢(第65図30)が出土した。Ⅱ区P173からは直線に伸びる有段口縁に擬凹線文のあるもの(第66図17)が出土した。Ⅱ区P177からは布留式甕の胴部上半(第66図16)が出土した。Ⅱ区P178からは小さめの平底(第66図18)と、山陰系のもの(第66図19)が出土した。Ⅱ区P185(SB11柱穴3)からは先細りする擬凹線文甕(第66図13)が出土した。Ⅱ区P189(SB15柱穴3)からは布留式甕(第66図15)が出土した。Ⅱ区P191からは有段口縁甕(第66図23)、山陰系甕(第66図24・25)、布留式甕(第66図22)、高環の脚(第66図26)が出土した。Ⅱ区P198(SB12柱穴1)からは脚台(第66図27)が出土した。Ⅱ区P204からは擬凹線文甕の口縁部(第66図21)が出土した。Ⅱ区P204からは端部先細りする擬凹線文甕(第66図21)が出土した。Ⅱ区P205から高環の接合部(第66図20)が出土した。

### 3 Ⅲ区の遺構出土土器

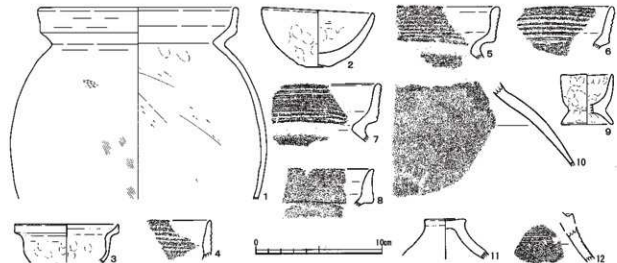
Ⅲ区SK2からは3点図示した。無文の甕(第67図1)は頸部が「く」の字に屈曲し、垂直に立ち上がる口縁である。鉢は底部から内湾して立ち上がり口縁となるもの(第67図2)と、短い無紋の有段口縁のもの(第67図3)である。Ⅲ区P1からはS字スタンプを施した有段脚の一部(第67図12)が出土している。Ⅲ区P3からは口縁端部が先細りした擬凹線文甕(第67図4)が出土している。Ⅲ区P9(SB12柱穴2)からは両端が張り出さない蓋の摘み部(第67図11)が出土している。Ⅲ区P13からはほぼ直立する擬凹線文甕(第67図5)が出土している。Ⅲ区P19からは擬凹線文が摩滅した有段口縁(第67図8)が出土しているが、蓋か鉢の口縁と考えられる。Ⅲ区P21からはほぼ直立する有段口縁の擬凹線文甕口縁(第67図7)が出土している。Ⅲ区P22からは壺胴部上半(第67図10)と手捏ねの小型台付鉢(第67図9)が出土している。Ⅲ区P23からはやや外傾する直立の擬凹線文甕口縁(第67図6)が出土している。

### 4 包含層出土土器

包含層出土土器はⅠ～Ⅲ区ごとではなく、北からグリッドごとに記述する。

A' 2では口径30cm以上の壺口縁(第68図1)を図化した。

A' 3からは11点を図化した。甕には擬凹線が施され、口径も15～16cm前後でこのタイプの中心となる大きさのものがある(第68図3～5)。また、口縁端部にやや丸味のある平坦面をつくる布留式(第68図12)がある。丸い胴部から直ぐに屈曲して有段口縁が立ち上がるもの(第68図6)は壺で、無文の口

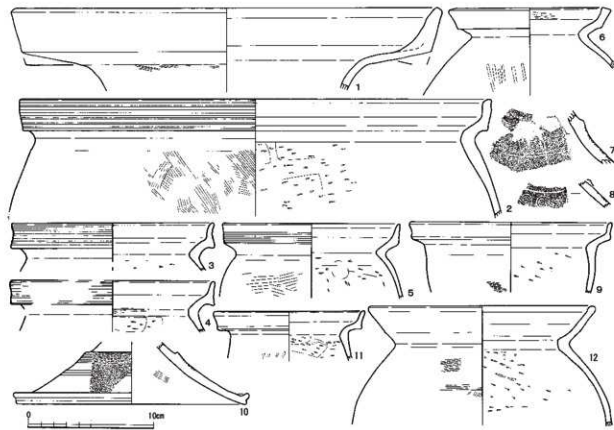


第67図 Ⅲ区遺構出土弥生土器・古式土器(縮尺1/3)

縁部の端部を押さえて平坦面とする。胴部最大径が口径より小さい鉢(第68図9・11)は、無文の有段口縁である。高環・器台の脚はS字のスタンプ文を巡らせるもの3点(第68図7・8・10)を図化した。剥がれた凸部の貼付けの工具痕の下に1段(第68図8)、または2段のS字スタンプ文(第68図7)は、長軸が2.0cmと大きめである。幅広の脚端部に沈線を加えて、上方を突出させたもの(第68図10)は、スタンプ文の長軸が1.4cmと先の2点よりかなり小さい。口径が35cmを超える有段口縁(第68図2)は有段の立ち上がりが短くて直立に近く頸部の屈曲も大きくない。大型の鉢であろう。

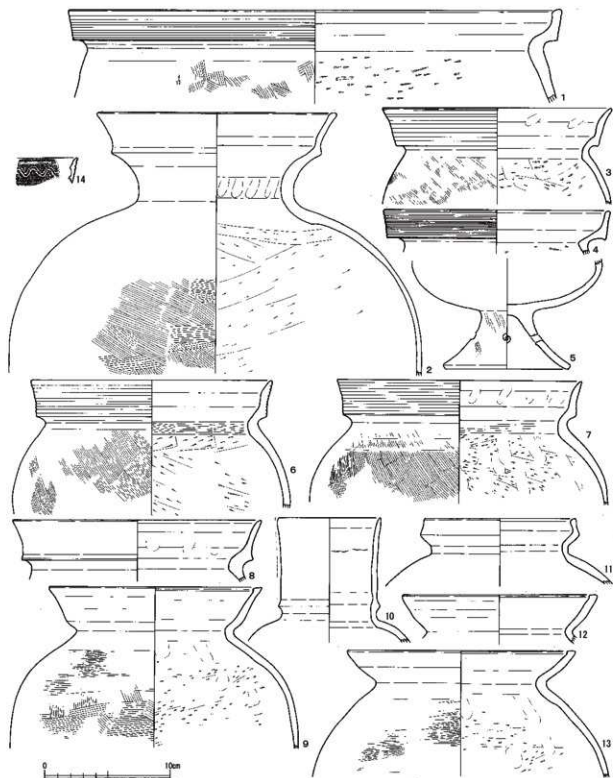
A' 4からは19点を図化した。有段口縁の甕はほぼ直立する大型のもの(第69図1)と、直立する口縁の口径が18cm前後のもの(第69図4)以外は、先端が先細りし小さく外反するもの3点(第69図3・6・7)で擬凹線が施文される。無文の有段口縁(第69図8)は山陰系ではなく北陸の有段口縁であろう。布留式の甕3点(第69図9・12・13)は、肥厚がほぼ水平な平坦面となる。壺は北陸在来のもの(第69図10)と、山陰系のもの(第69図11)である。大型の壺は無文の有段口縁のもの(第69図2)である。丸い胴部になると考えるもの(第69図5)は、「ハ」の字に開く脚部が付く。高環は2点ある(第70図1・2)。櫛歯の波状文がある破片(第69図14)は薄手で、小さめの器台受部の口縁帯が剥離したものと考えられる。鉢は擬凹線文の有段口縁(第70図3)と、大きく開く塚状の坏部に脚台が付くもの(第70図4)である。後者は坏部上半と脚部は接合しなかったが、胎土・色調が同じである。焼成前の孔がある底部(第70図5)は有孔鉢であろう。

A2からは9点を図化した。甕は擬凹線文のある有段口縁2点(第70図12・13)で、内面に指頭圧痕はない。高環の脚部には長い棒状の有段の裾部となるもの(第70図11)で、摩滅していて不鮮明であるが、有段部の2帯の沈線間にS字のスタンプ文を巡らせる。この文様が鮮明に残る破片(第70図7)も同様な



第68図 包含層出土弥生土器・古式土器1(縮尺1/3)

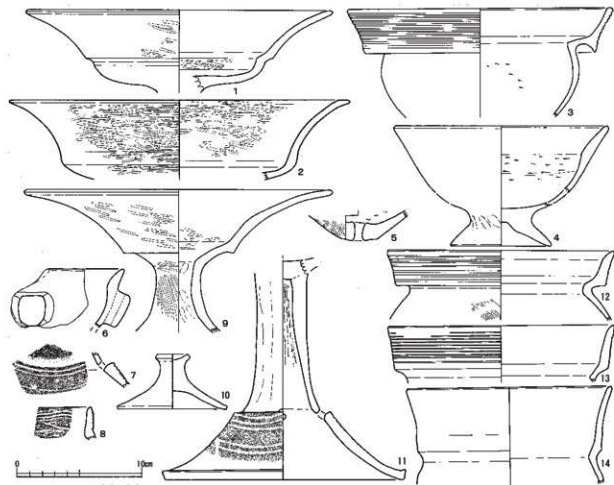
ものであろう。器台(第70図9)は脚部下半を欠く。鉢には立ち上がった口縁近くの側面にU状の把手を貼り付けるもの(第70図6)と、無文の有段口縁が伸びたもの(第70図14)がある。蓋で掴み部がやや長いもの(第70図10)は壺に伴うと考えられる。小さな立ち上げりに太いヨコハケのような調整がある口縁部(第70図8)は、壺の可能性はある。



第69図 包含層出土弥生土器・古式土師器2 (縮尺1/3)

A3からは9点を図化した。甕は口縁端面に1条の沈線のある「く」の字口縁(第71図1)と、布留式の甕(第71図2)がある。器壁に厚みのある無文の有段口縁(第71図3)は壺であろう。大きく開く二重口縁(第71図7)は加飾が見られない。高坏・器台の脚部にはS字のスタンプ文を巡らせるもの(第71図4)と、三重の円形竹管を並べるもの(第71図5)がある。器台(第71図6)は小型器台である。鉢(第71図8)は無文の有段口縁である。擬凹線文のある厚手の有段(第71図9)は、脚台であろう。

A4からは21点を図化した。甕には口径が30cmを超える有段口縁(第71図13)と、立ち上がった有段口縁がやや内傾するもの(第71図10・11)がある。短い立ち上げりの口縁部(第71図12)にはヘラ刺突列点文が巡り、近江系の受口状口縁に類するものである。高坏は口縁端部内面を肥厚させるものが多いが、明瞭な段を設けるもの(第72図3・4・5)と、段を設けなくて平坦面だけとするもの(第72図8)がある。丸みのある坏部から小さな段で屈曲し口縁が開くもの(第72図2)の口縁部端部は肥厚しない。数条の沈線文の間にS字のスタンプ文を巡らせるもの(第72図1)は、高坏か器台の坏部と判断した。この他に境部の坏部の高坏(第72図14)もあり、脚部が大きく開く東海系であろう。有段脚でも沈線だけの小型もの(第72図13)がある。有段脚の破片には沈線の下にS字のスタンプ文を巡らせるもの(第72図6)と、3条の沈線の下に羽状に刺突を加え、さらに数条の沈線の下に円形竹管文らしきものを巡らせるもの(第72図7)もあるが、いずれも摩滅が著しく明確ではない。高坏の脚部には「ハ」の字に開くだけのもの(第72図15)がある。裝飾器台は垂下帯部分の2点(第72図11・12)である。小さな脚台(第72図17)は、小型器台の受部とも考えたが、坏部となる内面が黒色で赤く発色していないため脚台とした。鉢は平底のもの(第72図16)がある。蓋には略完形のもの(第72図9)と、口縁端部を僅かに欠くもの(第72図10)がある。



第70図 包含層出土弥生土器・古式土師器3 (縮尺1/3)

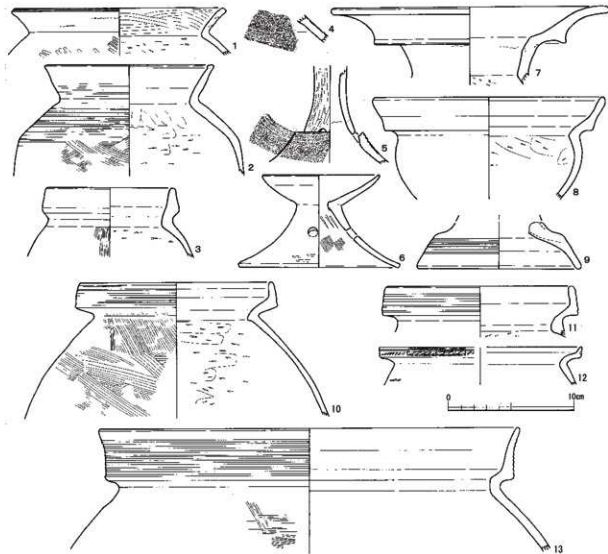


A5からは4点図化した。壺には口縁に端面があるもの(第72図21)がある。口縁帯下端が凸帯状になるもの(第72図20)は、二重口縁の壺であろう。破片ではあるが、7本の櫛描直線文を三段重ね、その間に櫛刺突の山形波状文と櫛刺突の斜行列点文、最下段に櫛刺突の山形波状文を施文する胴部上半(第72図19)があり、後者は北陸在来の装飾にはない非常に細かい施文である。高坏・器台の脚部には2本の沈線の上下にヘラ刺突列点を加えるもの(第72図18)がある。

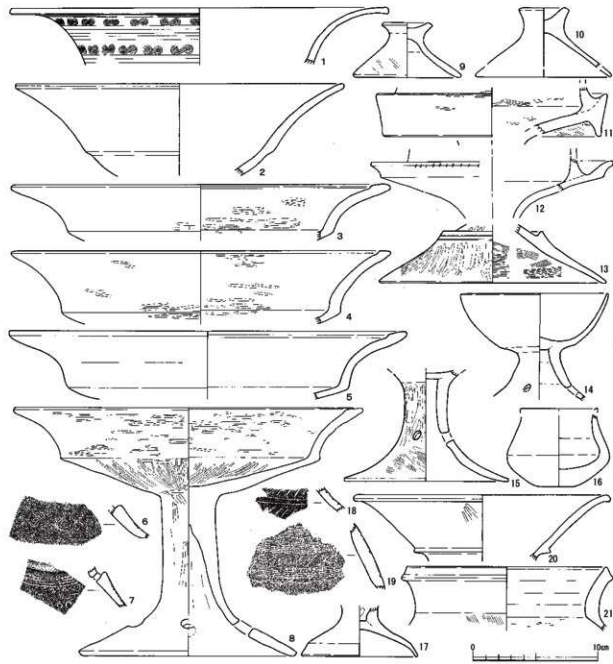
A6からは4点図化した。甕は有段口縁で20cm弱の一般的な口径であるが、若干大きくて器壁がやや厚手のもの(第73図1)と、やや小さく器壁が薄手のもの(第73図2)がある。高坏は平底部が丸くなり、有段に屈曲した口縁が開く(第73図4)。小さな脚台(第73図9)は壺か鉢であろう。

A7からは6点図化した。甕は有段口縁(第73図10)である。壺(第73図8)は口縁部を小さく摘まみ出して、2本の擬凹線を加える。凸帯に刺突列点を加えるもの(第73図6)は壺の口縁部である。S字スタンプ文があるものには、有段の壺か鉢の口縁部に2本の沈線の間にあるもの(第73図5)と、やや大型の壺胴部上半と考えられる破片(第73図3)、小型の壺胴部(第73図7)がある。S字のスタンプが最も小さいもの(第73図7)はスタンプ文の上下に数条の沈線が残り、下の沈線間に刺突列点がある。

A8からは沈線が巡る脚端部と想定した破片(第73図22)の1点だけ図化できた。



第71図 包含層出土弥生土器・古式土師器4 (縮尺1/3)



第72図 包含層出土弥生土器・古式土師器5 (縮尺1/3)

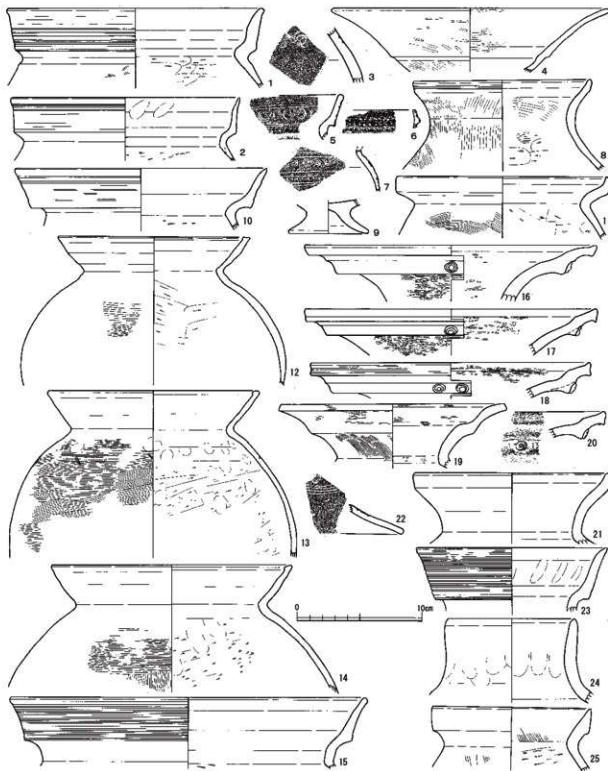
20) 図化した。大きく開く頸部から内面はやや弱いものの外面の有段は明瞭で、口縁端部に幅広い平坦面をなす。有段部の立ち上がりには円形浮文を貼り付ける。4点図化したもののうち、1点(第73図16)は他の3点とは明らかに焼成が悪いのか胎土が異なり、調整も不明瞭で、器壁もやや厚手である。3点は円形浮文が二個一対で残るもの(第73図18)と、円形浮文が1個しか残っていないもの(第73図16・17・20)である。高坏は坏部(第74図3)と、脚部(第74図11)である。小型器台(第74図2)は、坏口縁部を立ち上げる。高坏・器台の脚部には有段となるものがあるが、沈線下のS字のスタンプの長さが1.4cmと小さめのもの(第74図9)と、溝文がやや大きく長さが2.0cmとなるもの(第74図10)があり、前者には微かに赤彩の痕跡が見える。蓋には揃み部(第74図6)がある。鉢は擬凹線文のある有段口縁(第74図1)で、胴部の最大径が口径よりやや小さい。上底の底部(第74図8)と、厚い器壁の底部で全体に指押さえのままのもの(第74図7)も、小型の鉢または甕となるものであろう。鉢や甕の脚台には、接合部から直ぐに「ハ」の字に開き端部ユビナデして丸くするもの(第74図5)と、低い脚台で大きく開き端部に面があるもの(第74図4)があり、前者は小型の甕や鉢に、後者は中型の甕に付くと考える。

B3からは24点を図化した。擬凹線文のある有段口縁で口径が30cmに近い大型の甕(第74図12)は口縁内面に連続指頭圧痕があり、口縁端部を揃み出す。立ち上がりが短く、口縁部を面取りしながら外側へ揃み出す甕(第75図2)は、近江系の受口状口縁の影響と考える。布留式の甕は口径が18cm前後のものが多い4個体(第74図13・15・17・18)ある。口径が15cmほどのやや小型なもの(第74図19)は口縁内面の肥厚は明瞭だが、胴部上半はナデ仕上げである。口縁内面の肥厚が明確ではないが、胴部上半に波状の沈線を巡らすもの(第74図14)や、口縁全体が内湾して立ち上がるもの(第74図16、第75図3)は布留式の甕とはほぼ同時期か、やや古くなるであろう。後者にはあまり明瞭でないものの、胴部上半にヨコハケがある。「く」の字甕で、口径が23cmを超えるやや大型のもの(第75図1)は、口縁が長く伸びて、大きく広がる。有段口縁の甕(第75図5)は縦長の胴部にやや小さめの平底で、大きく伸びた口縁帯がヨコナデで無文である。直線に立ち上がる有段口縁(第75図7)は、胴部上半にヨコハケののち縦に間隔を空けた沈線が3条確認できるが、全周するか不明である。口縁帯を貼り付けるもの(第75図6)は、上端部は横に揃み出し、下端は下に伸びる。口縁が大きく開くもの(第75図9)はその立ち上がりが突出させる二重口縁である。頸部から単純に開くだけの壺(第75図8)は、口縁を面取りしながら端部を外側に揃み出す。丸い胴部をハケ調整ののち丁寧にミガキ調整するもの(第75図4)は、短い立ち上がりの直口になると考えられる。高坏の坏部は2点(第75図11・15)ある。脚部となるもの(第75図16)は、高坏の脚部であろうが孔がない。蓋は揃み部の上を横に揃み出すもの(第75図12)と、直立に揃みみ上げて丸くするもの(第75図10)の2点あり、甕に伴うと考えられる。有孔鉢は、器壁が薄いもの(第75図14)とやや厚手のもの(第75図13)があるが、北陸在来の有孔鉢の底部としては薄い。

B4からは14点を図化した。有段口縁の甕は1点だけ(第76図8)で、直立する口縁に擬凹線文はなく、頸部の屈曲も「く」の字である。布留式甕は口縁端部内面の肥厚がほぼ水平な平坦面で明確なもの(第76図1～3・6・7)と、口縁の立ち上がりがやや直立気味で肥厚のやや小さいもの(第76図4)がある。二重口縁の壺(第76図5)は頸部が丸く外反し、口縁帯への立ち上がりを強く屈曲させ、口縁端部は外反して面を作る。高坏は有段に屈曲する坏部となるもの(第76図10)が、略完形に図化できた。坏部の屈曲は弱いが、屈曲の有段部から口縁が大きく開く。小さな孔が4つ確認できる、「ハ」の字に開く無段の脚である。器台には竹管を加えた口縁帯の幅と同じ大きさの円形浮文を貼り付けるもの(第76図11)がある。有段部は確認できなかったが、沈線の間に刺突列点とS字のスタンプを巡らせるもの(第76図14)は

高坏・器台の脚部であろう。鉢には直立する短い口縁部のもの(第76図13)があり、坏部の底部中央近くまで残る脚が付くものではなく、このタイプの坏としては大きな口径である。小型の丸底の鉢(第76図9)は、僅かに揃みみ出しただけの口縁部である。この他に有孔鉢の底部(第76図12)がある。

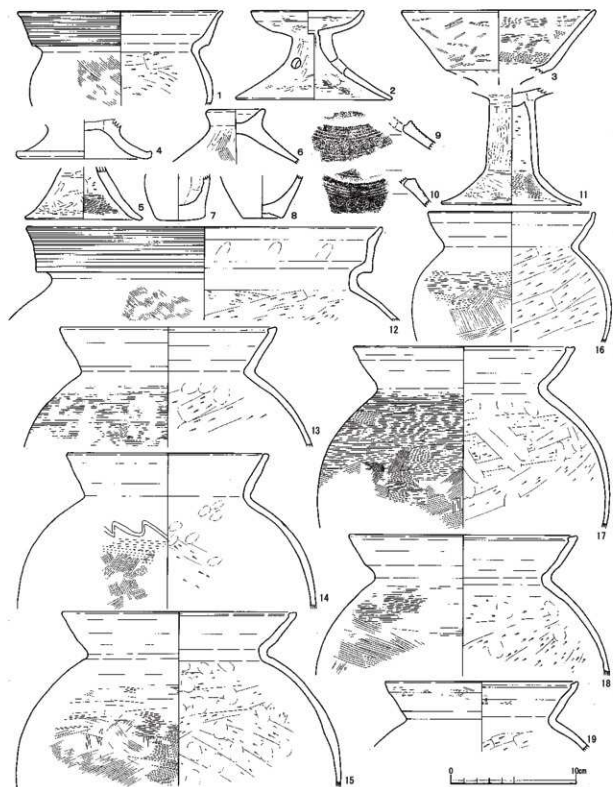
B5からは6点図化した。甕は有段口縁(第77図2)と、大型の山陰系(第77図1)がある。波状文のあ



第73図 包含層出土弥生土器・古式土師器6 (縮尺1/3)

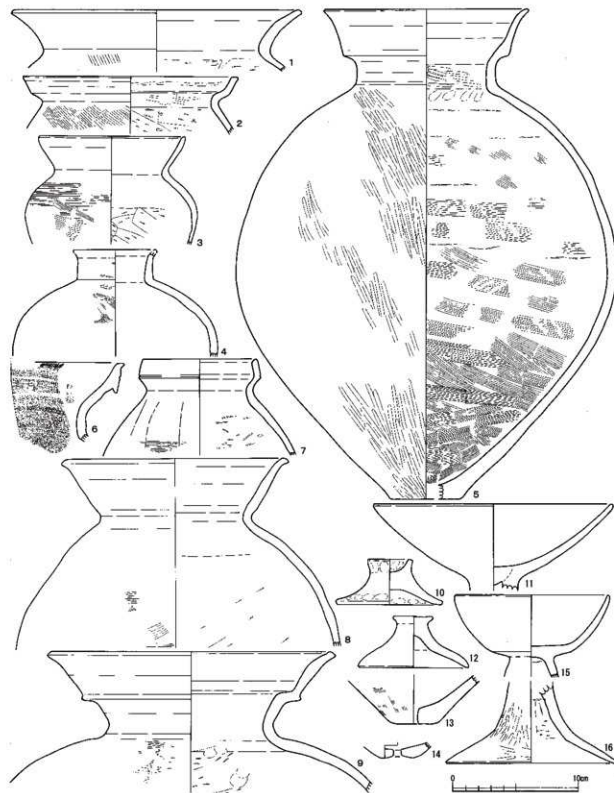
る破片(第77図3)は布留甕の胴部上半である。脚部(第77図18)は、本来は高杯の器形と考えるが、ここでは坏部と脚部との接合部に径1.4cm程の孔を貫通させており、器台に分類した。沈線の間にS字のスタンプを巡らすもの(第77図16)は有段脚に典型である。蓋(第77図4)は縮み部が小さく外反する。

B6からは19点図化した。甕は擬回線の施文が丁寧なもの(第77図8)と、やや雑なもの(第77図7・



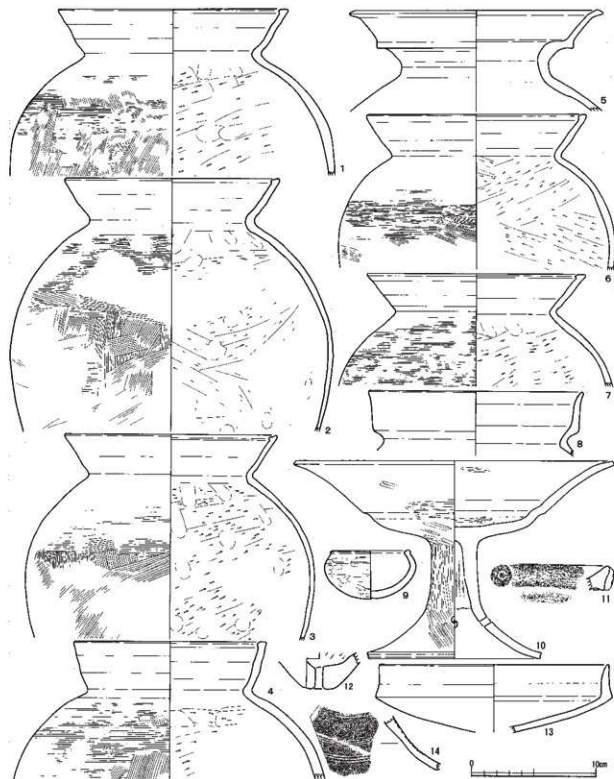
第74図 包含層出土弥生土器・古式土師器7 (縮尺1/3)

12)がある。有段口縁で無文の甕は薄い器壁のもの(第77図9)と、頸部が「く」の字に屈曲し、立ち上がった口縁帯の内側に段を設けないもの(第77図13)である。口縁端部が肥厚する布留式のもの(第77図11)と、口縁帯の立ち上がりが突出する大型の山陰系のもの(第77図6)がある。後者の胴部の最大径はあまり大きくならないので、縦長の胴部であろう。胴部片でヨコハゲの上に波状の沈線を巡らすもの(第



第75図 包含層出土弥生土器・古式土師器8 (縮尺1/3)

77図5)と、二個一對の刺突があるもの(第77図17)は布留甕によくあるものである。口縁帯の立ち上りが突出させ擬凹線を施文するもの(第77図10)、擬凹線を施文する有段口縁でも口径が小さいもの(第77図15・19)は壺である。外反して開く口縁端部を小さく上下に拡張するもの(第77図14)は広口壺である。沈線と刺突を有段部の下に巡らせるもの(第78図6)や、脚端部近くに巡らせるもの(第78図5)は高坏か



第76図 包含層出土弥生土器・古式土師器9 (縮尺1/3)

器台のいずれかの脚である。無文の有段口縁鉢(第78図1)は、口縁の内面は有段とはならない。胴部最大径が口縁より小さいもの(第77図20)も鉢である。幅広い有段部から立ち上がる脚台(第78図2)は、壺か鉢に付くと考えられる。蓋は2点(第78図3・4)である。

B7からは9点図化した。有段口縁甕(第78図11)は、擬凹線文の条線も明確で施文も丁寧であり、口縁内面に連続指頭圧痕、頸部にもヨコハケを行う典型的なものであるが、立ち上がり部分の器壁が厚く、内面の有段が不明瞭である。布留甕は口縁端部肥厚が明瞭なもの(第78図14)である。壺は二重口縁のもの(第78図8)と、有段口縁(第78図15)がある。二個一對の円形浮文を貼り付けるもの(第78図7)も、二重口縁の壺である。沈線の間に刺突列点を加えるもの(第78図10)は壺、弱い有段で口縁の端部に刺突を巡らせるもの(第78図9)は鉢であろう。蓋は横み部上端を小さく横まみ上げるだけのもの(第78図13)、横み部の端部を欠くがやや開くと思われるもの(第78図12)がある。

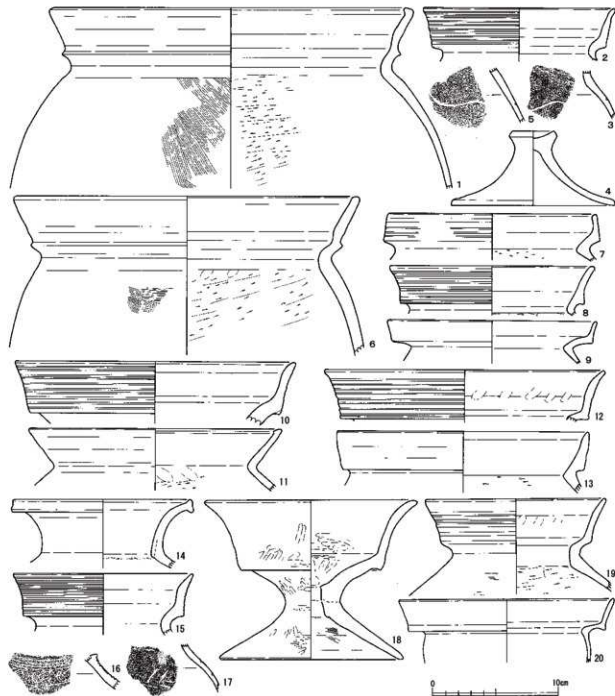
B8からは17点図化した。有段口縁甕はいずれも擬凹線文があるもの(第78図22・23)と、無文のもの(第78図25)である。口縁が有段でも立ち上りが弱く突出する大型の甕(第78図24)は山陰系である。有段口縁でも口縁帯の下が突出するもの(第78図25)は、口縁端部上面を強く押さえて平坦面があり山陰系の影響と考える。壺は有段口縁と二重口縁がある。有段口縁(第78図17)は大型で口縁の立ち上りがやや突出する。二重口縁(第78図18・20)はいずれも開く口縁帯の立ち上りが突出する。微かに擬凹線文が残る有段口縁(第78図21)は、口縁部の立ち上りの手前に円孔があり壺であろう。胴部の最大径に二条の凸帯を巡らし、その間に「く」の字の刺突列点文、その上に円形スタンプ文、さらに三条の沈線を挟んで「く」の字の刺突列点文と沈線を巡らせるもの(第78図26)は、山陰に類例の多い装飾壺であるが、器壁の残りが悪い。破片には凸帯の割がれた痕跡の下に円形刺突列点文を加えるもの(第78図19)と、山形の波状文の下にへら刺突を密に加えるもの(第78図16)がある。鉢は擬凹線文のある有段口縁(第79図1)であるが、通常のものに比して口縁などの器壁が異様に厚い。脚台にはやや大型のもの(第79図5)と、小型のもの(第79図6)がある。S字のスタンプが施文されるもの(第79図2)は高坏や器台の脚部である。器台は坏底部が貫通する小型器台(第79図3)と、突帯の貼付けが欠くが、坏部側面に孔がある、いわゆる結合器台と呼ばれるもの(第79図4)である。

B9では8点図化した。甕は口縁帯を強くヨコナデする無文の有段口縁(第79図7)と、口縁部が内湾しながら開くが端部が肥厚しない布留式の影響のもの(第79図8)である。壺は無文の有段口縁(第79図12)である。壺の破片には沈線で区画された間に幅広い凸櫛工を用いて大きな波状を巡らせるもの(第79図24)がある。高坏には口径が小さな東海系のもの(第79図11)がある。鉢には無文の短い有段口縁(第79図13)と、小さな上げ底から内湾して立ち上がる胴部がそのまま口縁となるもの(第79図9)である。僅かに上底状の扁平な高台がつくもの(第79図10)も鉢の底部であろう。

B10では16点図化した。甕はいずれも擬凹線文のある有段口縁であるが、内面に連続指頭圧痕を残すもの(第79図15)と、それを残さないもの(第79図16・17)がある。有段口縁でも立ち上りが突出させるものには突出がやや不明瞭で内面を肥厚させないもの(第79図14)と、肥厚するもの(第79図18)がある。前者は北陸在来のもの、後者は山陰系で口径が大きい。布留甕は1点ある(第79図20)。甕の破片には笠沈線がある口縁部片(第79図19)や、笠刺突列点文のある胴部上半の破片(第79図27)などがある。壺には口縁を強いヨコナデで外反して、ヨコまたはナメのミガキ調整の二重口縁(第79図22)があり、口縁端部が垂直の平坦面となる。大振りの櫛描波状文の破片(第79図23)は壺の胴部上半である。焼成前の穿孔がある底部(第79図28)は壺と思われる。高坏には東海系に類する器形の坏部(第79図25)があるが、焼成

等が非常に悪い。鉢には頸部が僅かに屈曲する直立の口縁部(第79図29)や、指押さえの整形で、小さく外反する口縁部に欠く小型の手握ねのもの(第79図26)、指押さえの輪高台の底部(第79図30)などがある。脚部の形状が蓋と考えるもの(第79図21)もある。

B11からは7点図化した。甕は「く」の字の口縁が内湾するもの(第80図2)と、口縁帯の立ち上がり突出し口縁端部は内面に肥厚する山陰系(第80図1)である。壺は有段の口縁帯をハケ調整ののち、その下半を中心にヨコナデするもの(第80図3)、伸びる頸部から無文の短い有段口縁となるもの(第80図6)、さらに大型の有段口縁で、口縁端部外面に連続した刺突を加えるもの(第80図4)などがある。また隆刺突を小さな波状のように巡らせるもの(第80図7)も壺の胴部上半であろう。高坏や器台などの脚

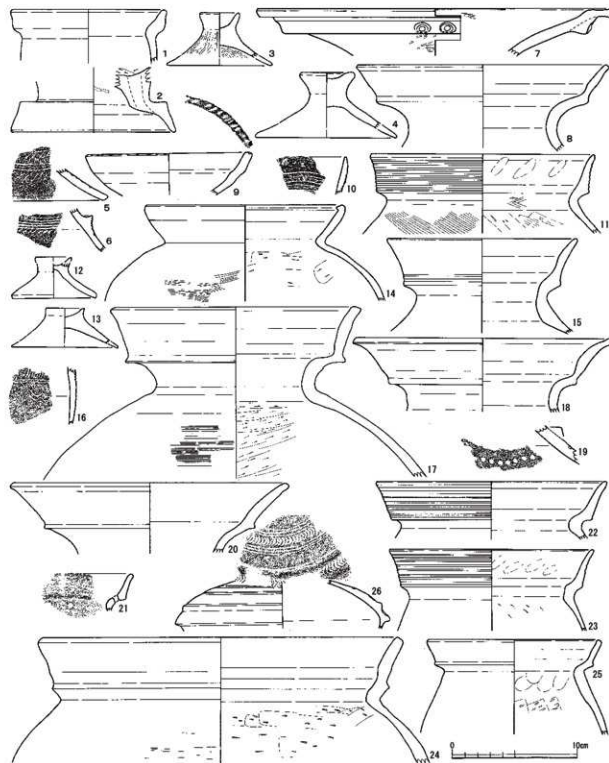


第77図 包含層出土弥生土器・古式土師器10 (縮尺1/3)

部(第80図5)は、有段の下の刺突列点文の間に4条の沈線を巡らせる。

B12では弥生時代中期の土器が2点(第80図8・9)ある。後者の胴部上半から頸部には、櫛原体を横にした沈線のようなものを数本重ねて一連の文様帯とし、その上に接して複数重ねた櫛描直線文を、扇形文を縦に並べて区画するものである。

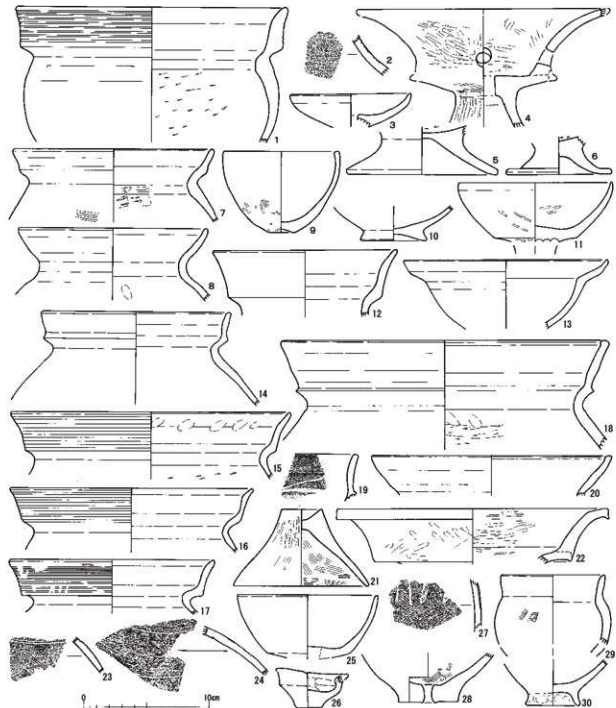
C2では弥生時代中期の壺(第80図23)がある。



第78図 包含層出土弥生土器・古式土師器11 (縮尺1/3)

C3からは9点図化した。布留式の甕は斜めに肥厚するもの(第80図14・16)と、口縁上端面がほぼ水平なもの(第80図19)がある。蓋は胴部上半の破片で、3条の沈線の下に篋刺突列点文を巡らせるもの(第80図13)、櫛描直線文の下に円形竹管文を巡らせるもの(第80図15)である。裝飾器台は垂下帯を欠く受部(第80図22)があるが、立ち上がりと垂下帯の間が異常に狭い。鉢は無文の有段口縁が大きく開き、小さな底部で脚台が付かないもの(第80図21)と、口縁部が僅かに外反し不安定な平底のもの(第80図17)である。また穿孔のある典型的な有孔鉢(第80図18)の厚い底部もある。

C4からは4点図化した。甕は擬凹線文のある有段口縁(第80図10)と、無文の有段口縁が2点(第80図



第79図 包含層出土弥生土器・古式土師器12 (縮尺1/3)

11・12)ある。高坏や器台の脚部の形状のもの(第80図20)は上端が平端面となっており蓋である。

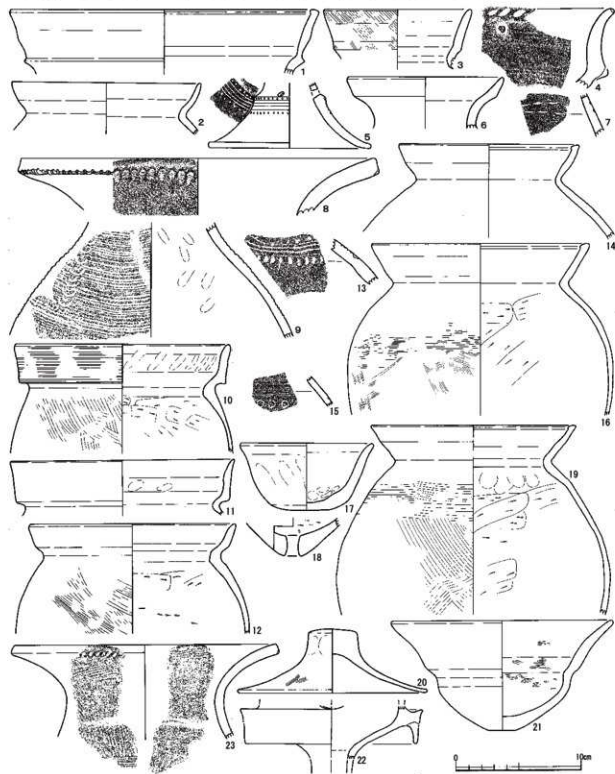
C5からは10点を図化した。甕は有段の口縁帯の立ち上がりが突出する山陰系で、口縁端部を横まみ出すもの(第81図1・2)と出さないもの(第81図3)があり、前者は口縁帯のみ復元できたもの(第81図2)と、胴部上半まで復元できたもの(第81図1)と分けて図化した。接合はしないもの同一個体の可能性が残る。布留甕の口縁も2点あり内面の肥厚も僅かで類似するが、口径が20cmを越えるもの(第81図4)と、それより明らかに小さな16cm前後のもの(第81図6)である。蓋はややための頸部から外反する口縁部が開くもの(第81図5)で、二重口縁端部の開きが小さい。小型器台は開く受部が面取りせず先細りの端部で終わるもの(第81図7)である。鉢(第81図9)は頸部が小さく屈曲する。内外面ともにヨコミガキが明瞭に残る。この他に小さな脚台2点(第81図8・17)は、いずれも小型の壺や鉢などに付くと考えられる。

C6からは7点図化した。甕には擬凹線文のある有段口縁(第81図10)と、無文のもの(第81図11)がある。山陰系のもは、口径が19cm前後のもの(第81図13・15)と、14cm前後のもの(第81図12)と口径が異なり、いずれも口縁端部が内面に肥厚しない。高坏(第81図14)は東海系であろう。器高は低いが大形の脚台(第81図16)は、蓋に付くと考える。

C7からは21点図化した。有段口縁の甕は擬凹線文が明瞭で口縁帯が直立し端部に丸みのあるもの(第82図1)、外反して先細りするもの(第82図2)である。口縁帯の立ち上がりが突出する山陰系は、突出は明瞭で口縁端部を押さえて面を作るもの(第82図4)と、丸くするもの(第82図3)がある。布留甕(第82図9)は端部に平坦面を作る。有段口縁の壺は擬凹線文のあるもの(第83図1)と、無文のもの(第82図15)である。二重口縁の壺は大きく開く頸部から、さらに開く口縁帯の立ち上がりに連続して笠で刻みを加えるもの(第82図5)と、施文などが無いもの(第82図8)があり、前者の頸部の屈曲部分には凸帯の剥がれた痕跡が残る。3段に間隔を空ける櫛描直線文に刺突を加える破片(第82図6)は、東海系の高坏などに多い文様であるが、内面に絞り目や指押さえる痕跡があることから、蓋の胴部上半と考えられる。また櫛描の波状文の破片も壺の胴部片(第82図7)と考えられる。器台は有段部から大きく開く受部(第82図17)と、裝飾器台の垂下帯とその内側から立ち上がる部分(第82図10)である。脚端部を欠く小型器台(第82図14)があり、受部の口縁が丸みのある立ち上がりである。有段の下に沈線を5条だけ施文するもの(第82図20)は、やや小さな底径で器台の可能性が高い。脚台には坏底部内面が接合の工具痕を残す未調整で「ハ」の字に開くもの(第82図13)、器高は低いが大きく張り出すもの(第82図16)と、扁平なもの(第82図19)があるが、いずれも壺や鉢に付くと考えられる。鉢は無文の有段口縁が長く伸びるもの(第82図18)であるが、外反は小さい。蓋(第82図11・12)は小型のものである。

C8からは21点図化した。有段口縁の甕は擬凹線文のあるもの(第83図3)だが、条数は判らない。口縁端部を押さえて先細りしないもの(第83図2)は山陰系の甕である。蓋は頸部が僅かに屈曲して口縁が立ち上がるもの(第83図5)と、二重口縁で模様などの裝飾が全くないもの(第83図7)がある。凸帯を貼り付け屈曲する頸部(第83図10)には胴部側に波状に連続する篋刺突を加える。壺が鉢と考えられる口縁片(第83図9)には連続するS字のスタンプを区切るように縦にS字のスタンプを加える。口縁部に3本の坏部と篋刺突を斜めに加える模様帯を3段に重ねるもの(第83図20)は、東海系に多い口径の小さな高坏坏部である。口縁端面に山形状に波状文を加えるもの(第83図8)は、器台であろう。小型器台(第83図19)は口縁の内外面に丁寧なヨコミガキをし、端部を面取りする。端部に沈線を加えるもの(第83図18)は脚台の可能性もある。数条の沈線文の下にS字のスタンプを連続させるもの(第83図22)は有段脚であ

る。鉢には膨らんだ胴部から内傾する口縁部で、膨らみがやや大きいもの(第83図15)、膨らみが小さいもの(第83図16)、膨らむ部分に沈線を加えてその上に刺突列点文を巡らせるもの(第83図4)がある。後者は赤彩される。二重口縁壺に近い口縁の鉢(第83図6)は、無文の口縁帯の下端を丸く突出させる。内外面ともに赤彩されるが、外面は胴部下半まで、内面は頸部直下までしか赤彩確認できない。半環状の把手(第83図11)は、大型の鉢に付くものである。この他に平底をきれいに丸く窪ませ上底とするもの



第80図 包含層出土弥生土器・古式土師器13 (縮尺1/3)

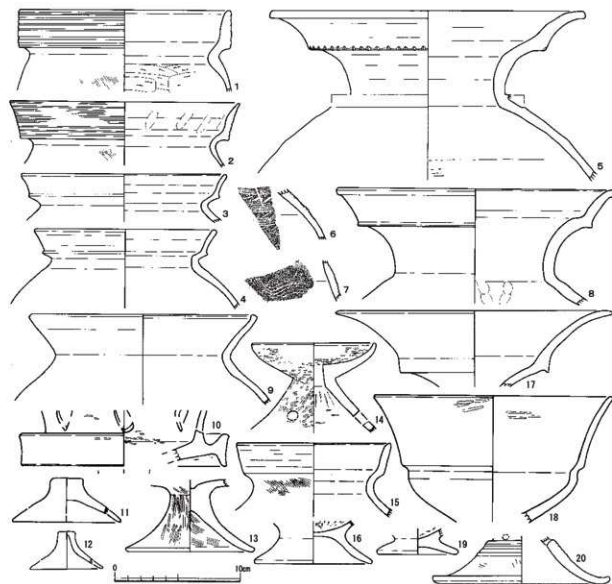
(第83図13)、口縁部を指押さえる手捏ねのもの(第83図12)、手捏ねで整形ののちハケ調整を加えるもの(第83図17)がある。「十」の竊書きがあるもの(第83図14)は小型の壺などの底部の形状であるが、同様な形のもの(第83図21)もこの時期の壺の胴部としては開き方が大きいので、いずれも蓋の縮み部と判断した。

C9からは29点図化した。有段口縁の甕はいずれも口縁部が先細りする擬凹線文があるもの(第84図2



第81図 包含層出土弥生土器・古式土師器14 (縮尺1/3)

～4)で、頸部の屈曲は「コ」の字に近いが、口縁内面には連続指頭圧痕を残さない。口縁の立ち上がり突出する山陰系の甕(第84図5)はその突出が不明瞭である。口縁の内面肥厚は小さいもの(第84図1)は口径が21cmを越え、布留甕としては大型となる。胴部に篋刺突のあるもの(第84図11)は布留甕に特有である。有段口縁の壺(第84図12)は口縁端部の平坦面が明瞭である。口縁帯の立ち上がり突出させるもの(第84図10)は頸部が小さく、胴部が大きくなる山陰系の壺である。二重口縁は太めの頸部から口縁帯が長めに伸びるもの(第84図6～8)と、やや短いもの(第84図9・14)である。平底の底部(第84図13)は小型の壺の胴部であろう。この他にも口縁が直線に開き刺突列点を加えるもの(第85図1)、口縁部と底部を欠く丸い胴部のもの(第85図2)や、二重口縁で円形竹管文と櫛描波状文を施文するもの(第85図13)がある。また櫛描波状文を施文する貼付け帯の幅が狭いもの(第85図11)や、広いもの(第85図10)などは壺もしくは器台の口縁帯であろう。小型器台は受部がやや内湾するもの(第85図9)と、ほぼ直線に開くもの(第85図7・8)がある。底部が小さい接合部(第85図14)は、東海系の小型高坏であろう。高坏の脚部には大きく開き器高が低いもの(第85図15)がある。「ハ」の字に開く脚部(第85図12)は

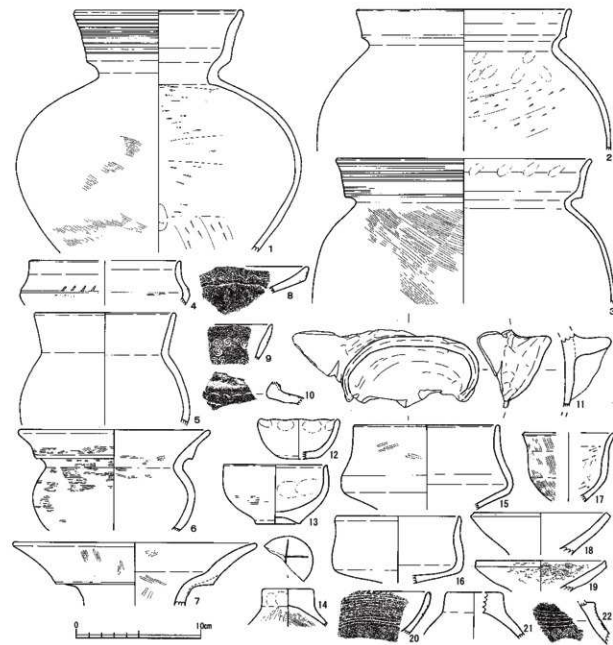


第82図 包含層出土弥生土器・古式土師器15 (縮尺1/3)

器台である。古代の須恵器などに多い境の高台に近いもの(第85図3)も、胎土などからこの時期と考えられる。鉢は手捏ねの小型品(第85図4)である。蓋は摘み部が水平に開くもの(第85図6)と、小さく斜めに開くもの(第85図5)である。

C10からは3点図化した。壺胴部片と考えられるものには、櫛描波状文を施文するもの(第85図17)と、櫛描直線文を施文するもの(第85図18)がある。鉢は口縁部をヨコナデして小さく外反するもの(第85図16)がある。

C11からは4点図化した。壺にはヘラ刻みを連続して加えるもの(第85図19)と、二重口縁(第85図22)がある。やや上底の胴部下(第85図20)と、短い脚台がつくもの(第85図21)は壺か鉢であろう。C12からは4点図化した。丸みのある胴部から口縁が「ハ」の字に開くもの(第85図24)は小型の壺である。刺突を連続して加える口縁部が斜めに開くもの(第85図25)は甕の、大きく水平近くまで開くもの(第85図



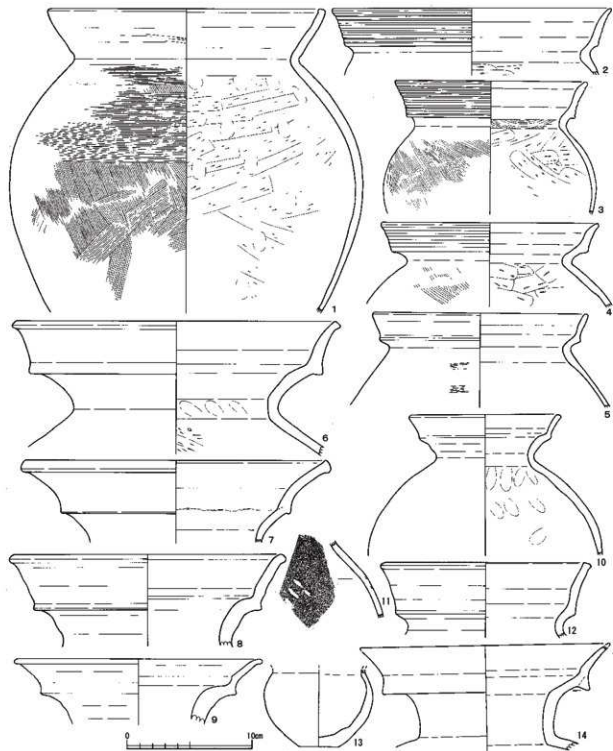
第83図 包含層出土弥生土器・古式土師器16 (縮尺1/3)



23)は広口の壺で、弥生時代中期である。口縁部(第85図26)は、タテハケののち山形にヘラ刻み目を加えた口縁端部直下に、櫛描波状文を施文する。時期、器形ともに不明である。

C13からは小型の壺の底部(第85図27)として図化した。蓋の擴み部である可能性もある。

C14からは3点図化した。壺の口縁と考えられる(第85図28・29)のうち、後者は弥生時代中期の可能性が高い。「ハ」の字に外反する脚台(第85図30)は、壺や鉢に付く。



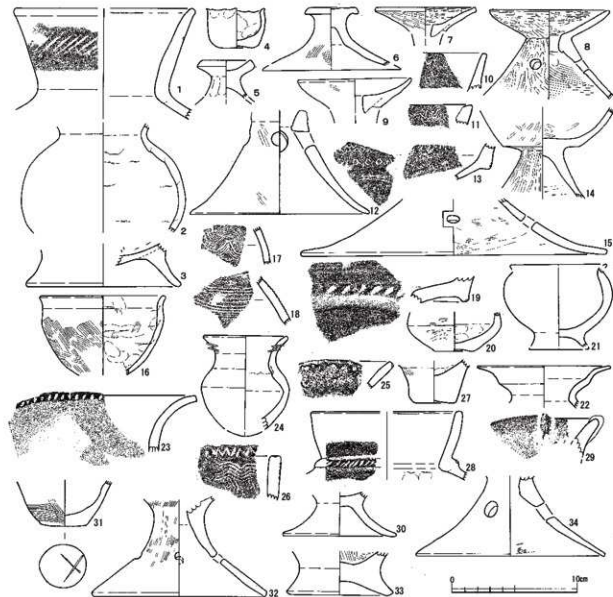
第84図 包含層出土弥生土器・古式土師器17 (縮尺1/3)

C15からは4点図化した。「×」のヘラ記号がある底部(第85図31)は、弥生時代中期の壺である可能性が高い。器台の脚部は2点(第85図32・34)ある。厚手で短い脚台(第85図33)は胴部内面にハケ調整を残す意が鉢であろう。

D4からは1点図化した。口縁帯下端を突出させた山陰系の壺(第86図1)であろう。

D8からは6点図化した。甕は胴部上半の破片でヘラ刺突列点文を巡らせるもの(第86図4)である。塊状の坏底部から「ハ」の字に口縁が開くもの(第86図2)は、本来は高坏の器形であるが、その底部中央に孔があり器台となる。小型器台には内湾する受部のもの(第86図11)と、本来の小型器台の器壁より厚く、その内面をハケとするもの(第86図5)で、脚台の可能性もある。鉢は口縁部が外反するもの(第86図3)がある。蓋は小さく開く端部の擴み部に小さい口径のもの(第86図6)である。

D9からは7点図化した。甕は山陰系であるが、突出がやや強いもの(第86図7)と、やや弱いもの(第86図8)がある。後者の胴部上半にはヨコハケののちに同じ工具による櫛描波状文を施文する。山形の櫛描文?と櫛描直線文が残る胴部片(第86図9)は壺の胴部片、口縁の内面に山形の波状文が残るもの(第



第85図 包含層出土弥生土器・古式土師器18 (縮尺1/3)

86図10)も壺であろう。厚手の上底の底部(第86図14)は壺と考えられる。脚台は内外面にハケ調整を残すもの(第86図12)と、器高の低い扁平なもの(第86図13)で、壺や鉢に付くものであろう。

D10からは8点図化した。甕は櫛による波状文があるもの(第86図20)はその胴部上半である。壺は文様などが無い直口壺(第86図21)、僅かに内傾した口縁端部を丸くする山陰系のもの(第86図22)などである。破片ではあるが、幅広い口縁帯に棒状浮文を貼りつけるもの(第86図17)と、有段口縁の下端にヘラ刺突列点文を加えるもの(第86図16)も壺である。鉢は弱い有段となるもの(第86図15)と、「く」の字の口縁(第86図19)がある。脚台は「ハ」の字に開く脚端部に面を作るもの(第86図18)である。

D11からは12点図化した。有段口縁の甕と思える口縁部(第87図1)もあるが、口縁帯の器壁が一般的な甕よりも厚く、先端を丸くする口縁端部は甕ではほとんど見ることができない。布留式の甕(第87図2)は口縁内面の肥厚が明瞭である。3本のヘラ刻みを残すもの(第87図10)は、厚い器壁から大型の懸脚部片と思われる。口縁部に羽状の櫛刺突のあるもの(第87図11)は弥生時代中期の壺か鉢であろう。高坏には小さな坏底部からやや内湾しながら口縁が広がるもの(第87図3)と、丸みのある坏底部から擬凹線文のある有段口縁が外反するもの(第87図4)がある。器台は小型器台の受部(第87図8)、縦長の「ハ」の字だが大きく開かない脚部(第87図12)、S字のスタンプと数条の沈線文を巡らすもの(第87図9)である。鉢は無文の有段口縁が大きく伸びるもの(第87図5)と、手捏ねの小型のもの(第87図6)である。前者の底部には脚部をはめ込んだ痕跡があり、脚台が付くであろう。底部に焼成前の穿孔があるもの(第87図7)は、丸みのある底部で厚手の器壁が典型的な「有孔鉢」ではない。

D12からは12点図化した。甕では、有段口縁の口径が18cm前後の一般的なもの2点(第87図13・16)は外傾する口縁帯を僅かに先細りさせる。やや大型の口径のもの(第87図15)の口縁は直立に近い。口縁内面に連続指頭痕を残すもの(第87図16)と、全く残さないもの(第87図13・15)がある。口縁が内面肥厚する甕(第87図17)は、一般的な布留甕よりも口縁が長く直線に伸びる。沈線で大きな波状のある胴部片(第87図23)は布留甕の胴部上半と考えられる。甕でゆるく外反した口縁端部内面を押圧によって波状とするもの(第87図18)は弥生時代中期である。擬凹線文のある有段口縁でも甕の口径としては小さく、頭部の屈曲も弱いもの(第87図14)は壺と考えられ胴部は大きく変る可能性が高い。また有段口縁の壺の口縁にしては厚手のもの(第87図19)は、頭部の屈曲も弱く壺と考えられるが、壺としては珍しく口縁内面に連続指頭痕を残す。櫛描直線文の上下に櫛描波状文のある破片(第87図21)は壺の胴部上半と考えられるが、格子のもの(第87図22)は器種等不明である。大きく伸びる無文の有段口縁(第87図24)は鉢と考えられる。脚台は小ぶりのもの(第87図20)で鉢などにつくものであろう。

D13からは9点図化した。甕は開く口縁の外側に刺突を加えるもの(第88図3)で、弥生時代中期である。壺は二重口縁の立ち上がり部分に竹管文が2個残るもの(第88図4)と、開いた擬凹線部の端部を包むように上下に凸帯を貼り付けるもの(第88図8)で、後者は銀唐文と思われる篋書きを加える。櫛描波状文の上下を櫛描直線文で挟むもの(第88図7)は壺の胴部上半である。高坏・器台の脚部は2点(第88図5・9)ある。装飾器台(第88図6)は受部端の下に無文の垂下帯を貼り付けると思われる。他に、鉢(第88図1)および鉢の底部と考えられる輪高台のような小さな脚台(第88図2)がある。

D14からは口縁上端部に櫛刺突列点文を加える弥生時代中期の壺(第88図10)のみである。

D15からは16点図化した。甕には「く」の字としては珍しい口径が27cmにも及ぶ大型のもの(第88図14)がある。口縁内面にはヨコハケを残すが、外面のヨコハケはナデ消し、全体にしつかりした口縁の作りとなっている。本来、SR出土で報告すべきものだが、ここに含める。甕には他に、頭部の屈曲が小

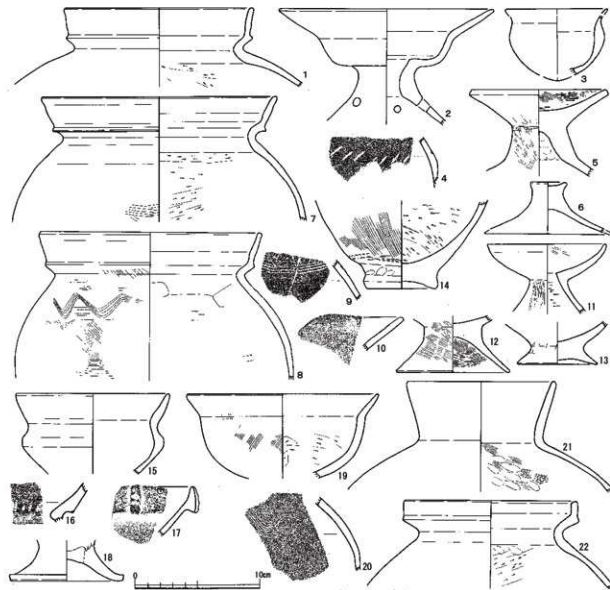
さいやや小型のもの(第88図11)がある。外反する口縁帯に明瞭な擬凹線文の有段口縁(第88図16)はやや小型の甕であろう。上底の底部を扁平な平底にしたもの(第88図13)はタキ甕の底部である。破片の中ほどに刺突列点文のあるもの(第88図17)は壺か高坏とする。幅広い口縁帯に円形竹管文を加えた円形浮文を3個残すもの(第88図12)は器台の口縁部と考えられる。

E16・D15 から出土した小型器台(第88図15)は僅かに内湾する受部で、脚の孔がやや上に位置する。

D16からは3点図化した。壺は大きく開いた有段口縁の外側の中ほどに凸帯を貼付けて、二重口縁のようにするもの(第88図19)と、円弧状の篋書きのある胴部上半片(第88図20)である。高坏・器台の脚部には斜めのヘラ刻みと2~3本の沈線を施すもの(第88図18)がある。

E10からは4点図化した。甕は山陰系で、端部に平坦面を作るもの(第89図1)と、丸くするもの(第89図2)がある。前者の突出はやや明瞭であるが、後者は明瞭だが小さい。波状文と直線文の櫛描があるもの(第89図7)は、壺の胴部片である。小型器台(第89図3)の受部はやや内湾して立ち上がる。

E12からは2点図化した。脚部上半から上の小型器台(第89図4)は、その大きさに比して接合部の孔



第86図 包含層出土弥生土器・古式土師器19(縮尺1/3)

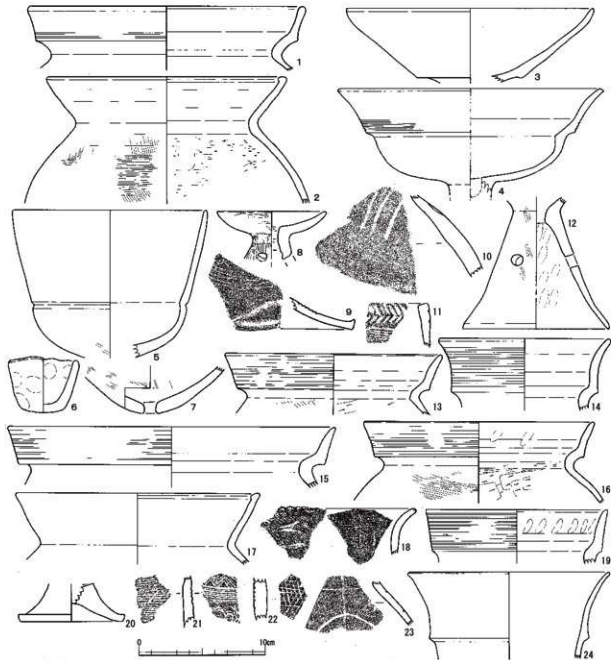
が2cm近くと大きい。把手(第89図5)はコーヒークップのような鉢に付くものであろう。

E13からは端部に面を作る脚台(第89図6)を図化した。

E14からは口縁が外傾して直線に開く擬凹線文のある有段口縁甕(第89図8)を図化した。

E15からは5点図化した。甕は口縁端部を僅かに外反させる擬凹線文のある有段口縁(第89図9)と、外反して開く「く」の字甕(第89図10)である。壺は二重口縁の開く口縁部の立ち上がり部分(第89図12)で、円形竹管文を2段に巡らせる。2本の沈線で直線を施文する下に山形の沈線となる胴部片(第89図13)も壺であらう。裝飾器台は口縁部(第89図11)で、透かしの一部が残る。

E16からは2点図化した。甕は口縁が「く」の字で胴部にタタキ目のあるもの(第89図16)である。小型の土器(第89図15)は鉢ではなく、皿の形状に近い。



第87図 包含層出土弥生土器・古式土師器20(縮尺1/3)

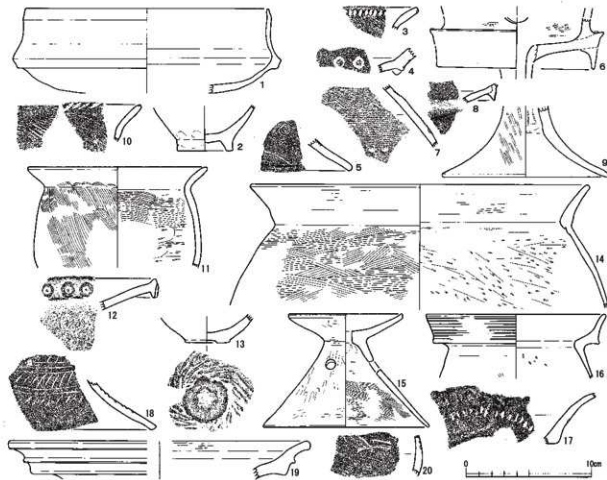
F16からは無文の有段口縁甕(第89図18)と、「く」の字甕(第89図17)を図化した。

F25・G25からは3本の擬凹線文の小型有段口縁甕、もしくは鉢(第89図14)を図化した。

G24・G25・G26からは無文の有段口縁の甕(第90図1)で、口縁内面に連続指頭圧痕が残る。

G25・H25からは有段口縁の甕(第90図8)で、短く直立する口縁帯上半部に3条の擬凹線を施文する。

G26からは25点図化した。有段口縁の甕は、擬凹線を施文する有文と無文のものがあるが、後者で図化できたのは1点(第90図7)だけである。前者には立ち上がりが短く、擬凹線文が明瞭なもの(第90図2)があり、古い様相を示す。そのほかに擬凹線文を施文するもの(第90図3～6)は、外傾する口縁帯の先端を先細りさせる。内外面ともに有段が不明瞭になるもの(第90図13)は、施文される擬凹線も不明瞭になる。「く」の字甕は頸部にハケ調整を確認できるので、胴部にタタキ目はないものと考えられる。4点(第90図9～12)は18cm前後の一般的な口径のもので、口縁端部を面取りする。やや小型のもの(第90図14)は口径が12cmほどと小さく、頸部の屈曲もやや緩い。タタキ目のある「く」の字甕でも胴部まで残るもの(第90図15)、胴部上半部分しかないもの(第90図18)、口縁と頸部付近しかないもの(第90図16・20)など、いずれもタタキ目は横かやや斜めである。タタキ目の底部には焼成前の穿孔があり、全体に突出する底部(第90図17)と、輪高台状の底部(第90図19)がある。大きく張る胴部から伸びた頸部が無文の有段口縁となる壺(第91図2)は、有段部の下端に粘土帯を張り付けて下に突出させる。二重口縁となる壺には外面のタタミガキ、内面のヨコミガキが明瞭なもの(第91図6)、ミガキ調整ののちにヨコナゲされたと考えられるもの(第91図5)と摩擦で調整が不明なもの(第91図7)がある。S字のスタンプ文のある口縁帯(第



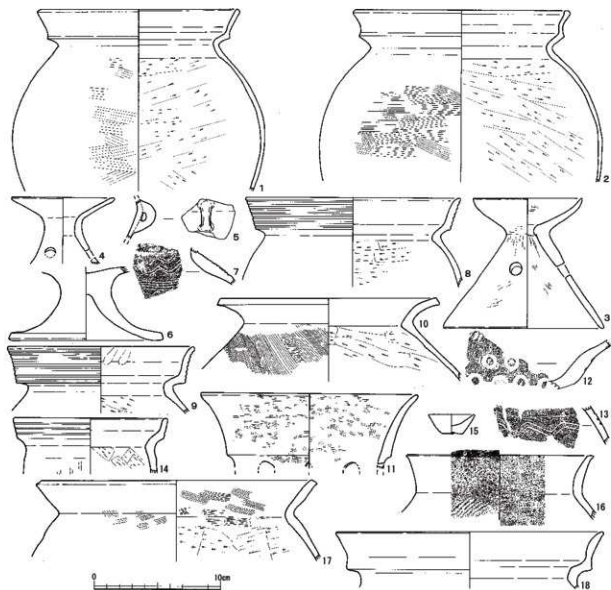
第88図 包含層出土弥生土器・古式土師器21(縮尺1/3)

91図1)は壺として図化しただが、裝飾器台の垂下帯となるかもしれない。他に脚台(第91図3)、蓋(第91図4)がある。

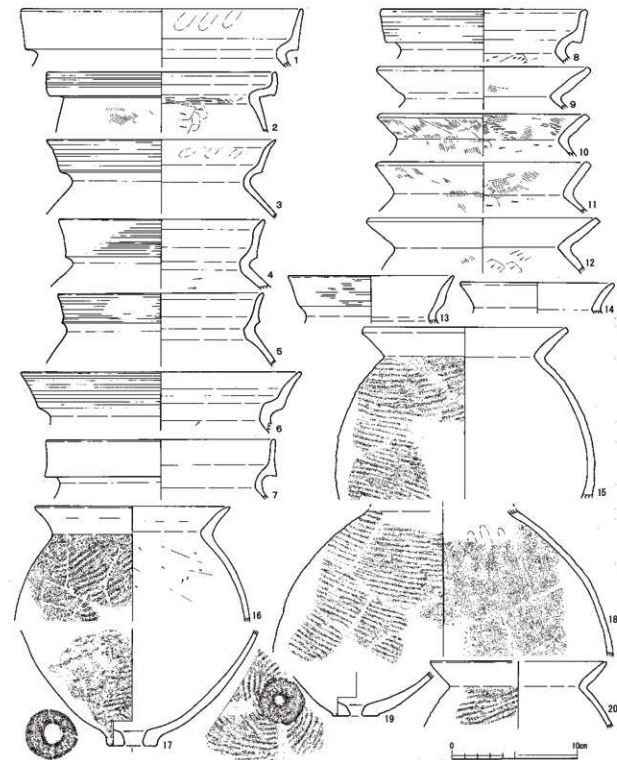
G27からは6点図化した。有段口縁の甕は口縁端部が外反してやや先細りする大型のもの(第91図11)と、口縁帯がほぼ直立するもの(第91図9)で、いずれも擬凹線文を施文する。有段口縁でも山陰系に類するもの(第91図10)は、口縁下端の突出は強いヨコナデで盛り上げた程度で、このタイプにはほとんどないほど口縁が大きく開く。口縁端部を内面に肥厚させることから山陰系と判断した。胴部にタタキ目を残すもの(第91図13)は胴部から小さな頸部となる壺に近い器形である。外面のタタキ目をナデ消し、さらに方向は不明ながらミガキ調整し、内面はハケもしくは指などでナデ仕上げとしている。有段の口縁となる壺(第91図8)は、無文である。蓋(第91図14)は水平に摘み部が伸びて端面がある。

H26からは無文の有段口縁の甕(第91図15)を図化した。

H27からは2点図化した。布留甕(第91図12)は、胴部上半にはヘラ描の波状沈線が巡る。小さな平底の底部(第91図16)は焼成前の穿孔があり、有孔鉢と考えられる。



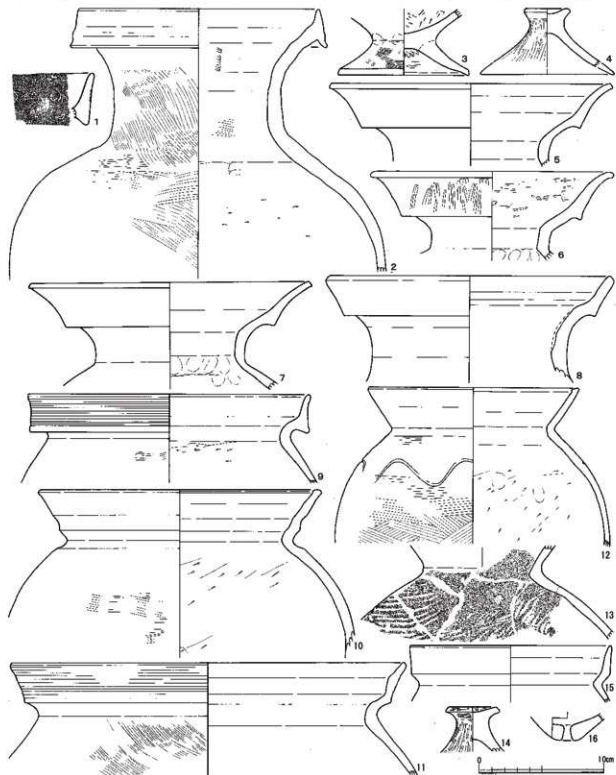
第89図 包含層出土弥生土器・古式土師器22 (縮尺1/3)



第90図 包含層出土弥生土器・古式土師器23 (縮尺1/3)

包含層からは線刻がある壺の胴部片が出土しており、8点を図化した。線刻はいずれも4から6本の細いヘラによるものである。大きくカーブする胴部最大径の上の部分と考えられる破片(第92図1)には、直線の下上に斜めのヘラ刺突がある。頸部に近くその屈曲直前部分の破片(第92図2)は、3本の直線の間連続する山形文を巡らし2帯の廻書文とする。屈曲する頸部の器壁が厚く、これに続く胴部上半に近いと思われる破片(第92図3)には、3本のヘラ描が弧状に残る。胴部片と考えられる3点の破片には、

4から6本の沈線による組紐文に近い弧文帯?らしきもの(第92図5・6・8)や、植物の葉脈のようなもの(第92図7)がある。また数本の沈線のみしか確認できなかった破片(第92図4)もある。8点の内6点(第92図3~8)の胎土は明るい色調であるが、頸部に近い破片(第92図2)は黒斑の部分である。胴部最大径に近い破片(第92図1)は器壁断面が灰色で、表面の化粧粘土が剥落したためか、線刻もやや不明である。これら破片8点の胎土を比較すると4点(第92図3・5・6・8)の器壁表面の色調は明るめ



第91図 包含層出土弥生土器・古式土師器24 (縮尺1/3)

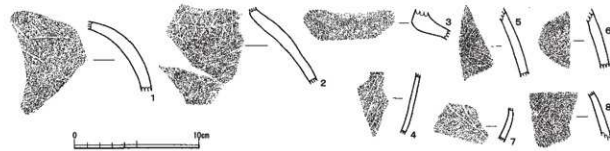
の黄褐色で、それより内側と内面は黒っぽい灰色である。頸部に近い胴部上半の破片(第92図2)の器壁表面は黒斑によるものか黒味のある灰色だが、内面はやや浅い橙色である。これら胎土の比較から頸部に組紐文を巡らすもの(第92図2)と、弧文帯文とは確定できないが少なくとも弧状の線刻の頸部片(第92図3)があり、類似する胎土の3点(第92図5・6・8)も後者と同じく弧状の線刻である。これ以外の2点とは、器壁表面が赤味の強いもの(第92図4)と、全体に赤味が弱く白っぽいもの(第92図7)で、線刻も弧状のようには見えない。

縄文土器の一部が遺構からの出土であるが、明らかな混入と考えている。多くはC7区包含層から出土しており、ここにまとめた。図化した土器は有文の浅鉢3点と、無文の深鉢7点の計10点である。有文の浅鉢はいずれも破片が小さい。浅鉢で口縁が大きく内傾するもの(第93図2)は端部を外側に折返して、凸帯状にし、その下に山形の沈線を加える。この破片の胎土には大きさが1mmほどの白色粒子が含まれており、縄文時代晩期の浅鉢などによく見られる胎土ではない。むしろ福井平野の弥生時代中期の胎土に近いが、弥生時代中期でもこのような器形は古く、本遺跡で出土している弥生時代中期の時期と異なる。つまりこの破片1点のみ弥生時代中期でも古手の時期である可能性がある。僅かに内傾する口縁(第93図3)は、直下に浅い凹線状の明確なものではない沈線が3条確認できる。内傾しないで開口径縁(第93図4)は、口縁直下を肥厚させて、2条の沈線を加える。深鉢で口縁が残るものは3点ある。底部付近まであるもの(第93図5)は、端部まで残っている部分が僅かで限られるが波状の口縁と考えられる。口縁部付近は横にケズリ、幅5~6cmほどの無文帯とし、それ以下は粗い櫛と考えられる縦条痕である。口縁部の残りが少ないが、押圧と考えられるもの(第93図6)と、口縁端部に連続の押圧が明らかなもの(第93図1)も、先に述べた大きな破片と同じ調整と色調で同一個体である可能性がある。口縁部がない胴部片の4点(第93図7~10)は、胴部でも中位より下の部分と考えられ、特に輪積み状であった底部により近いと思われるもの(第93図8)がある。これら胴部片の4点は同一個体ではない可能性がある。

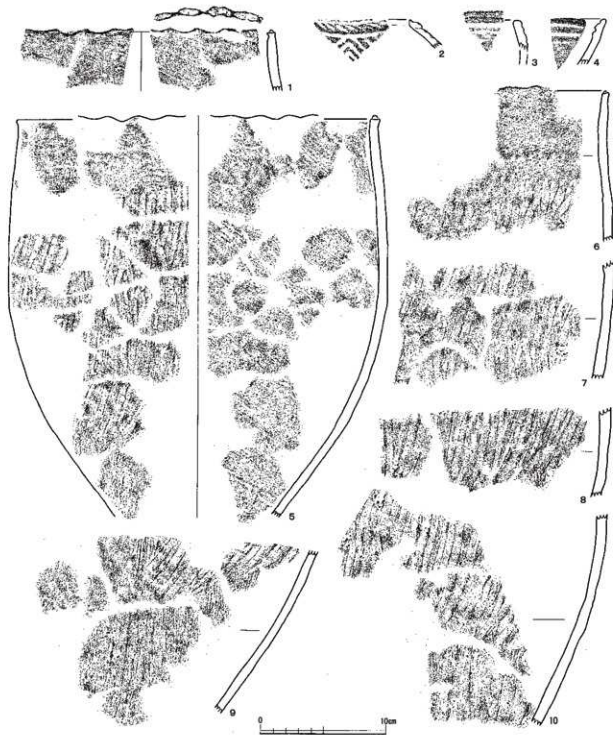
## 2 古代の土器 (第94~97図)

### 1 I区遺構出土土器

I区SB1の柱穴2から、移動式竈の底(第94図1)と、須恵器の皿(第94図2)が出ている。同じような形状の竈としての土製品は未確認であるが、底と想定した平坦面に続く屈曲部が僅かにカーブしていることなどから竈の一部と想定した。I区SD1からは須恵器の皿(第94図3)と高台坪(第94図4)に、窯道具の焼台(第94図5)を図化した。これまで本県の集落から窯道具が出土している事例は未確認であったが、先年に報告書を刊行した御麩尾遺跡(本遺跡の東約2km弱)でも、刊行後に窯道具を確認したため、ここで図化した(第94図6)。御麩尾遺跡も本遺跡も約5km離れた北に、須恵器生産地の柿原窯跡群が展



第92図 包含層出土弥生土器・古式土師器25 (縮尺1/3)



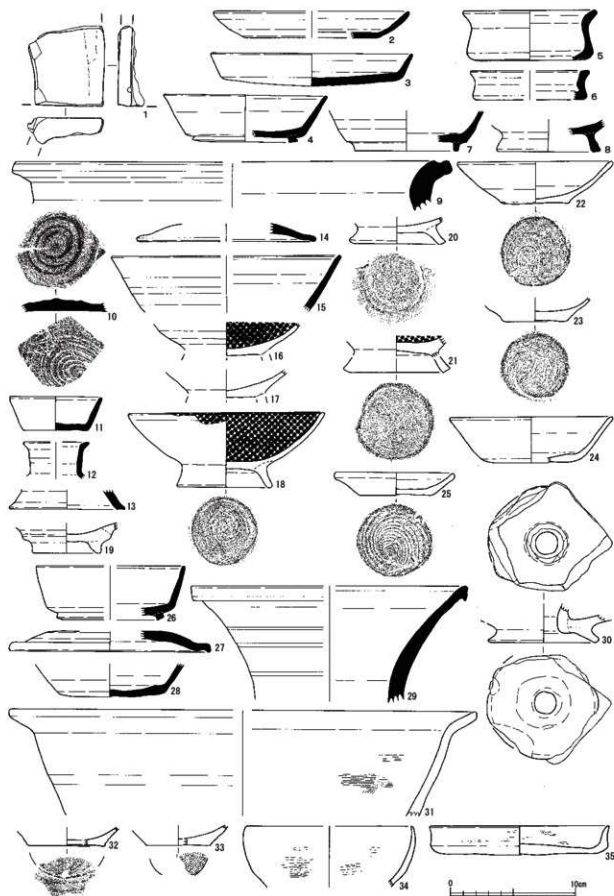
第93図 縄文土器 (縮尺1/3)

開していることから、平野部の集落に須恵器が運び込まれた際に、窯道具も何らかの理由で伴ったと考えられる。

## 2 II・III区遺構出土土器

II区SE1からは混入だが須恵器の中型甕口縁(第94図29)がある。II区SE2から須恵器の大甕口縁部片(第94図9)、高台坏底部(第94図7)、高台高台部(第94図8)が出土している。II区SE3からは内面にはロクロ成形による回転ヒナデ痕、底部外面には糸切り痕を残すもの(第94図10)が出土している。須恵器

の坏類など小型のものに底部の切り離しに回転糸切りを行うものはほとんどないので、中型の甕などの底部と考えられる。II区SE4からは須恵器5点、土師器9点図化した。須恵器は小型の坏(第94図11)と、蓋口縁部(第94図14)、埴の口縁部(第94図15)に高台(第94図13)、小型の甕口縁部(第94図12)である。小型の坏以外の3点は口径も不離かな破片である。「ハ」の字に開く高台(第94図13)は埴であろう。土師器には内面黒色土器が3点あり、高台まで残るもの(第94図18)は1点のみで、残る2点は高台を欠失している。高台を貼り付ける前の底部に糸切り痕を残すもの(第94図21)と、丁寧にナデ消すもの(第94図16)とがある。この他の土師器は埴の高台部(第94図19)、貼り付けた高台が剥がれそうな接合がままのもの(第94図20)、その高台が剥がれた底部(第94図17)など高台が付く埴がある。さらに埴平面には、回転糸切りの底部でも糸切りが丁寧なもの(第94図22)や糸切りが胴部にまで及ぶもの(第94図23)もある。埴でも須恵器の高台坏に近い器形のもの(第94図24)もある。II区SK16からは底部回転糸切りの小型の甕(第94図25)を図化した。II区SK26からは土師器の甕の底部と考えられるもの(第94図30)を図化した。中央に径1.7cm前後の孔を空け、孔から上に管状に伸びる。II区P15からは土師器埴の回転糸切りの底部(第94図32)を、II区P205からも土師器埴の回転糸切りの底部(第94図33)各1点を図化した。II区P79からは丸い胴部の土師器坏(第94図34)を図化した。古代の土師器の坏としては深いもので、古墳時代後期に多いタイプである。II区SD7からは須恵器25点、土師器4点、灰軸4点の合計34点を図化した。須恵器の高台坏で器形が判るもの(第95図1)は1点のみで、その他は高台部(第95図2~4)しか図化できなかった。無台坏は口径が12~13cm前後のもの(第95図5~8)は底部を回転ヘラ切のちナデなどを行い、口径が15cmを超えるもの(第95図9・10)は、先の無台坏より口縁がより開き、埴の形状に近くなる。底部は丁寧にヘラ切が胴部の下半にまでもの(第95図9)と、やや雑なヘラ切を残すもの(第95図10)がある。小片ながら丁寧にヘラ切が残る平底(第95図11・12)は、前者と同じような坏かもしれない。無台坏には口径が8cmにも満たないもの(第95図19)がある。埴は開く高台が付くもの(第95図17)1点で、同様な器形ながら高台が短く、底部内面には調整があまり及んでいないもの(第95図18)は、埴ではなく甕などの底部と考えられる。甕の頸部(第95図21)は平瓶の頸部の可能性もある。口縁部を鏝状に水平に揃え出すもの(第95図20)も甕などの口縁であろう。この他に双耳甕(第95図34)や、瓶類(第95図35)と考えられる胴部・底部もある。鉢には口縁が斜め上に開くもの(第95図22)、水平に短く伸びるもの(第95図23)の他、口径が30cmを超える大型の鉢(第95図24)には「ハ」の字に開く高台(第95図16)が付くであろう。坏類に伴う蓋は口縁端部が内面に反るもの(第95図14)と、端部を上に乗せ上げるもの(第95図13)があり、口径が5cmも満たないもの(第95図15)は特殊な甕に伴うものと考えられる。土師器は回転糸切りの底部と思われる小型の甕(第95図25)と、埴の高台(第95図27)がある。土師器の長胴甕の口縁は丸く立ち上がった口縁部を外反させるもの(第95図26)と、揃え上げて丸くするもの(第95図28)がある。灰軸陶器は甕の口縁部を小さく丸く外反するもの(第95図30)と、高台がある。灰軸の高台はほぼ直立するもの(第95図31)、短く端部が僅かに内湾するもの(第95図32)か、やや伸びてから内湾するもの(第95図29)で、後者の2点が甕である可能性がある。II区SD8からは赤彩された甕(第95図35)を図化した。II区SD9からは須恵器6点、土師器2点の計8点を図化した。須恵器の埴には強いヨコナデで丸い胴部を立ち上げるもの(第95図36)があるが、胎土や色調共に土師器を思わせる。埴の高台には短「ハ」の字に開くもの(第95図38)と、高台端部が外反するもの(第95図39)がある。丸い口縁端部のもの(第95図37)は甕の口縁部であろう。この他に「く」の字に屈曲する鉢の口縁部(第95図42)と、カキ豆の特徴から横瓶の胴部と考えられるもの(第95図43)がある。土師器はいずれも回転糸切りのある底部であるが、口縁端部



第94図 古代の土器 1 (縮尺1/3)

が残る小型の皿(第95図40)と、段ののちに立ち上がるもの(第95図41)は境と考えられる。Ⅱ区SD12からは須恵器3点、高台杯(第94図26)と、蓋口縁部(第94図27)、無台杯底部(第94図28)を図化した。無台杯の底部は回転ヘラ切で、切り離し後に全く調整しない。Ⅱ区SD13からは土師器の鍋(第94図31)を図化した。外面の剥落が著しく、内面のヨコハケのみ確認できる。Ⅲ区SK1からは土師器の皿(第94図35)を図化した。

### 3 包含層出土の土器

包含層出土の古代の土器について、種別・器種ごとに記述する。

包含層からは須恵器20点、土師器14点、施軸陶器8点の計42点を図化した。須恵器の高台杯(第96図1・2)は口径が大きい割には高台が小さく短い。これは口径が小さくなるもの(第96図3)も同じである。無台杯は口径が12cm前後のもの4点(第96図6・7・9・11)で口縁への立ち上がりもほぼ直線的で同じような開き方である。無台杯には口径が8cm前後の小さいもの(第96図8・10)があるが、口縁への立ち上がりに丸みがある。境でも高台が付くものは高台の端部を僅かに摘まみ出すもの(第96図4)と、大きく摘まみ出すもの(第96図5)があり、後者は口径が大きくなるようである。蓋(第96図12)は端部を下に摘まみ出す。壺には頸が長く伸びる長頸瓶の胴部(第96図14)や、口縁の口径が小さい短頸の胴部(第96図17)がある。後者の胴部上半には上下二段並行沈線が巡る。皿には底部とその周辺の胴部まで削る平底(第96図15)と、短い脚が付くもの(第96図16)がある。高杯(第96図13)には中空の脚が付く。鉢には屈曲した頸部から短く反する口縁で端部を丸くするもの(第96図19)がある。高台が剥離した大きく開き胴部下半を削るもの(第96図20)は大型の鉢と考えられる。甕(第96図18)は口縁部と胴部上半で、内面の青海波を弱くナゲ消して完全には消えていない。土師器の長胴甕(第96図22)は、立ち上げた口縁端部を僅かに摘まみ上げ、頸部以下にカキメを残す。同一個体と考えられる胴部片には内外面ともタタキを残す。有段に屈曲した口縁端部が丸いもの(第96図21)は、水平に近く開くため、鍋と考える。胴部の底を内側に折り曲げて、大きく空けるもの(第96図28)は、甕の底部であろう。1cm程とやや厚手の口縁部を丸く復元したもの(第96図23)は、その頸部にあたる部分に底の立ち上がりと想定できる部分があり、側面に「寛」が聞くのは確実である。口縁内面と一部残された底の内側に縁が付着していることから、類例はないが移動式の甕と考えている。土師器の坏・境は口縁端部を小さく屈曲するもの(第97図6)や、立ち上げた口縁が厚く底部が丸底のもの(第97図5)、形は須恵器の無台杯と同じもの(第97図4)などである。この他に底部に回転糸切りを残す小型の皿(第96図24)、高台を欠く境の坏部(第97図3)、境などの高台部分(第96図26・27)と糸切りの底部(第96図25)、小型の甕か鉢のやや厚手の糸切りの底部(第96図29)がある。施軸陶器でも緑軸陶器は高台付境(第97図2・13)と、ベタ高台の皿(第97図7~9)の5点である。灰軸陶器は境の高台部分で僅かに高台端部が内側になるもの(第97図10・12)と、高台の厚みが同じもの(第97図11)の3点である。この他に鉢や鍋などの把手(第97図1)がある。

### 3 中世の土器 (第98・99図)

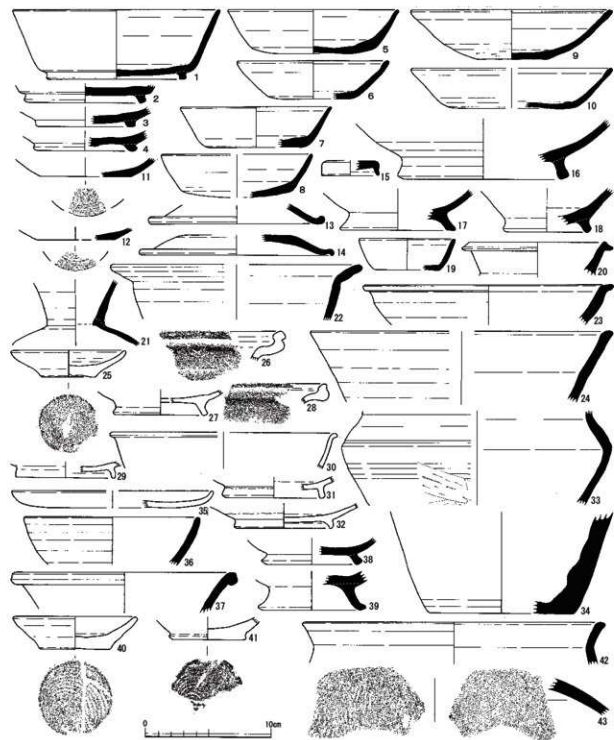
#### 1 Ⅰ区遺構出土土器

Ⅰ区SD1からは連続する「格子」の押印がある越前甕の肩部片(第98図1)がある。

#### 2 Ⅱ区・Ⅲ区遺構出土土器

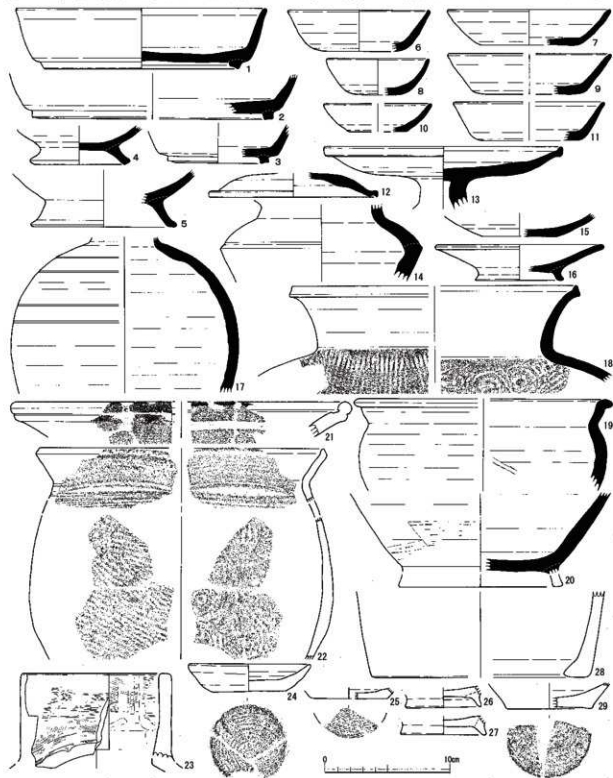
Ⅱ区SE1からは土師質の鍋と国産陶器2点、白磁が出土している。土師質の鍋(第98図4)は外面の頸部屈曲部に3条の沈線を加える。外面には縁の付着が目立つ。国産陶器は常滑の三筋壺(第98図2)と越前の捏鉢(第98図5)である。三筋壺は上2段の「筋」まであり、その沈線は深くて明瞭である。捏鉢は

高台を欠くもので、底部内面に重ね焼きの粘土が残る。白磁は玉縁の碗口縁部(第98図3)で、くすんだ色調である。Ⅱ区SE2からは土師質皿2点と鍋1点、国産陶器3点、白磁1点が出土している。土師質皿は復元できた口径が12cmほどのもの(第98図9)と15cmほどのもの(第98図10)で、手捏ね成形のち口縁部をヨコナデする。土師質の鍋(第98図12)は外面の胴部上半から頸部まではハケ調整のち指押さえ、内面は全面ヨコハケ調整で、外面には煤の付着が目立つ。国産陶器は常滑の壺口縁(第98図6)と、珠洲焼の胴片(第98図7)に瀬戸美濃の灰軸塊の高台部分(第98図8)である。灰軸塊は露胎した底部高台内



第98図 古代の土器2 (縮尺1/3)

面に「上」の墨書がある。白磁は玉縁口縁の碗(第98図11)である。Ⅱ区SE3からは土師質皿5点と白磁皿が出土している。土師質皿は口径が12cmほどのものには、口縁の立ち上がりが見やすいもの(第98図13)と、緩く開くだけのもの(第98図14)で、後者の内面には煤が付着する。9cm前後のもの(第98図15~17)は手捏ね成形のち口縁部をヨコナデする。白磁皿(第98図18)は底部のみである。Ⅱ区SD7からは土師質皿2点、瀬戸美濃2点、白磁4点が出土している。土師質皿は口縁部をヨコナデして立ち上げるもの



第99図 古代の土器3 (縮尺1/3)

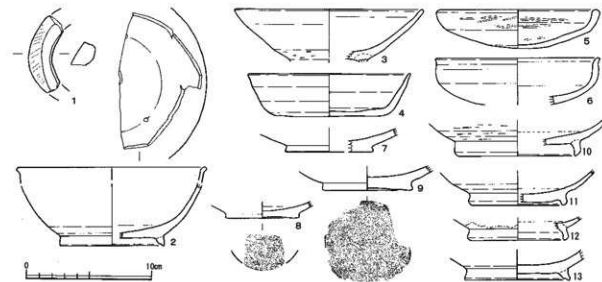


で、口径が15cmほどに復元できるもの(第98図24)と、10cmを超えないもの(第98図25)である。瀬戸美濃は灰釉の甕と考えられる高台(第98図19)と、灰釉の皿の底部(第98図26)である。白磁は碗の口縁部(第98図21)、碗の高台部(第98図22)、内面に模様のある皿(第98図23)と、碗の玉縁口縁部(第98図20)である。Ⅱ区SD9からは平底からの立ち上がり指押を遺し、口縁を立ち上げる土師質皿(第99図1)、削り出しの白磁碗高台(第99図2)、瀬戸美濃の灰釉皿の底部(第99図3)の3点である。Ⅱ区SD12からは常滑の甕口縁部(第98図27)と、白磁碗の玉縁口縁部(第98図28)が出土している。柱穴・小穴出土には、Ⅱ区P55から口縁部をヨコナデした土師質皿(第98図29)が、Ⅱ区P62からも立ち上げた口縁部をヨコナデした土師質皿(第98図30)が出土している。Ⅱ区P64からは土師質皿が3点出土している。口径が15cm前後のもの(第98図31)は平底からヨコナデで口縁を伸ばしたようである。口径が10cm前後のものは、2回のヨコナデで口縁とするもの(第98図32)と、平底の底部に回転糸切りの痕跡が微かに残るもの(第98図33)である。Ⅲ区SE1からは土師質皿(第98図34)が出土している。口径が8cm弱で、平らな底部から短い口縁が立ち上がる。

### 3 包含層出土の土器

包含層から出土した中世の土器について器種ごとに記述する。

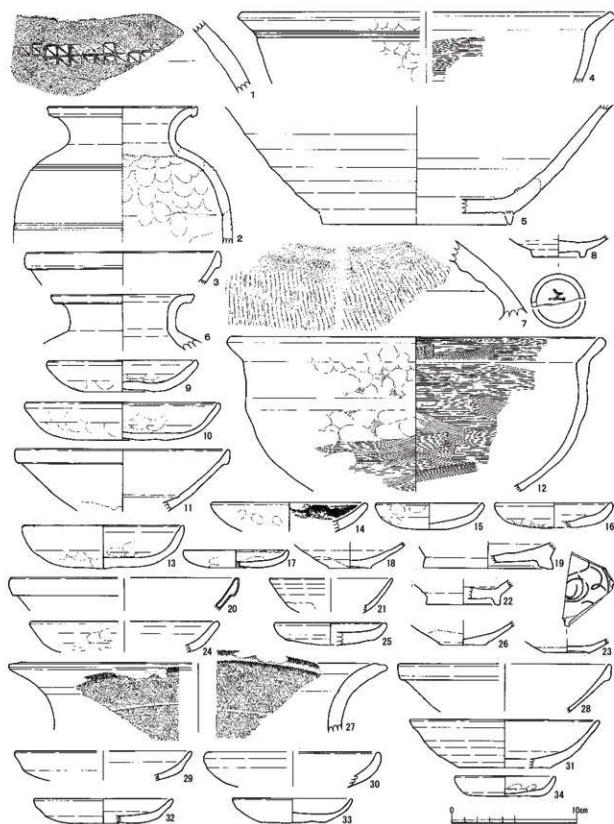
土師質皿は口縁部をヨコナデで立ち上げ、口径が15cmを超えるもの(第99図21)と、口径が10cm未満のもの(第99図22・23)がある。この他に土師質の土器には足高台があり、高台の中実が2cm近いもの(第99図25)と、さらに3cmを超える長い高台のもの(第99図26)がある。国産陶器では、越前は簾状の押印がある甕胴部片(第99図5)と捏鉢の口縁部で、捏鉢は口縁端部を丸く引き出すもの(第99図4)と、平坦面をなすもの(第99図6)である。常滑は甕の胴部片で、全面に格子の押印を残すもの(第99図7)と、一部に残すもの(第99図10)、格子と簾状の2種類があるもの(第99図9)、簾状だけのもの(第99図11)がある。珠洲は甕の口縁部(第99図8)で、丸く外反した口縁部をさらに横に引き延ばす。この他に瀬戸美濃の灰釉皿の底部2点(第99図12・13)がある。白磁は碗の玉縁口縁2点と底部2点(第99図14・17)で、口縁部の玉縁は膨らみがやや厚いもの(第99図15)と、扁平なもの(第99図16)がある。青磁は微かに鐵連弁が判る口縁部(第99図18)と、碗の底部3点(第99図19・20・24)である。



第97図 古代の土器4 (縮尺1/3)

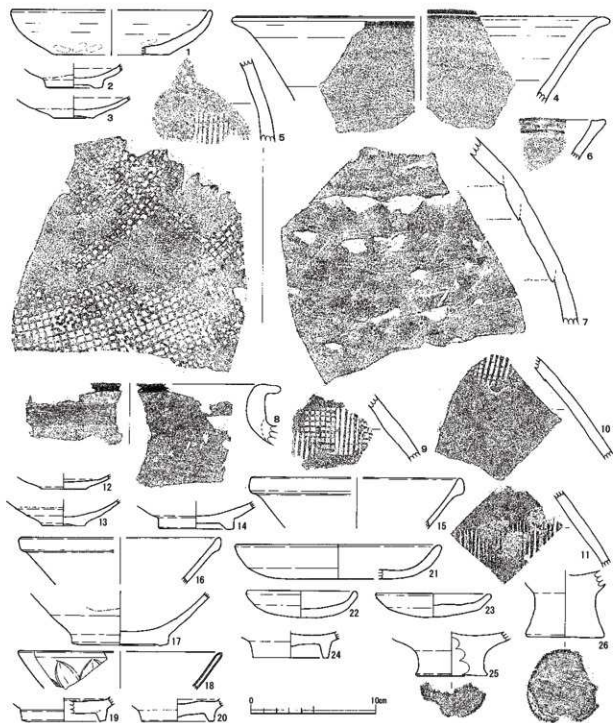
### 4 土製品 (第100図、第4表)

土製品はⅡ、Ⅲ区から出土し、17点の土雜の他に、紡錘車など22点を図化した。鏡形土製品(第100図1)は、厚さ1cmほどの円板状の中央に貼り付けた粘土塊の側面に、穴を貫通させて紐を模したと考えられ



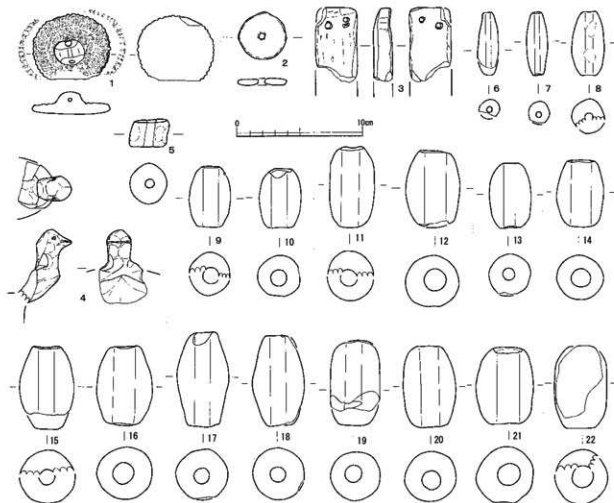
第98図 中世の土器・陶磁器1 (縮尺1/3)

る。紐とした周囲を波状の沈線で囲み、外側の縁には棒状のヘラ描きを小刻みに並べる。5mmほどの厚みがある円板端部の周囲にも刻み目を加える。反対側の鏡面にあたる部分は、指押さえて平坦にするが、僅かに凹凸がある。紐がある鏡背となる面は全体に黒色を、その反対側の鏡面となる範囲は1/3が黒色で、残る2/3は赤色を呈する。円板そのものも正円ではなくやや楕円の形状で、そこに加えられた線刻の長さや個々の間隔にもバラツキがあり、鏡そのものを精巧に模したとは言えない。土製円板の中央に直径4mmほどの孔があるもの(第100図2)は、土器片を再利用した紡錘車と考えられる。扁平な板状の土製品(第100図3)は短辺の端を押さえて僅かにそれせ、径3~4mmの孔を2か所貫通させる。この2孔は



第99図 中世の土器・陶磁器2(縮尺1/3)

水平に並ぶ位置ではなく、水平となる位置には未貫通の孔が残る。長辺の反対側が欠損しており、本来の形状、用途ともに不明である。全体に僅かではあるが赤い部分が残されているようで、赤彩、もしくは表面を赤味の強い粘土で覆っていた可能性がある。包含層からは点数は少ないが縄文時代晩期の土器も出土しているので、この時期に出土が多い土偶の一部の可能性も否定できない。鳥を模した土製品(第100図4)は、容器を模した土製品に付く把手のようなものと考えられる。貫通する孔の長さより幅が広く器高の低い円柱状のもの(第100図5)は土錘の可能性もある。土錘とされる典型的な形状のものは17点図化した。孔のある長軸に対して細いもの(第100図6・7)は2点と少ない。その多くは孔が見える端面の幅が、最大径に近い長方形のもの(第100図8~14・19~22)で、最大径の部分で屈曲するもの(第100図15~18)は少ない。



第100図 土製品(縮尺1/3)

第1表 弥生土器・古式土器観察表

調査の所在地を記載する。( )は調査・発掘地

Table with columns: 調査年度, 調査地, 器種, 部位, 区, 調査位置, 口径, 高さ, 底径, 重量, 色澤, 土質, 調査法・検出, 備考. Contains detailed records for various archaeological sites and artifacts.

Table with columns: 調査年度, 調査地, 器種, 部位, 区, 調査位置, 口径, 高さ, 底径, 重量, 色澤, 土質, 調査法・検出, 備考. Contains detailed records for various archaeological sites and artifacts.







器名	形状	部位	区	遺跡	発掘	数量	規格	色	土	調査方法・様相	備考
番号						口径	底径				
42	6	煎	煎上	C15	9B1	112.40	56.40	-	良	赤内土	⑤
43	6	煎	煎上	C15	9B5	-	-	-	良	赤内土	⑤
44	7	煎	煎上	C15	9B3	13.0	10.40	-	良	赤内土	⑤
45	6	煎	煎上	C15	9B4	18.40	17.50	-	良	赤内土	⑤
46	9	煎	煎上	F86	9B1	16.3	11.15	-	良	赤内土	⑤
47	6	煎	煎上	F72	9B2	12.0	14.00	-	良	赤内土	⑤
48	6	煎	煎上	C15	9B1	16.40	11.20	-	良	赤内土	⑤
49	2	煎	煎上	C15	9B1	-	-	-	良	赤内土	⑤
50	2	煎	煎上	C15	9B1	-	-	-	良	赤内土	⑤
51	3	煎	煎上	C15	9B1	19.20	8.2	126.70	良	赤内土	⑤
52	6	煎	煎上	C15	9B3	236.00	15.70	-	良	赤内土	⑤
53	6	煎	煎上	C15	9B3	236.00	11.25	-	良	赤内土	⑤
54	6	煎	煎上	C15	9B4	196.40	15.60	-	良	赤内土	⑤
55	6	煎	煎上	C15	9B4	196.40	15.60	-	良	赤内土	⑤
56	7	煎	煎上	C15	9B1	-	-	-	良	赤内土	⑤
57	6	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤
58	3	煎	煎上	C15	9B1	116.60	6.50	-	良	赤内土	⑤
59	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
60	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
61	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
62	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
63	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
64	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
65	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
66	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
67	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
68	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
69	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
70	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
71	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
72	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
73	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
74	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
75	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
76	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
77	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
78	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
79	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
80	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
81	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
82	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
83	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
84	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
85	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
86	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
87	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
88	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
89	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
90	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
91	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
92	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
93	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
94	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
95	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
96	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
97	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
98	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
99	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
100	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	

器名	形状	部位	区	遺跡	発掘	数量	規格	色	土	調査方法・様相	備考
番号						口径	底径				
64	煎	煎上	C15	9B1	112.40	56.40	-	良	赤内土	⑤	
65	煎	煎上	C15	9B5	-	-	-	-	良	赤内土	⑤
66	7	煎	煎上	C15	9B3	13.0	10.40	-	良	赤内土	⑤
67	6	煎	煎上	C15	9B4	18.40	17.50	-	良	赤内土	⑤
68	9	煎	煎上	F86	9B1	16.3	11.15	-	良	赤内土	⑤
69	6	煎	煎上	F72	9B2	12.0	14.00	-	良	赤内土	⑤
70	6	煎	煎上	C15	9B1	16.40	11.20	-	良	赤内土	⑤
71	2	煎	煎上	C15	9B1	-	-	-	良	赤内土	⑤
72	2	煎	煎上	C15	9B1	-	-	-	良	赤内土	⑤
73	3	煎	煎上	C15	9B1	19.20	8.2	126.70	良	赤内土	⑤
74	6	煎	煎上	C15	9B3	236.00	15.70	-	良	赤内土	⑤
75	6	煎	煎上	C15	9B3	236.00	11.25	-	良	赤内土	⑤
76	6	煎	煎上	C15	9B4	196.40	15.60	-	良	赤内土	⑤
77	6	煎	煎上	C15	9B4	196.40	15.60	-	良	赤内土	⑤
78	7	煎	煎上	C15	9B1	-	-	-	良	赤内土	⑤
79	6	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤
80	3	煎	煎上	C15	9B1	116.60	6.50	-	良	赤内土	⑤
81	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
82	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
83	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
84	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
85	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
86	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
87	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
88	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
89	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
90	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
91	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
92	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
93	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
94	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
95	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
96	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
97	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
98	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
99	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	
100	煎	煎上	C15	9B1	123.60	16.20	-	良	赤内土	⑤	















Table with columns: 調査番号, 遺物種別, 部位, 区, 遺跡/層位, 位置, 面積, 形状, 色調, 土質, 調査技法・材料, 備考. Rows 91-98.

Table with columns: 調査番号, 遺物種別, 部位, 区, 遺跡/層位, 位置, 面積, 形状, 色調, 土質, 調査技法・材料, 備考. Rows 99-123.

第2表 縄文土器出土位置一覧表

層位の区分は全て省略した。

Table with columns: 調査番号, 遺物種別, 部位, 区, 遺跡/層位, 備考, 調査番号, 遺物種別, 部位, 区, 遺跡/層位, 備考. Rows 93-98.

第3表 古代・中世の土器・陶磁器観察表

層位の区分は全て省略した。( ) は推定・推察

Table with columns: 調査番号, 遺物種別, 部位, 区, 遺跡/層位, 位置, 面積, 形状, 色調, 土質, 調査技法・材料, 備考. Rows 99-110.



標本 番号	種類	形状	部位	底	遺構・ 位置	位置 (M)	口径 最大長	底径 最大長	厚さ 最大長	色調	構成	出土 層	調査法・発掘	備考
90-7	変形片	葉	断面	45	台上層	-	-	-	-	黒	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
90-8	変形片	葉	断面	43	Ⅱ	-	10.00	-	-	黒	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
90-9	変形片	葉	断面	C13	Ⅱ	-	-	-	-	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-10	変形片	葉	断面	C11	Ⅱ	-	-	-	-	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-11	変形片	葉	断面	C10	Ⅱ	-	-	-	-	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-12	変形片	葉	断面	C5	Ⅱ	-	0.20	13.60	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-13	変形片	葉	断面	28	Ⅱ	-	0.20	13.60	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-14	白磁	鉢	断面	28	Ⅱ	-	0.20	13.60	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-15	白磁	鉢	断面	28	Ⅱ	-	0.20	13.60	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-16	白磁	鉢	断面	29	Ⅱ	-	0.20	13.60	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-17	白磁	鉢	断面	47	Ⅱ	-	0.40	17.70	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-18	青磁	鉢	断面	1027	Ⅱ	-	0.60	19.00	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-19	青磁	鉢	断面	C13	Ⅱ	-	0.60	19.00	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-20	青磁	鉢	断面	49	Ⅱ	-	0.60	19.00	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-21	上野焼	鉢	断面	915	Ⅱ	-	0.60	19.00	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-22	上野焼	鉢	断面	916	Ⅱ	-	0.60	19.00	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-23	上野焼	鉢	断面	917	Ⅱ	-	0.60	19.00	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-24	青磁	鉢	断面	44	Ⅱ	-	0.20	13.60	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-25	上野焼	鉢	断面	917	Ⅱ	-	0.60	19.00	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台
90-26	上野焼	鉢	断面	45	Ⅱ	-	0.40	17.70	0.10	黒	貝	①	内125/5区10号坑 内107/高台	内125/5区10号坑 内107/高台

第4表 土製品観察表

標本の部位番号を欄外に示す。( )は断面・横断面

標本 番号	種類	形状	部位	底	遺構・ 位置	位置 (M)	口径 最大長	底径 最大長	厚さ 最大長	色調	構成	出土 層	調査法・発掘	備考
100-1	黄土 土製品	土製品	断面	911	Ⅱ	-	0.20	6.1	0.4	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-2	黄土	土製品	断面	454	Ⅱ	-	3.8	3.7	0.4	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-3	黄土	土製品	断面	45	Ⅱ	-	0.60	3.3	1.5	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-4	黄土	土製品	断面	42	Ⅱ	-	0.60	0.70	14.20	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-5	中野	土製品	断面	915	Ⅱ	-	3.0	2.2	0.7	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-6	土製品	断面	C11	Ⅱ	-	1.6	14.6	0.45	2.00	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-7	土製品	断面	32	Ⅱ	-	1.65	5.0	0.4	2.00	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-8	土製品	断面	916	Ⅱ	-	2.6	5.1	0.40	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-9	土製品	断面	917	Ⅱ	-	3.2	3.2	0.75	-	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-10	土製品	断面	C14	Ⅱ	-	3.4	4.7	1.3	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-11	土製品	断面	917	Ⅱ	-	3.5	6.4	-	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-12	土製品	断面	911	Ⅱ	-	4.3	0.60	3.7	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-13	土製品	断面	49	Ⅱ	-	3.3	5.2	1.0	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-14	土製品	断面	915	Ⅱ	-	3.7	0.20	1.6	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-15	土製品	断面	C11	Ⅱ	-	4.5	0.10	1.9	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-16	土製品	断面	914	Ⅱ	-	4.4	4.3	1.7	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-17	土製品	断面	C14	Ⅱ	-	4.1	7.45	1.2	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-18	土製品	断面	914	Ⅱ	-	4.1	7.2	1.4	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-19	土製品	断面	915	Ⅱ	-	3.9	0.20	1.35	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-20	土製品	断面	911	Ⅱ	-	4.1	6.5	1.5	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-21	土製品	断面	C14	Ⅱ	-	4.3	0.40	1.20	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑
100-22	土製品	断面	916	Ⅱ	-	-	-	-	0.90	黄	貝	①	内107/高台 内125/5区10号坑	内107/高台 内125/5区10号坑

## 第2節 石器・石製品・その他の遺物 (第101図～第105図、第5・6表)

調査で出土した主な石器・石製品には打製石斧、磨石類、台石・石皿類、砥石、玉作り関連資料などがある。半数以上は包含層出土であるため、所属時期は明確ではない。概ね土器と同様に弥生時代から中世にかけての時期に属すが、時期の異なるものが混在している。出土分布状況からは、調査区北側にかけて多く出土している傾向がある。以下、遺構出土石器・石製品、包含層出土石器・石製品、玉作り関連遺物およびその他の遺物について記載する。

## 1 遺構出土の石器・石製品 (第101図)

第101図1・2はⅡ区S12出土である。1は敲石、2は磨石である。1の敲打痕は下部に集中する。裏面下端は剥離痕がある。2の表面には凹みと磨痕、裏面には敲打痕と磨痕がある。3はⅡ区SD2出土の磨石類で、下端面に敲打痕がめぐる。顕著な磨面ではない。4はⅡ区SK17出土の敲石である。下端と右側面の敲打痕が明瞭である。5・6はⅡ区SK6出土である。5は磨石類である。表面には粗い筋の擦痕と凹みがある。6は台石・石皿類である。大型となるもので、磨面は平滑かつ光沢を有す。7はⅡ区SD7出土の砥石である。板状を呈し、左側面に切断痕がある。表裏2面が砥面となり、表面は溝状の光沢が顕著である。8はSK9出土の磨石類である。敲打痕と考える箇所もある。9・10はⅡ区SE2出土の砥石である。9は使用面が1面残存する。分割するための溝が掘られる。10は4面を使用面とし、その内1面には左右の溝が4条入る。11はⅡ区SD8出土の砥石である。表面が使用により反る。右側の溝は部分的に磨面が確認できる。12はSR1出土のL字状を呈す石片である。敲打で成形の後、研磨で仕上げている。下部には赤色顔料がわずかに附着し、磨面には長軸方向の線状痕が確認できる。13はⅡ区SK28出土の台石・石皿類である。表裏に磨面を有す。

## 2 包含層出土の石器・石製品 (第102図)

第102図1は打製石斧である。板状素材の周縁を調整する。刃部左は折損後、刃部の再生を施す。第102図2～19は砥石である。個々の砥石について時期は特定しがたい。形状には、角柱状を呈すもの(2・6・16)、板状を呈すもの(4・5)、その他不明のもの(3)がある。3は下端面から左側面にかけて方形を意図した整形となる。5は仕上げ砥石の可能性がある。6の断面は不整形となる。8の側面は切断後砥面としたが、9には幅広い浅い溝、U字状の溝がある。10は小片だが、残存する各面にV字状および浅い溝を有す。13の端面は砥面としてしているが、18の残存する端面は整形のみである。14の両側面は正面ほど明瞭な砥面ではない。17・19は使用により表裏側面が大きくなる。第102図20～22は台石・石皿類である。20の磨面は反り、磨面下方は傾斜する。裏面に段を持ち多数の線状痕があるが使用面かは不明である。21・22は扁平な円盤を素材とし、正裏面を使用する。

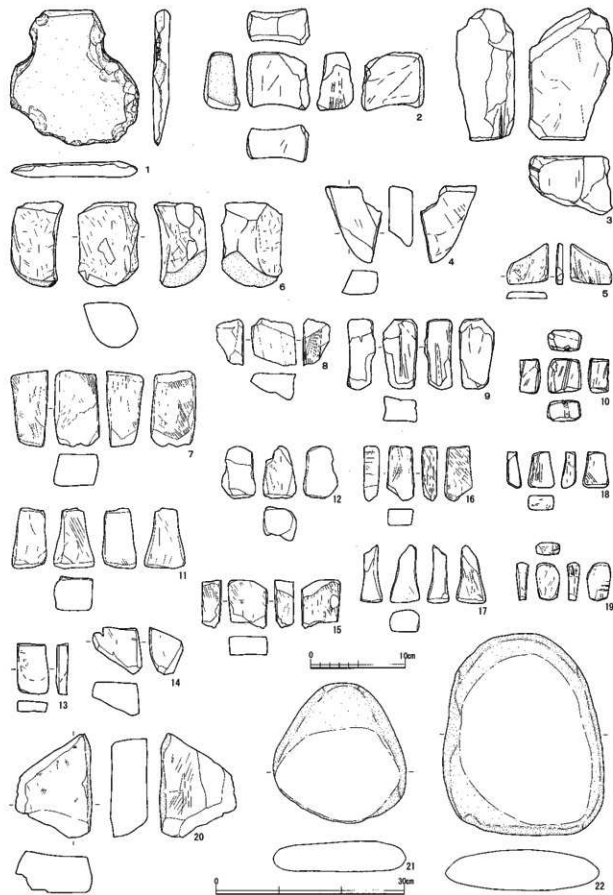
## 3 玉作り関連遺物 (第103・104図)

玉作り関連遺物には、緑色凝灰岩製管玉および製作工程品、未成品、管玉、勾玉、ガラス小玉がある。第103図1～5は荒削段階に位置づけられる。第104図1～6は形削段階に位置づけられる。5には上面と正面に直交する施溝痕がある。施溝痕を有す資料はこの1点である。7は角柱状未成品段階、8は穿孔前の多角柱状未成品である。端面から中心にかけて五～九角形に整形される。左下がり研磨され、両端面は平滑に研磨される。9・10は管玉である。9は長軸方向の擦痕がわずかに残る。10は円滑に研磨され、ともに両面穿孔と考える。11はスイ製の勾玉である。D字状を呈し、腹部をわずかに窪ませ、頭部より尾部がやや大きい。片側からの穿孔で、平滑に研磨される。12はガラス小玉である。整った形状で、色調は無色透明である。





第101図 石器・石製品 1 (縮尺1/4)



第102図 石器・石製品 2 (縮尺 1~19: 1/4、20~22: 1/6)



第103図 玉作り関連遺物1 (縮尺2/3)



第104図 玉作り関連遺物2 (縮尺2/3)

## 3 その他の遺物 (第105図、第5表)

第105図は金属製品である。和釘(第105図2・3)は、断面方形の棒状の一端を尖らせ、反対側を一方に折り曲げる。山形状の平面の薄い鉄片(第105図5)は飾り金具の可能性が高い。

第5表 金属製品観察表

( )は測定・推定値

検出番号	器種	出土地	材質	寸法 (cm)				備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
103-1	和釘	C11包含層	鉄	7.0	0.6	0.6	19.68	丸端部欠損
103-2	和釘	包含層	鉄	66.83	0.8	0.7	206.10	欠損
103-3	和釘	C11包含層	鉄	8.7	0.7	0.5	17.72	欠損
103-4	和釘	C11包含層	鉄	15.23	1.3	0.6	6.11	丸端・頭部欠損
103-5	不明	C11包含層	鉄	3.8	0.8	0.3	4.24	山形状部あり?

第105図 金属製品 (縮尺1/2)

第6表 石器・石製品観察表

観察の単位は発掘土壌断面。( ) は測定・推定値

発掘 番号	遺物	区画	遺構・層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	材質	遺存	備考
101	砥石	C13	S12 P1	202	98	54	1,273.1	安山岩	完整	正面と左右側面に磨いた痕
102	磨石類	C13	S12 P1	123	112	54	1,006.6	流紋岩	完整	中央部から研ぎ肌・裏面肌・裏打肌
103	磨石類	B19	S02	(113)	(94)	56	(801.4)	安山岩	1/2	正面磨石肌、下端面に磨いた痕
104	磨石類	B19	SK17	(80)	83	71	(535.4)	流紋岩	1/4	正面磨石肌、削い・磨痕 下端面に磨いた痕
105	磨石類	B19	SK.6	(123)	104	56	(1,162.8)	流紋岩	1/2	円盤
106	石片・石片類	D19	SK.6	(129)	(90)	50	(783.9)	安山岩	片欠	正面磨石肌
107	砥石	D14	SB.7	(105)	(78)	17	(149.4)	砂岩	1/4	板状 表面磨石使用
108	磨石類	E14	SK.9	127	112	72	1,336.1	火山岩	完整	磨石面 裏打面
109	砥石	C.8	SK.2	(147)	(59)	(50)	(79.2)	安山岩	片欠	磨石面
110	砥石	C.8	S12付片類	(60)	56	22	(72.1)	凝灰岩類	片欠	特殊 中央部から磨石面
111	砥石	C.9	SK.8	(165)	(74)	26	(4,097.0)	安山岩	1/4	特殊 表面磨石
112	石片	E.17	SK.6	162	98	72	1,312.1	安山岩	片欠	文字状石片 赤色顔料付着
113	石片・石片類	C.8	SK.8	(226)	(115)	(60)	(4,946.4)	安山岩	1/4	円盤 特殊 表面磨石面
114	打割石片	A.3	X.2	143	136	17	392.1	安山岩	磨石面	表面磨石使用材料 刃部再生
102	砥石	A.4	X.1	61	68	40	(193.9)	砂岩	3/4	使用面2面
103	砥石	C13	X.1	139	97	62	934.5	砂岩	片欠	使用面2面
104	砥石	C.7	X.1	(81)	(59)	25	(116.1)	砂岩	片欠	使用面2面
105	砥石	H27	X.1	(44)	44	7	(17.0)	凝灰岩類	片欠	使用面2面 磨石有り
106	砥石	C11	X.1	(90)	64	35	(355.0)	凝灰岩類	1/2	使用面4面 被磨痕
107	砥石	B.4	X.2	(86)	57	(39)	(217.4)	凝灰岩類	片欠	使用面4面 磨痕
108	砥石	B.2	X.1	(50)	48	28	(60.0)	凝灰岩類	片欠	使用面3面
109	砥石	G26	X.1	(47)	26	29	(111.3)	砂岩	2/4	使用面4面 磨石有り
102	砥石	C.3	X.1	36	35	(22)	(45.5)	砂岩小	片欠	使用面4面 磨石有り 被磨痕
111	砥石	D11	X.1	(64)	42	26	(122.8)	凝灰岩類	1/2	使用面4面
102	砥石	D17	X.3	(55)	35	26	(61.8)	凝灰岩類	片欠	使用面1面 石屑ややせこ
103	砥石	A.8	X.2	(53)	35	(13)	(41.3)	砂岩	片欠	使用面1面
104	砥石	A.8	X.1	(60)	(52)	(36)	(67.7)	凝灰岩類	片欠	使用面1面
105	砥石	A.3	X.2	(71)	44	28	(51.9)	凝灰岩類	片欠	使用面1面 磨痕
106	砥石	B19	X.2	(56)	29	17	(46.4)	凝灰岩類	2/4	使用面1面 両側面に磨いた痕
107	砥石	B.2	X.1	(61)	31	23	(38.5)	凝灰岩類	1/2	使用面1面
108	砥石	C.7	X.1	(27)	27	15	(19.5)	凝灰岩類	1/2	使用面1面
109	砥石	C.8	X.1	(63)	25	13	(18.1)	凝灰岩類	1/2	使用面1面 磨石有り
200	石片・石片類	D14	X.2	(162)	(119)	(65)	(4,541.5)	安山岩	片欠	正面に磨痕
201	石片・石片類	C.7	X.1	239	206	54	3,863.3	安山岩	完整	正面と裏面に磨痕
202	石片・石片類	C.6	X.1	236	252	64	—	安山岩	完整	正面と裏面に磨痕
101	製作時工程品	C.8	X.1	60	37	30	56.5	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
202	製作時工程品	D14	P.3	39	32	32	84.0	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
203	製作時工程品	A.2	X.2	26	18	18	6.4	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
104	製作時工程品	B.4	X.1	46	20	15	15.0	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
105	製作時工程品	B.5	X.1	33	54	17	21.1	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
104	製作時工程品	B.3	X.1	42	27	23	26.7	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
104	製作時工程品	A.3	X.1	37	23	15	(13.7)	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
104	製作時工程品	A.4	SK31	21	18	12	(4.1)	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
104	製作時工程品	B.9	SK24	26	25	17	16.3	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
104	製作時工程品	B.3	X.1	29	15	16	3.2	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡 磨痕
104	製作時工程品	C.2	X.1	23	12	12	3.4	緑色凝灰岩	完整	磨削し・投石跡
107	製作時工程品	A'3	X.1	16	12	5.5	緑色凝灰岩	完整	角状に成形品 被磨あり	
108	製作時工程品	A'3	X.1	8	8	5	6.4	緑色凝灰岩	完整	角状に成形品
109	磨石	B.3	X.1	13	5	4	0.2	緑色凝灰岩	磨石面	磨石面あり 両側穿孔、孔径1.4×2.1mm
110	磨石	B.3	X.1	5	5	0.3	緑色凝灰岩	磨石面	両側穿孔、孔径1.7mm	
111	石片	B.3	X.1	16	10	3	0.9	ヒスイ小	完整	片割穿孔、孔径0.8×1.1mm
102	小刀	C.5	磨石中	5	5	3	0.1	ガラス	完整	色調と形状透明

## 第5章 まとめ

## 第1節 遺跡について

今回の調査区における各時期について簡単に述べる。

縄文時代については、少量確認した土器の出土状況から調査区近隣に居住域は存在しなかったと考えられる。弥生時代中期の遺構には土坑墓と考えるⅡ区SK8などを確認した。遺構密度は低く、過去の南極越遺跡の調査例も含め、この時期は小規模な生活領域だったと推測する。弥生時代後期から古墳時代前期にかけては活動が活発となり、建物、土坑墓を含む土坑、溝など古墳時代前期にかけて継続する。Ⅱ区SK26の様な祭祀的な様相の土坑も現れる。Ⅱ・Ⅲ区で検出した建物に限れば、出土遺物からこの時期に属すと考えられ、また建物の桁行方向からは、座標北を基準に概ね南北および東西方向に揃った建物(SB1~3・5・9・10・13・16)の一群、10°前後東に傾く建物(SB8・17)とそれに直交する建物(SB7)の一群、25°前後東に傾く建物(SB6)とそれに直交する建物(SB4)の一群、50~60°前後東に傾く建物(SB12・14)とそれに直交する建物(SB11・15)の一群の大きく4つに区別することができる。古代ではⅠ区で掘立柱建物を確認した。古代と判断できるのは2棟である。柱穴の平面形は方形を呈し、他より大型となるのが特徴である。また、Ⅱ区SE3、Ⅱ区SK16やⅡ区SD7などの遺構が散在している。これは移動式竈、緑釉陶器や灰釉陶器など多様な器種が出土し、10世紀代の有力者層の存在を推定する。中世では井戸、溝の他、小穴を確認しており、建物の存在も十分に想定し得る。遺物では常滑焼や珠洲焼の他、白磁などの輸入陶磁器を含む12世紀後半から13世紀代に限られた期間の集落である。

## 第2節 いわゆる「タタキ甕」の出現について

坂井平野の北辺に沿って流れる竹田川流域では、その左岸に大規模な自然堤防が形成され、南から若宮遺跡・河和田遺跡・長屋遺跡(この3つはその支流の田島川)、桑原遺跡、清間遺跡、伊井遺跡、そして南極越遺跡と連続して集落遺跡が形成されている。なかでも若宮・河和田・清間などの各遺跡では、ここ最近発掘調査がなされ、刊行された報告書には今回報告する南極越遺跡と同じような弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多数掲載されている。在地の土器である有段口縁甕、これに続く古墳時代前期の布留式土器などが同じように多数出土している。しかし、本遺跡の図化ではこれらの土器と同様に「く」の字型も図化した。「く」の字型はあまり特徴のない器形で、時期を決める指標もないことから図化の対象から外れていることも考えられるが、胴部にタタキ調整がある「タタキ甕(注1)」は比較図化の対象となることが多い。しかし、あわら市報告の南極越遺跡ではそのような土器の出土は報告されておらず、周辺の伊井遺跡や清間遺跡でも報告されていない(注2)。同様な時期の土器が同じようにあるわけではないが、この時期の調査事例が多い本遺跡南西部に広がる坂井平野での出土例は少ない。水落部分のトレンチ状の調査であるが、約38,000㎡の広範囲を対象とした坂井兵庫遺跡群では当該期の土器が多数報告されているものの、タタキ甕はそのほとんどが口縁部などの破片13点である。その南東約3kmの弥生時代後期から古墳時代前期の舟倉福島通遺跡では確認できていないし、同じく南東約6kmの弥生時代後期から布留式を出土しない古墳時代初期の高柳・下安田遺跡では、包含層から出土した胴部片の1点だけである。高柳・下安田遺跡から約1km南東の上安田向田遺跡では布留甕を含みない、有段口縁甕が主体となる白江式の一群がまとまって出土し、湧水地点での祭祀行為の土器群が出土したがタ

タキ甕は確認されていない。しかし隣接する、おそらく同一集落と思われる旧丸岡町(現坂井市丸岡町)が調査した松木遺跡の1号住居でタキ甕が出土している。また布留甕を伴わない別の遺構(SX3とSX4)で1点ずつ、包含層出土で6点もの出土が報告されており(註3)、遺跡によってその数は多寡がある。

タキ甕は、弥生時代後期に畿内で出現したと考えられているが、越前での出現の時期が問題とされたことはない。現在、弥生時代後期の段階のタキ甕は、この時期の大規模な集落が調査された林・藤島遺跡東地区S101で完形のもものが報告されているが、これ以外にはない。共存する在地の土器から、後期でもその終末までには降らない法仏式の範疇である。タキ甕の器形も最大径が上半にある長胴で、その下半はやや内湾しながら、5cm近い平底の底部となる。畿内の「く」の字甕でも後期中ほどに併行すると考えられる。また、林・藤島遺跡から西へ約2kmに位置する高柳遺跡では、新幹線建設(累壇文センター調査)とこれに先行した区画整理事業等(市教委調査)で、約47,000㎡もの面積が調査されたが、市の調査では1点も報告されていない。遺跡を南北に縦断した新幹線の調査で、その北側(高柳遺跡1)は当該期でも布留式の半ば以降の時期が中心で、南寄りの調査区(高柳遺跡2)のSD53で僅かに1点を確認したのみである。本県では後期の畿内系甕の搬入は確認していないが、それに類似した甕が上河北江原町遺跡で出土している。共存する在地の土器から後期末の月形式の範疇の時期と考えられるが、この甕の調整はタキキではなくハケ調整である。在地の月形式の有段口縁甕と「く」の字甕を多数出土したSD93・94では布留式甕の出土が確認されず、底部片も含むと20点ものタキ甕が出土している。上河北江原町遺跡から北へ約2.5kmに位置する小稲津遺跡では溝資料ながら、典型的な有段口縁がくずれ白江式に降る甕、および4点の「く」の字甕と共にタキ甕が出土している。上河北江原町遺跡から約2.5km西の今市岩畑遺跡SD002では数点の布留式甕を含むが、これまでの遺跡と同じように白江式に降る有段口縁甕23点と「く」の字甕11点に加えて、14点ものタキ甕が出土している。やや離れたが、鯖江市長泉寺遺跡では白江式と考えているSK46とSK58で1点ずつ出土している。現在のところ、弥生時代でも凹線紋系土器で確認されたタキキ調整は後期の中頃まで一部に残るが、擬凹線が施文される有段口縁の甕がほぼ全体を占める後期の後半から終末にはなくなり、「く」の字甕と共に古墳時代の初頭に本県では再度出現し、その点数も出土する遺跡も大幅に増えたものと考えられる。

ところでタキ甕は本県の各所で出土している訳ではない。若狭湾沿岸の敦賀市大町田遺跡は現在整理中であるが、複数個体のタキ甕を確認している。その西の旧国の若狭になると現段階では1点も確認していない(曾根田遺跡・府中石田遺跡など)。つまり、敦賀から東の越前では、平野部でも福井平野南東部の集落で多く出土し、坂井平野では出土はするものの、限られた遺跡やその一角での出土であると考えられる。つまり今回報告したタキ甕も古墳時代初頭の白江式の時期で、多数の「く」の字甕が出土した本遺跡の今回の調査の特徴と考えられる。

#### 註

- 1 このタキ甕は主に弥生時代後期から古墳時代にかけてのもので、中期の凹線紋系土器などに見られる時期のものも今回の検討の対象とはしていない。この時期の土器は濶などから大量に出土するもので、見落としや報告書に掲載されていないものも若干はあると思われるが、その傾向は大きく変わるものではないと考えている。
- 2 あわら市教育委員会 2007『南稲越遺跡』あわら市埋蔵文化財調査報告第1集  
金津町教育委員会 1995『金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～5年度』
- 3 丸岡町教育委員会 2006年『松木遺跡—丸岡町立丸岡南中学校建設に伴う調査—』丸岡町埋蔵文化財調査報告  
\*なお、その他の遺跡は当センターの報告書である。

## 写真図版



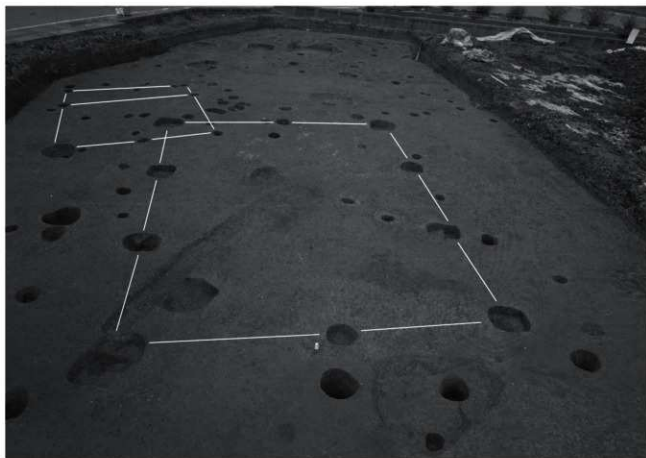
(1) I区(平成27年度調査区)近景 (西から)



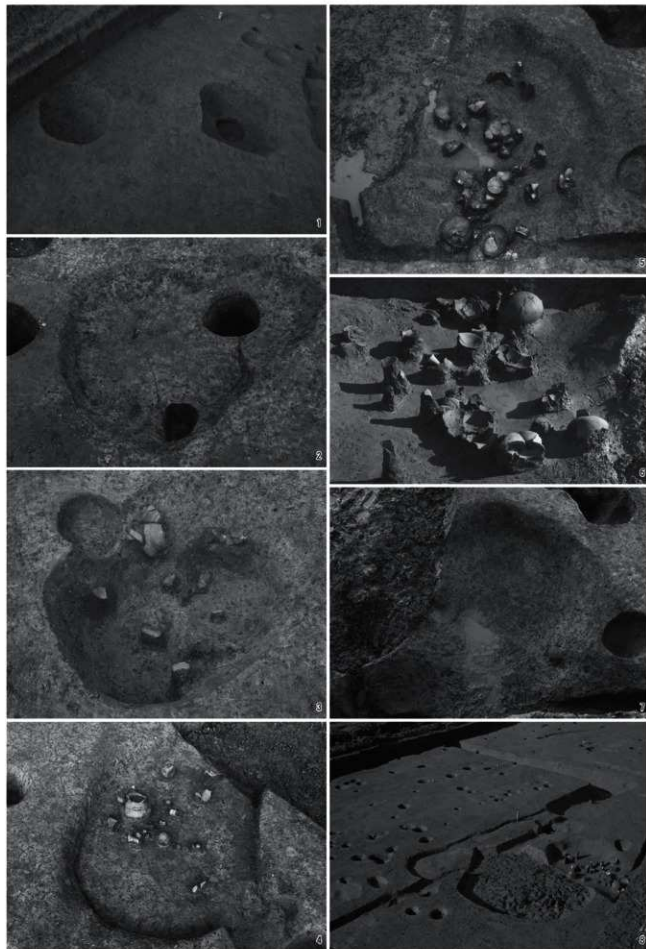
(2) II区(平成28年度調査区)近景 (南東から)



(1) I区全景 (北から)



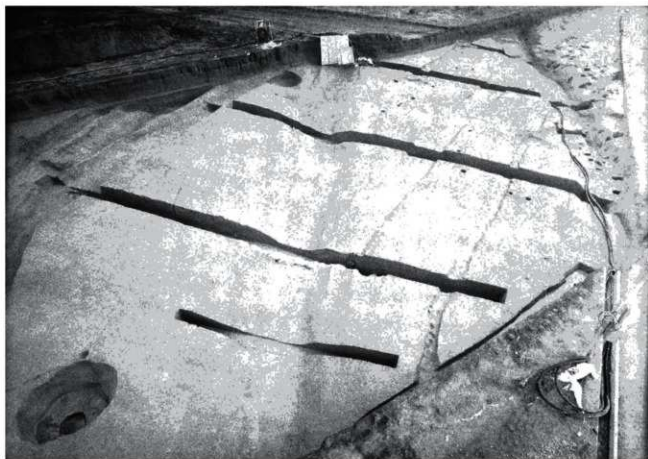
(2) I区SB2・SB3 (南から)



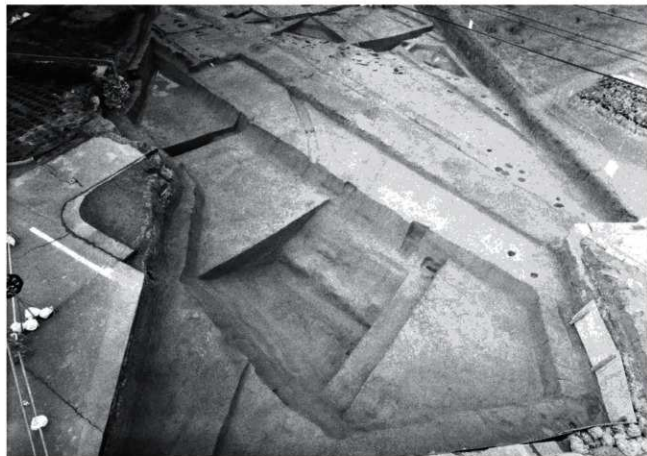
(1) I区SB1 (南から) (2) I区SK1 (南から) (3) I区SK2 (南から) (4) I区SK3 (南から)  
(5) I区SK4 (東から) (6) I区SK4遺物出土状況 (西から) (7) I区SK4完掘状況 (東から)  
(8) 23~26列掘削状況 (南東から)



(1) 1~13列全景(南西から)



(2) 15~19列全景(北西から)



(1) 17~20列近景(南から)



(2) III区(平成30年度調査区)全景(北から)